

# さいきよーの主夫

知多HB

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——忘れられた者たちの楽園、幻想郷。

今日も平和で素敵で刺激的な一日が始まる。

中心は氷精チルノ、ついでにくつついてる烏天狗と人間。

新たな異変の予感と共に戦いの火蓋が切られる。

「無敵のパーフェクトフリーズでなんとかしてくださいよオ！」

「任せなさい！ アイシクルフォール！」

「そつちじゃねえ！」

これは、妖精と妖怪と人間のお話。

# 目次

第1章【幻想入りから一年経って】	
第1話『妖精と妖怪と人間と』	1
第2話『人里と茶屋と巫女と』	8
第3話『寺子屋と先生と頭突きと』	18
第4話『ロリコンと超人と魔法使いと』	27
第5話『平和と素敵と刺激と』	37
第2章【そして、いつもの幻想郷】	
第6話『恋仲と犬猿』	47
第7話『ファンボーイと親心』	60
第8話『癒しとおっぱい』	72
第9話『おぜうと新聞』	85
第10話『頭とネジ』	96
第11話『天使と悪魔』	108
第III章【東方崇散郷】	Unknown
n c u r s e .	
第12話『怪異』	125
第13話『協力者』	144
第14話『闘争』	159
第15話『大戦』	177

	第16話『降雨』	192		第V章【東方白寵夢】	A p a r a
	第17話『散る華』	201		d i s e o f d i s t a n t d r	
	第18話『宴会』	220		e a m s ]	
	第19話『終息』	235		第25話『冬の訪れ』	L i d o n g
	第4章【再び、いつもの幻想郷】			—	336
252	第20話『ラブコメと喫茶店』		347	第26話『願望』	e g o i s t —
	第21話『チルコンと婚活』	271			
	第22話『大根役者と永遠亭』				
288	第23話『冬と平穩』	306			
320	第24話『人形使いと魔法使い』				

# 第1章 【幻想入りから一年経って】

## 第1話 『妖精と妖怪と人間と』

——朝。

「ここは人間と、『表の世界』で忘れられたものたち、妖怪、妖精などが共存する楽園『幻想郷』。」

その幻想郷にて人々が群れて暮らす人里、そしてそこから離れた山の麓にある霧の湖。さらにそこから少し離れた森の中に小さな一軒家が建っていた。

森の中の一軒家から、良い香りが漂う。

一軒家の中、台所で料理をしている男が一人。

手際よく皿を用意して料理を乗せると、皿を持って居間へと向かう。とは言うものの表の世界で言う1Kの家では持つていくというほどの距離でも無いのだが……。

「ふう……」

居間のちゃぶ台に料理を置く息を吐く男は、満足気に笑みを浮かべると台所に戻って二つの茶碗に米を盛る。

そうしていると、居間に敷いてある布団から誰かが起き上がった。

それは年端もいかぬ水色の髪の少女。

「チルノさんおはよう」

「んう……おはよ」

チルノと呼ばれた少女が男の声に返事を返す。

男は茶碗を持ってチルノの寝ている布団から少し離れた場所にあるちゃぶ台へと乗せた。

朝食が並べられるとチルノが布団から立ち上がり背中を伸ばしながら洗面所の方へと向かう。

少しして、欠伸をしながら洗面所から出てくるチルノは服装が変わり、青いワンピースを着て青いリボンをつけている。

「さ、食べますか」

「うん、いただきますー！」

「はい、召し上がれ」

男がそう言うと、チルノは太陽のように眩しい笑顔を浮かべて食事を始めた。

それを見て男は満足気に頷く。

「やっぱリヨウのご飯はさいきよーね！」

「チルノさんいつもそれですね」

ハハハと爽やかに笑う男。

この家に住んでいるこの二人。

一人は氷の妖精、氷精チルノ。もう一人は人間、リヨウ。

かたや幻想郷に住んでいた妖精、そしてもう一方は外からやってきた外来人と呼ばれる者。

二人がこうして一緒に住むまでには色々とあつたがそれはまたの機会に語れば良いだろう。

ともかく、二人がこうして同居していて幻想郷は今日も平和、という事実こそが大切なのだ。

「チルノさあん！」

ご飯を食べ終えて洗い物を終えた。そんな時に女の声と共に扉が勢い良く叩かれる。

リヨウが先程までの笑みを止めて顔をしかめつつ、扉を開いた。

生温い外気が家のなかに入ってくると、今度はチルノも顔をしかめる。

そして扉の先には、黒い翼をもった少女がいた。

「どうもー！」

「酷くやらしい射命丸文じゃないですか」

「清く正しい射命丸ですよ」

ニコニコして相対する射命丸文と呼ばれた少女とリヨウの二人。

「え、汚名丸?」

「射命丸ですよ。このチルノさんにつきまとう羽虫さん」

瞬間、二人の額に血管がビキビキと浮かび上がる。

一歩後ろに下がるリヨウ、一歩踏み出して家に入る文。そこでチルノが文の存在に気づいて箸を持った手を軽くあげた。

「あやだ、いらつしやい」

「お邪魔しますチルノさん! 今日でも可愛らしい!」

リヨウと相対する時とは正反対に心からの笑顔を浮かべる文。

台所でなにか始めるリヨウの横を通って文はチルノの元へと加速。

すさまじいスピードでチルノの隣へと座った。

「チルノさんチルノさん! 今日でも可愛いですね! 大事なでもう一度言いました!」

「ありがとう、あやもね」

「くうく! これはオツケーという」

ダンツ、という音と共に文の前に湯飲みが置かれる。

置いたのはニコニコと笑顔を浮かべているリヨウであり、置かれた文も笑顔を浮かべ



てリヨウに視線を向けた。

「粗茶ですがこのロリコンクソ鳥」

「あなたにだけは言われたくありませんよロリコンクソ召使い！」

二人が止まる。そしてクワツと目を見開くリヨウ。

「……誰がロリコンだ誰が！」

「あなた以外いないでしょうがこの性異常者！」

「テメエにだけは言われたかねえんだよロリコンドマゾ記者！ ぶち転がすぞ！」

「表に出なさい決着つけますよ！」

「おう良いぜ！」

リヨウがそう言うと言文はほどよくぬるいお茶を一気に飲んで立ち上がる。

「行きますよ！」

「洗い物するからちよつと待てや！」

「先に待ってます！ 辞世の句でも用意しておくんですね！」

怒声を上げながら家を出ていく文。

リヨウは文が使っていた『射命丸』と書かれた湯飲みを洗うと、家の鍵を締めてチルノの正面に座った。

別段驚くでもないチルノはこんな感じの光景を見慣れている故だろう。

「ふう……」

「リヨウ、良いの？」

「良いんだチルノさん、あんなロリコンと一緒にいたらこっちまでロリコンになってしまおう」

「でも魔理沙がリヨウはロリコンだって」

「あの白黒、今度絞める」

目を細めて眩くと同時に、家の扉が叩かれる。

誰かなんて考える必要もない。

チルノとリヨウはゆっくりお茶を飲む。

「ええい、騙しましたね！」

「うるせえ！」

「あんまりです！ 私を倒せないからつてえ！」

「烏天狗に勝てるか！ 常識的に考えて！」

「あんまりだあああ！」

「リヨウ、開けてあげれば？」

「……はあ、チルノさんがそう言うなら」

そう答えるとリヨウが扉を開ける。

プリンスコ怒っている文の文句を適当に聞き流しつつ、リヨウは再びお茶を淹れ始めた。

台所で言い争う二人の声を聞いてチルノは笑う。

「ホント、仲良いのよね」

「そんなわけではないでしょう!」

チルノの声が聞こえたのか二人からの抗議が家のなかにひびく。

それがおかしかったのか、今度はチルノが楽しそうに笑う声が家に響いた。

なんら変わり無い、いつもの風景。

## 第2話 『人里と茶屋と巫女と』

チルノとリヨウは時計を見て出掛ける準備を始める。

文もすぐに外に追い出して、リヨウが鍵を掛けた。

目的地はチルノもリヨウも同じ、人里。

追い出したということは外にはもちろん文もいるわけで、共に歩く。

「チルノさんは今日も寺子屋ですか？」

「うん、リヨウに宿題手伝ってもらったしけーねの頭突きもないよ！」

「あの半妖、私のチルノさんになにを……許さん！」

「チルノさんは誰のものでもねえだろうがクソ烏！」

「あなたのもでもないでしょうがクソロリコン！」

「いまスゲエブーメラン投げたからなお前！」

再び言い争いを始める二人を見て、チルノはため息をつきつつ歩み続ける。肩から斜めにカバンを掛けたチルノが進めば、文とリヨウの二人も“言い争いを続けつつ”チルノと共に歩を進めていく。

ちなみにチルノは未だにロリコンの意味を知らない。

「ねえ二人とも、ロリコンってなに？」

チルノの素朴な質問に、止まる二人。

ここで本当の意味を教えて許されるのだろうかという葛藤が同時に芽生え、それと共になんとかしようとして引つ張り出した答えは——1つ。

「と、とつても世話好きって意味ですよチルノさん」

「そうそう、そんな感じの意味合いです！」

リヨウが言うやいなや、すかさずフォローに回る文。

利害の一致というやつだ。

そしてここでリヨウにとつての誤算が生まれた。

「リヨウは文に悪口言つてたのに文はリヨウのこと褒めるんだ」

「あつ」

チルノの言葉にリヨウは顔をしかめて文の方を見た。両腕を上げて勝ち誇つたような笑みを浮かべる文を見て、リヨウが敗北感に駆られる。

すこしばかり考えるような表情を浮かべるチルノが手のひらを拳でポン、と叩いてひらめいたという表情を浮かべた。

「文はメスブタなのね！」

「!!？」

「くうくうキクツ!!」

驚愕に表情を歪めるリヨウとは別に恍惚の表情を浮かべる文。

しかし少しして文もリヨウと同じ考えに至った。

一体誰がそんな言葉を教えたのか、だ。

「酷いことされて喜ぶやつにはそう言えって魔理沙に教えてもらったのよさ!」

「殴りましょう」

「どの関節極めるかな」

二人はそれぞれ『魔理沙』と呼ばれる者への処罰を決めて頷く。

そういうところを見ていれば仲良く見えないでもない。

そんな二人は首を傾げながら歩き出すチルノの後を追うように歩き出すのだった。

しばらくして、人里へとたどり着くとチルノと文とリヨウの三人は人々からされる挨拶を返しつつつ目的地へとたどり着いた。

そこはチルノの通う寺子屋であり、リヨウの目的地その先にあるので前まではいつも一緒だ。

そして寺子屋の前には一人の女性が立っていた。ちなみに胸は豊満で青い服を着て胸は豊満である。

「おはよう、チルノ」

「おはよ、けーね」

「チルノさん、先生をつけるべきです」

「せんせー!」

リヨウからの指摘を受けてそのまま続けて言うチルノに苦笑しつつ、けーねこと上白沢慧音は頷いた。

笑顔を浮かべてリヨウと文に手を振り寺子屋へと入っていくチルノ。

「そんじゃよろしくお願いします慧音先生」

「ええ、そちらもすっかり馴染んだようだなによりです」

笑みを浮かべて頷く慧音にリヨウも頷く。

リヨウが来てから、この人里でちよつとした事件もあつたし慧音も心配はしていたのだが、それもすっかり杞憂であつたと思わされるほど、外来人の彼はここに適応していた。

チルノを追つて中に入ろうとする文の首根っこをリヨウ掴んでおく。

顔をしかめた文がそこでふと、リヨウの方を見た。

「今日は大妖精さんは一緒じゃないんですか?」

「大ちゃん、今日は早く行くつて言つてたからな」

その返答に頷く文。

「それでは慧音さん、俺も行きますんで」

「はい、ではまた夕方に」

爽やかな笑顔を向ける慧音に手を振りつつ、リヨウは文を引つ張つて寺子屋から離れていく。

その間も文が名残惜しそうに寺子屋に手を伸ばしていたが離すわけにもいかない。

「ロリコンを寺子屋に解き放つわけには……」

「失礼ですね！ 私は確かにロリコンのドマゾですがチルノさんにだけですよ！」

「なお近づけたくない！」

そんなことを良いながら、リヨウが一件の茶屋の前に着く。

いや、茶屋というよりそこは表の世界で言う喫茶店に近いだろう。

そんな茶屋の前で、リヨウは文を離す。

「ここまでか……」

「私も仕事があるので残念です」

チルノを隠し撮りよりも仕事優先なところは誉めてやりたいとリヨウは少しばかり考える。まあすぐに『無いな』と数度頷くのだが……。

翼を広げる文。



「それではリヨウ」

「おう、またな文」

お互いがお互いを呼び捨てにして、別れる。

文は仕事である新聞のネタ探し、リヨウの方はその茶屋で仕事。洋風な扉に鍵を差し込んで開くと、カランカランと音が鳴る。

小気味良い音の余韻を聞きながら、リヨウは静かに扉を締めた。

「さて、今日もお仕事頑張るか」

茶屋『レインメーカー』の一日が今日も始まる。

それからしばらくして、時刻は昼過ぎ。

「ご飯時ともなると客足もずいぶん増えて忙しくもなるのだが、ピークも去って一区切り。」

客足も減ってゆったりとできる時間になると、リヨウはレインメーカーで働く少女の方を見る。

「妹紅さん、ここままで良いよ」

「そう？」

リヨウが呼んだ藤原妹紅が振り替えた。

白いポニーテールを揺らし、白いシャツに黒いベストとパンツを纏う少女は可愛らしさはもちろんだがどことなくカッコ良さもある。この店に彼女を求めて男性客も女性客も来るのだからリヨウにとってにはありがたい話だ。

「ええ、もうピークも過ぎましたから夕方まで客も少なくなるだろうし」

「そっか、そんじゃ『店長』お疲れさん」

「はい、お疲れさま」

そう応えると、妹紅は裏の方へと下がる。

すると、妹紅と入れ替わるように誰かが入ってきた。

そちらを見るリヨウは既に見る前から誰が来たか予想はついているという表情をしている。

「いらつしやい霊夢さん」

「ん、リヨウさんおはよ」

入ってきたのは博麗霊夢。

人里から少し離れた場所にある博麗神社の巫女であり、この幻想郷と表の世界の垣根である博麗大結界を代々守護する者。それと同時に魑魅魍魎が跋扈するこの幻想郷のバランスを保ち、異変を解決するということを生業にしている。

リヨウも彼女の世話になったことがあつたのだが……。

「霊夢さん、ツケが溜まつてるよ」

「わ、わかっているわよ。ほら、今日は返しに来たのと……なにか食べさせて」

「ツケで？」

「……まあそうなるけど」

「プラスマイナスゼロね、霊夢」

ケラケラと笑いながら表れる妹紅に苦笑するリョウ。

今の妹紅は先程と違い白いシャツに赤いもんぺ、サスペンダーをしている。これが妹紅の私服であった。

霊夢はバツの悪そうな表情を浮かべながらリョウの向かいのカウンター席へと座つて頬杖をつく。

「そんじや店长、また明日」

「また明日」

妹紅が出ていくと、リョウが霊夢にコーヒーを出した。

「サービス、あんまり期待されても困るけど」

「ありがとうリョウさん！」

パアツ、と表情を明るくする霊夢を見てやるせない気分になるリョウ。

「とりあえずいつものランチセットで」

「こっちはツケですからね？」

「わかつてるわよ！」

そう良いながら満面の笑みを浮かべる霊夢。

リヨウは苦笑しながらも包丁で具材を切つて、パンに挟むと皿へと乗せてカウンター越しに霊夢へと渡した。

「いただきます！」

晴れ晴れとした表情の霊夢を見ていると普段からその表情で居れば参拝客とお賽銭も増えるのと言いたい気持ちも出てくるのだが……そんな霊夢はむしろ異変だ。

両手でサンドイッチを持って食べる霊夢を見て、リヨウは口元を綻ばせる。

「そうしていると年頃の女の子ですな霊夢さん」

「なっ、なによ、人がご飯食べてるとこ見るなんてリヨウさん悪趣味ね」

「ははは、すみません」

少しばかり顔を赤くして抗議する霊夢に素直に謝つたりヨウ。

サンドイッチを半分ほど食べてから霊夢がそれを皿に置く。口元についたソースを親指で拭つてからリヨウを見て言う。

「文は一緒じゃないの？」

「当たり前でしょ、仕事だろうし」

「いつも一緒にいる気がするからね、そうも思うわよ」

「ここらで仕事してるなら来るかもしれないけど、たぶん夕方までは来ないはずですよ」  
「へえ、あんたら仲良いわね」

「ははっ、ご冗談を」

そう言つて笑うリヨウを、霊夢は怪訝な顔をして見る。

チルノのことで良く言い争いをしているのは見かけるし聞くのだが、どうにも本気で喧嘩しているところを見た覚えはない。

「ま、私には関係ないことか」

妖精と妖怪と人間という、奇妙な関係はすっかり幻想郷に馴染んでいるのだ。

博麗の巫女も賢者ですらもそこに関与することではないだろう。

仲良きことは良きことだ。

「霊夢さん、烏天狗の唐揚げってどう思います?」

「やめときなさい」

「ですよ、変態がうつつても嫌ですし」

「あんたら仲良いのよね!」

「やだなあ、悪いですよ」

仲良きことは良いことだが……これは微妙だなと、霊夢は苦笑した。

### 第3話『寺子屋と先生と頭突きと』

時は過ぎて夕刻。

リヨウは自分の茶屋こと『レインメーカー』の扉を閉めて鍵をかける。

昼過ぎにやってきた霊夢も一時間もしない内に帰り、リヨウはたまに来る客と軽く話すぐらいであまり忙しくもなく……そのままこの時間になつて店を閉めたというわけだ。

外に出ると、上から誰かが降りてくる。

リヨウはなんの疑問も顔に出すことなく、手に持ったカバンの中からラップに包まれたサンドイツチを出した。

それを、降りきると同時に受けとるのは射命丸文。

「ありがとう」

「100円」

「今度払いますんで」

文の言葉に頷いて歩き出すリヨウ。そんなリヨウの横を歩いて着いていく文。隣でサンドイツチを食べながら歩く文と共に向かった場所は寺子屋だ。

前に着くと同時に戸が開かれて、中から誰かが出てくる。

「ああ、リヨウさん」

「こんにちは慧音先生、今日もありがとうございます」

「いえいえ、こちらも毎日できるわけではありませんから……」

寺子屋は本来は人間の子供たちのために開いているものだ。

故に、チルノのような妖精等の人外に寺子屋を開けるのは休日のみになる。

「慧音先生も休みたいでしょうに」

「私はあの子達がものを覚えていくのが楽しいんですよ、特にチルノが妖精なのにテストで良い点を取ると跳ねたくなりますよ」

「私もチルノさんが良い罵倒をくれると跳ねたくなりますよ！」

「黙ってる駄天狗」

クスリと笑って言う慧音の言葉に笑みを浮かべて、文に罵声を浴びせた。

そうしている二人を見て慧音が微笑むが、ハツとした表情になる。

不思議そうな文をよそに、慧音はリヨウの方を見て申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「申し訳ない……『妖精なのに』なんて」

「ああいえ、慧音先生が悪い意味で言っているとは思ってませんよ」





「それ以外がからつきしですが……」

そう言つて肩をすくめる二人の元に、誰かが走つてくる。

そんなミスティアよりダメなのがその走つてきて、そのまま跳んでリヨウへと飛び込んだ少女だ。

金髪と赤いリボンがリヨウの鼻先で揺れる。

「ルーミア」

「リヨウ、おはよう」

ニパアツ、とか効果音が付き添うな笑顔を浮かべる金髪の少女ことルーミアに、笑顔を向けるリヨウ。

文は少しばかり悩むような表情をしてから、首を横に振る。そしてそんな文をジト目で見る慧音。

そう言えばと、ルーミアがリヨウの腕の中から退く。

「リヨウと文と慧音はロリコンだつて？」

「え？」

そんなルーミアの言葉に、文とリヨウがハツとする。それとほぼ同時に文の腕を掴むリヨウ。

顔をしかめる文に首を横に振りつつ慧音の方を見ると、啞然としてそれ以上の反

応は無い。

「私が教えてあげたのよさ」

そう言つて現れる氷の妖精チルノ。

得意気にドヤ顔を疲労しながら現れるとピシツとリヨウと文を指差した。

片目を閉じてウインクをするように言う。

「世話好きな人をそう言うつて二人に教えてもらったのよ」

フフン、と胸を張つて言うチルノに文が『かわいい』と言葉を溢す。

そつと近づいた慧音が、まず文の頭を掴む。

慧音の表情は前髪に隠れて見えない。

仕方ないと思う。今回のことは、慧音の名誉にも関わることだ。故に――。

「お、お待ちになつて!」

「なんだ?」

「わ、私たちは良かれと」

「子供に嘘を教えるな! しかも色々あぶない!」

そう言うと同時に、慧音の頭が振るわれる。

頭と頭がぶつかった鈍い音がして、頭突きを受けた文が倒れると『ひっ』と声が出た。

明らかにルーミアのものだ。

ロックオンされたことを理解して、リヨウが慧音の方を見た。

「慧音、なんで文とリヨウを頭突きするのよ!？」

チルノに、リヨウが首を横に振る。

その表情は穏やかで……。

「チルノさん、ロリコンのことは、その……嘘なんで、言いふらしちゃあダメだ。ダメなんだ」

「えっ、なんで？」

「あれは、その……」

「な、なんでそんな嘘を!？」

「チルノさんは、知らなくて良いことなんだよ」

その言葉にさらに追及しようとして、チルノは止まる。

リヨウの悲しげな表情を見て、だ。

頷いてフツ、と笑みを浮かべたリヨウが慧音の方を見た。

「別れはすんだか」

「はい」

「待って慧音!」

瞬間、頭が振るわれ、その一撃がリヨウの頭部に直撃した。

倒れるリヨウ、チルノがリヨウへと駆け寄る。

ロリコンなんて言葉を覚えさせてはいけないという、二人なりにチルノを思つての行動だったのだ……たぶん。

「リヨウー！」

叫ぶチルノ、その後ろで悲しげな表情をしている慧音。その後ろでよくわからないという表情をしているルーミア。

そして寺子屋から出てきた、緑髪をサイドポニーにした胸が豊富な妖精こと大妖精と夜雀のミスティア・ローレライ、さらに大妖精よりも深い緑色の髪を持ったショートカットの“少年のような少女”リグル・ナイトバグ。

困惑するような表情を浮かべる三人だが、リグルが口を開いた。

「なにこれ」

その言葉にハツとした慧音が顔を真っ赤にして頭を押さえる。

「なぜ私はこんな三文芝居をお?!」

倒れてるリヨウと文。

二人の目は開かれており、額は赤くなっている。

お腹あたりで顔を埋めているチルノを見つつ、リヨウは呟く。

「痛みは本物だけだな」

「超痛いんですけど……てかチルノさんにくつつかれてるの羨ましいんですけど」  
「うるせえロリコ……バカ鳥」

「ストレートです、ねこの軟弱もやし」

小声で悪口を言い合いつつも、二人が同時に起き上がる。

そんな二人を見て、チルノが固まった。

首をかしげる文とリヨウ。

「あやとリヨウが蘇ったあ!?!」

「本気で死んだと思ったんですか!?!」

「はははっ、俺はまだ死にませんよ」

「早く死んでください」

「あ?！」

「あ?！」

驚愕するチルノ、突っ込む文、笑うリヨウ。そしてキレル文とリヨウ。

これもまた日常の1ページ。異変でもなんでもない日常。

キレていたもすぐにいつも通りに戻るリヨウが額を撫でる。

「にしても痛い、痛すぎる……」

「人間のリヨウさんには手加減しましたけどね」

「え？」

## 第4話 『ロリコンと超人と魔法使いと』

一通りのばか騒ぎのようなものが終わって、チルノとリヨウと文、そして大妖精は森の中を歩いていてた。

ルーミア、ミスティア、リグルとも別れて少し、もうすぐ家というところで、ふと大妖精がリヨウの方を見る。

「ん、どうした大ちゃん」

「リヨウさんって敬語だったり普通にタメ口だったりしますが、それで結構印象変わりますよね」

「そうか？」

そんな話をしていると、チルノが浮遊して後ろ向きに飛びながらリヨウを指差す。

「それはあたいも思ってたけど、リヨウってちよつとおかしな口調よね。バラバラな感じだよ」

「……敬語なら文も使ってますし、というよりチルノさんは家主ですし尊敬もしてますし」

「でもたまにタメ口が混ざるじゃない？」

チルノの言葉にリョウはすこしばかり項垂れる。

言いたいこともわかるし伝わってはいるのだが現状ではなんとも言えない。リョウとして理解していることでもあるのだ。

歩きながらもチルノの方へと視線を向ける。

「チルノさんは、どういう口調が良い？」

「別になんでも良いけど……半年前に初めて会った時からずっとそうだったし」

「なら今まで通りこれで」

そう言つて笑みを浮かべるリョウに、チルノも子供っぽい笑顔で答えるとそのチルノの隣にいた大妖精も微笑ましそうに笑顔を浮かべる。

なんな中、リョウの隣にいた文が悪そうな笑みを浮かべて言う。

「キャラ作りの真っ最中なんですよきつと」

「お前は……余計なことを言うな」

「否定はしないんですねー」

バツの悪そうな表情を浮かべてリョウがため息を吐くと、大妖精が苦笑を浮かべた。

大妖精が初めて出会ったときのことを思い出せば確かに口調が変わっているのは明らかだ。

「キャラ作り？ リョウがなんでまた？」



「色々あるんですよ。半年続けてても慣れませんが」

「まあチンピラみたいなの口調でしたからねー」

そんな文の言葉にチルノが『チンピラ……？』と興味を示した。

「おい余計なこと言うなマスゴミ」

「余計なこと言うのがマスゴミですからね！」

「そんなんだからマスゴミなんて言われんだろ！」

そこでふと、文が止まった。

目を細めてから、キョロキョロ辺りを見回すようにする。

不思議そうな表情で……。

「お前しかおらんわ！」

「あやや、この清く正しい射命丸がマスゴミ？　ハハハ、またまたご冗談を」

「くっ、殴りてえこのクソ鳥！」

大妖精は内心『そんなんだからチンピラと言われるんじや』とも思ったが言わぬが花

だろうと黙っておくこととした。

しかしそんな二人を見慣れた大妖精もチルノも笑いながら共に歩く。

そうして歩いていると、ふと大妖精がなにかに気づく。

「あ、そう言えば明日は寺子屋お休みだけどチルノちゃんは予定ある？」

「んーないー！」

ニコツと太陽のような笑顔で笑うチルノ。

そんなチルノに大妖精がなにか言う前に文がスマホの連写もピツクリな速度でカメラのシャッターを引きながら言う。

「あややチルノさん、この射命丸とデートでも」

「おい哨戒天狗さん呼んでくるぞコラ」

山の方で狼がくしやみした。

「触んなきやセーフ！ セーフですから！」

「お前絶対触るだろ！」

「いやリヨウ、そりや触らなきや据え膳に失礼つてもんで」

「殺すぞー！」

額に血管を浮かび上がらせながら言うリヨウに、頭に欠陥を抱えているのではないかという台詞を言った烏天狗の汚名丸もとい射命丸文は小首をかしげた。

そして彼は額どころか手の甲にも血管を浮かび上がらせる。

「ま、まあまあリヨウさん」

「止めないでくれ大ちゃん！ こいつだけは許せない！」

「ねえ大ちゃん、据え膳つてなに？」

理性と良識のあつた大妖精は『可愛く無防備なチルノちゃんのことだよ』とは返せなかつた。

無論、保身のためである。

無難な答えを探そうとする大妖精だが、その長考がまた現状を変えていく。

大体、射命丸文の仕業である。

「この射命丸文、チルノさんルート一直線!」

「いつも頭のネジ飛んでると思つてたけど今日さらに抜けたか!」

さらにネジが抜けていたとしたら無論、今日の上白沢慧音の仕業だ。頭突き怖い。

しかしながら一番の恐怖は文がシラフで言っているということだろう。モチのロン

でリヨウと大妖精は承知している。

文は自らの胸（豊満）に手を当てて高らかに宣言。

「私はチルノさんルート、ならチルノさんは私ルート一直線です!!」

「大ちゃん! こいつは殺そう!」

「私もそう思います!」

大ちゃんはいつも通りだった。

そして臨戦態勢に入った三人を見て伝統の『弾幕ごっこ』かとチルノも戦闘態勢に入

ろうかというその時……。

「おーおー今日もロリコン共が騒いでら」

そんな台詞と共に降りてくる金髪白黒普通の魔法使い。

乗っていた箒を降りてケラケラと笑いながら四人を見ている。

その悪名高き魔法使いの名は……。

「魔理沙！」

霧雨魔理沙。

チルノが眩しいまでの笑顔を浮かべてその友人の登場を喜ぶが、件の射命丸文<sup>ロリコン</sup>とリョウは違った。

文が最高レベルの妖怪である烏天狗持ち前の身体能力で魔理沙の後方に回り込んだ。

「な、なんだ!？」

焦るような声を出す魔理沙。

だが文には魔理沙をどうにかしてやろうという明確な理由がある。そしてそれは彼も然り。

ザツ、と文とは対になるように立つリョウ。

二人が腕を振り上げる。

「マグネットパワープラス！」

「マグネットパワーマイナス！」

そんなものは無いが叫ぶ文とリヨウ。なにかが彼女たちのテンションを狂わせていた。

しかしチルノは目を輝かせながらその光景を見ている。

大妖精が驚愕の表情を浮かべる。

「まさかあれは!」

「なにこれ!?!」

焦る魔理沙をよそに二人が走り出す。

そして二人が魔理沙を挟み込むようにラリアットをかける。つまりは……そういうことだ。

「クロスボンバー!!」

文とリヨウの合体技ツープラトンにより、魔理沙は声にならぬ声を出して倒れた。

二人は顔を会わせて頷くと無言でハイタッチ。

謎の息の良さを見せつけた……ただし身内に。

「ま、魔理沙さあん!?!」

「文とリヨウつたらさいきよーね!」

やりきった表情の二人。今日のもろもろの恨みを晴らした。

さすがに（チルノ関係のことを除きさえすれば）まともで良識ある大妖精は魔理沙を

心配するも、次の瞬間には魔理沙がガバツと起き上がる。

「死ぬかと思った！」

「あやや、チルノさんの前でそんなことしませんよ」

「いて良かったチルノ！」

おそらく冗談ではあるはずだ。

「てかなんで文とリヨウに技かけられたんだ!？」

「おや魔理沙、覚えがないと？」

「うん！」

勢いよく首を縦に振る魔理沙に笑顔を浮かべる文。

「次は間接技サブミッジョンがお望みらしいですよリヨウ」

「しかたないなあ魔理沙」

「まてまてまて! なんでなんで!？」

すでに半泣きになっている魔理沙を相手に容赦しない1000歳越えの大妖怪と20過ぎの男。

端から見たら明らかにヤバめな図。

ことの発端と経緯をしっている大妖精がそつと魔理沙に近寄って耳打ちをする。

黙って待っている文とリヨウ。

「……ということですよ」

「……あーなんていうか、そのだな」

ニコニコ笑う文とリヨウ。

逆に怖いそんな二人を見て魔理沙は顔を反らす。

「貸しーつですわね」

「あんな技かけといてまだ足りないのか!？」

「まあまた異変とかあつたら協力してもらおうだけですよ」

文の言葉にろくでもないお願いをされるパターンしか浮かばない。

正直ここで適当に口約束だけしてしまえば良いのだが……。

「ちなみにここで負けを認めないと慧音先生の頭突きがセットで飛んできかねないよ」

「……くつそお、わかったよこのチルコンどもめ!!」

さすがに慧音の頭突きはこわい魔理沙は仕方ないと頷く。

そんな言葉に文とリヨウが揃って不敵な笑みを浮かべる。

「チルコンですか、私たちには誉め言葉ですよ!」

「……いや俺を一緒にすんなよ」

「え?」

「え?」

そんなやりとりをする二人を前にガクツと肩を落とす魔理沙は、今度チルノに余計なことを吹き込むときは色々警戒しようと呼ぶ。

そして大妖精はそんな二人と一緒にされたくないなと思いつつ、自分に抱きついてリョウと文が勝つたと喜ぶチルノの感触を楽しむのだった。



## 第5話 『平和と素敵と刺激と』

悪い普通の魔法使いへの過剰な攻撃と執拗な口撃で結果的に後々への布石を打った射命丸文とリヨウ。

金髪の子かわいそう。ただし自業自得の部分もあるが……。

拗ねたように帰ろうとした魔理沙にリヨウが『レインメーカーのクーポン』を渡す。それなりの人気店のそれなりのクーポンを渡せばそれなりに機嫌は良くなる。

「おっし、まあ一回ぐらいの貸しだしいいか！」

「魔理沙一気に元気になったね」

「まあ慧音の頭突き回避しつつこれも渡されたんじゃない、結果的に得……ではないけど採算はとれたんだよ」

「魔理沙のくせに難しいこと言うのよさ」

「言ってたか？」

首をかしげる魔理沙はチルノにとってどこが難しかったのかまるでわからない。

昔なら『妖精はバカだからな』で済んだものの、リヨウと出会ってからチルノは確かに大人になったと言うか大人しくなったというか、子供っぽいところがなくなるとか

言うわけでもないのだが、つまり賢くはなつてはいるのでチルノがどこがわからないのか気にもなった。

というより少しバカにされたのも気になる気がする。

「チルノさん、採算つて利益とかと意味は変わらないですよ」

「おーなるほど」

「そこか、よくわかるな……てか利益はわかんのか」

そんな魔理沙の言葉にリヨウはニコニコ笑いながら頷く。

伊達に喫茶店こと茶屋のオーナーと一緒にいないということだろう。

ともあれリヨウにドヤ顔されたところでまるで自慢にもなっていないだろうと思った

魔理沙だったが、自分以外には効果があつたらしい。

「くっ、私だつてそのぐらいチルノさんのことはわかってましたよ!」

「いや別に俺だつて自慢したいわけじゃないしな?」

「得意気な顔しといてなんですかこのロリコン!」

「お前自重してたのにまたそれ言つてんじやねえよ!」

また二人の不毛な言い争いが始まったと肩をすくめる魔理沙。

第三者から見たらどっちもどっち、双方歪んだ性癖の持ち主には見える。

無論、二人をよく知っていればリヨウの方が安心感はあるが……。

「てかあたしもそろそろ行かなきゃな」

「弾幕ごっこしてかないの？」

「これでも魔理沙さんは忙しいんだぜ？ 今度相手してやるよ」

「んっ」

チルノの頭を軽く撫でる魔理沙。

大妖精が側で微笑ましそうに微笑んでいるのを見て逆に魔理沙が照れ臭くなり、早く行こうと箒にまたがった。

リヨウと文の二人の言い争いもいつの間にかやら終わっていらしい。

「そんじゃな、リヨウもたまには弾幕ごっこ付き合ってくれよ」

「考えとくよ」

そう応えると満足なのか魔理沙は飛んで行く。

後頭部を搔くリヨウを、隣の文がニヤニヤと笑いながら見る。

そんな文の顔に手を当てて離すと再び歩くのを再開していくリヨウ。それに合わせて歩いていくチルノたち。

そこで大妖精が思い出したかのように手をぼんと叩く。

「そう言えば、明日の予定の話してましたよね」

そして戦いの火蓋が切られる。

「私とチルノさんのデートの話！」

「都合良いように改編してんじゃないよ！」

「私とチルノちゃんのデートですよ！」

「大ちゃんももうちよつと冷静になつてくれ！」

「デートつてリヨウと出掛けてるときに結構言われるわよね」

文と大妖精と顔を合わせないように前方だけ見るリヨウ。

今、顔を合わせて余計なことを言われると変なことになると確信がある。

どこぞの吸血鬼よろしく運命がわからなくなつたつてわかることだ。

しかしして動揺からか、余計なことを言つてしまう。

「明日は店、定休日なんでどっか出掛けますか？」

「あややや!! なに自分はデートに誘つてるんですか!？」

「これはリヨウさんでも許されませんよ!？」

「いや待て待て! みんなでな！」

ついつい不用意な発言をしてしまったため、上手くリカバリしようとしてさらに余計なことを言つた気がする。

しかしまあ、リヨウとしてもこれはこれで良いと納得することとした。

あとは二人の同意だが……。

「さすがリヨウ、信じてましたよ」

「みんなでお出かけ楽しみだね、チルノちゃん！」

不覚にも手が出そうになった。主に文に。

犬猿というかなんというか、ちなみに周囲からは同族嫌悪という認識だ。

もちろんペドフィリア的な意味で。

「ねえリヨウ！ どこいくの!？」

「……文」

「んー、明日は守矢神社に取材に行く予定なんですよねー」

「つてことです、チルノさん」

「諏訪子たちのとこだね！」

まあなにはともあれ、チルノが楽しそうなので良いかと、リヨウはフツと笑みを溢した。

もう家も近く、大妖精も同じく近いがここで別れる。

「それじゃあまた明日っ！」

ニツコリと笑顔を浮かべる大妖精に同じく笑顔で大きく手を振るチルノ。

リヨウと文も笑みを浮かべて軽く手を振る。

やはりそうして見ると、チルノより幾分か大人に見えるのは落ち着いた雰囲気か

……。

「良いおっぱいですね」

「節操なしか、自分の揉んどけ駄鳥」

「自分の揉んだって仕方ないでしょ、それともここで一人シロとかいうセクハラ!？」  
「待てやめろバカ!」

全力で止めるリヨウ。

一応二人の話を聞いているチルノだが小首をかしげるのみだ。  
わちゃわちゃ話をしながら家ノ前までやってくる。

「それじゃーね文!」

「はい、また明日!」

忙しい様子で家の中に入るチルノを見て文とリヨウが頬を綻ばせた。

リヨウも家へと入ろうとするも……。

「あありヨウ、明日は少しばかり遅れると思います」

「なんでまた?」

「会議、天魔様までいるからさすがにさぼるわけにも、ね?」

妖怪の山、天狗たちの首領こと『天魔』がいるとあれば文のような上位の鳥天狗が出ないわけにもいかないのだろうけれど……。

訝しげな表情で、リヨウは文と目を会わせる。

文の言いたいことは理解できるし、また文もリヨウの言いたいことはわかった。

「また他の天狗の嫌みを聞かされるわけか」

「ホント、しんどい」

深いため息をつく文にリヨウはさすがに同情もする。喧嘩が多い二人だが別に嫌いあっているわけでもないのだからそれぐらいいはあるのだろう。

特に天狗の社会は役職や上下関係がしっかりとされた組織的な縦社会。

それに天狗という種はその伝説や伝承から種としてのプライドが高い者も多いらしい。

「どーでも良いと思うんだけど」

「違う……と人間の俺は思うけどな」

その天狗たちの中でも指折りの実力者である烏天狗の射命丸文。

そんな彼女が普段から、よくわからない“外から来た人間”や“知能や程度の低い妖精”と共にいればあらぬ噂は立つし嫌味も言われる。

「ま、辛抱だな」

「わかってても、嫌味がチルノさんを侮辱するようなものだと正直、手が出そうに」

「……俺の悪口とかあんの？」

「ある、なんなら私も言ってる」

「うおい!？」

そんなリヨウの反応にケラケラ笑う文が、バサツとその黒翼を広げた。

なんだかんだと言っても信念はどこか似たような所があり、同じような理由でチルノに惹かれたことには変わりない。

結果、惹かれ方に差異はあるが一年も共にいたのだ。

「それではまた明日!」

「気をつけてな」

そんな言葉に文は頷いて返すと空へと飛び立つ。

すっかり日も落ちた空の闇に同化しつつも、その夜空の黒よりも黒い翼はしっかりと目視できた。

フツ、と笑みを溢すとリヨウは家の中に入る。

「ただいま」

「おかえり! リヨウ!」

ただの数分しか変わらず、家ノ前まで一緒にいたのに家に入った途端、チルノは嬉しそうに言っけてリヨウに抱きつく。

その頭をそつと撫でるとくすぐったそうに目を細めるチルノを見て、さらに頬が緩む



感覚を覚えた。

玄関から靴を脱いで上がると、二つのコップにお茶を淹れる。

「さて、ご飯にしますか……些か疲れた」

「いっつも文と楽しそうだもんね」

「どこがですか」

さすがに顔をしかめるリヨウだが、他人から見ればやはりそんなものだ某の猫とネズミのように仲良く喧嘩している。たまにやりすぎないように見えるがそれでもあのノリだし、なにより……。

「チルノさんは、楽しいですか？」

「ん？ ……うん！」

ニコツと笑みを浮かべる彼女を見てリヨウはしかめた顔に再び笑みを宿す。

なにはともあれ、幻想郷は今日も平常運転。

神社の紅白巫女は貧乏に嘆き、森の白黒魔法使いは研究に没頭し、紅い館のメイドは居眠り門番を仕置き、冥界で半人半霊は稽古に精一杯、山の神社では風祝が飯を作る。

そんなありとあらゆるここで一日が今日も過ぎ行く、毎日がどこか違って、それでも同じ様で……。

楽園の素敵な住人たちはそれぞれの平和と問題を抱えつつ生きる。

季節は3月、まだ少しばかりの肌寒さを感じさせつつも玄関先に咲いたフリージアの花が季節の変わりを感じさせていく。

そして、平和で素敵で刺激的な一日が今日も終わっていくのである。

## 第2章【そして、いつもの幻想郷】

### 第6話『恋仲と犬猿』

忘れ去られた者たちの楽園、幻想郷。

朝、というには遅い時間。時刻にして10時。

人里離れた霧の湖方面にある一軒家から勢い良く出てくる氷の妖精チルノ。遅れて出てくるのは緑髪のサイドポニーを揺らす自然たちの具現、大妖精。

「ん、少し肌寒いね」

「そお?」

「チルノちゃんは強いなあ」

「さいきよーだからね!」

3月の残寒に少しばかり身を震わす大妖精と反対に、チルノは元気に笑う。そして最後に家から出てくるのは人間、リヨウ。

「まだ長袖は必要か……」

「チルノちゃんといつも一緒にいるのに寒さに苦手って言うのも、なんだかおかしいですね」

「チルノさんが冷気のコントロールを身につけてから数ヶ月ですからね、ひんやりするのに変わりないけど」

笑って言うリョウがそつとチルノに近寄ってその頭をそつと撫でる。

「さすがに暖かくはなりたくないのよき」

「そうなれなんて言いませんよ、ねえ？」

「ん、そうだよチルノちゃん」

そして大妖精はチルノの手をとった。たしかに冷たいが、その程度だ。

かつては凍傷になりかねないというレベルだと思うとずいぶん触りやすくなった。

「……あのクソ鳥が触ってきたら冷気全開で良いですからね」

「？」

訳がわからないのかチルノは小首をかしげる。

そして大妖精は『またチンピラ出ちやつてる』と思いつつ口の悪さがチルノにうつらなければ良いけど、と少し心配にもなった。

チルノの害にならないと信用しているから大妖精もチルノを任せてはいるのだが

……。

「さて、とりあえず妖怪の山に行くか、索道ですぐ着きますし」

「文さんは遅れてくるんでしたっけ？」

「らしいよ、縦社会は大変ですね」

ハツと笑うリヨウが肩掛けカバンの位置を調整して歩き出す。

その前を手を繋ぎながら歩くチルノと大妖精。

親子のようにすら見えるその姿もまた、見慣れられた光景である。

しばらくして、妖怪の山の索道近くまで歩いてきた三人。

そんな三人の目の前に見知った顔を見つけた。

文とは仲がよろしくない相手というのは周知の事実でもあり、結果リヨウとは息が合う。

「椀、お疲れ様」

「リヨウさんですか、それにチルノさんと大妖精さんも」

微笑を浮かべるのは白狼天狗の犬走椀。

リヨウは以前、色々と世話になったことがあり出会えば世間話やらなんやら、故あってデート紛いのことまでした結果、どこぞこパパラッチのネタになったりと気苦労が絶えない。

チルノと大妖精が笑顔で挨拶をする。

「おはようございます椀さん」

「おはよーもみもみー」

「おはようございます、チルノさんもみもみは勘弁を」

「もみー！」

「それならまあ」

哨戒天狗は神経を使う仕事でもある。それは内から外から上から下からと……。

故に純粹な二人を見て心癒されると、リヨウが羨ましくもなる。

「これから……文さんのところですか？」

「いや、守矢神社に」

「なら索道ですか」

その言葉に頷いて、リヨウはチラリと道の先を見る。

すでにそわそわしているチルノと困ったようにリヨウの方を見る大妖精。

早くしなければ催促を受けるだろうと笑って権に別れを告げる。

「それじゃまた」

「はい、また行きますね」

喫茶店ことレインメーカーに、ということだろう。

頻繁にリヨウの家に用もなく来るような相手は文と大妖精ぐらいのもので、たまに来るとしてもチルノの友達。

残念ながらリヨウに浮いた話など録に無いのも事実。

「ま、欲しいとも思つてないけど……」

そう呟いてからなんだか寂しいやつと言ひ訳臭いなど、苦笑を浮かべる。

だが、今はチルノたちと過ごす日々になんほどの変化が必要でないと思つているのも確かだ。

今必要なのは、平和と穏やかな日常。

そんなリヨウたちが楽しそうに道中を歩いている間、未だ合流できる目処もなにもたぬまま、文は会議室にいた。

定例会議とは名ばかりの老人会のようなものにぶちこまれた哀れな烏天狗こと射命丸文は張り付けたような笑顔を浮かべていた。

あーだこーだどうせ決まらないし、決める気もないような話題ばかり、それが終われば大概現状の幻想郷の愚痴。

さらにそれが終われば今時の天狗たちはどーだこーだ。

(しんどい、早くチルノさんに会いたい……)

「……………めい……………」

(まあ取材場所に遊びに行つてくれるおかげですぐに会えますけど、その点リヨウは多

少気遣いしたくれたんでしようし)

「射命丸！」

「っ!？」

突然の大声に意識が引き戻された。

呼んでいたのは妖怪の山の天狗たちの幹部の一人。

天魔ほどではないにしろ、そして直属でもないものの偉いということには変わらない人物。

少しばかり意識を離しすぎたと顔をしかめつつ謝罪する。

「申し訳ありません」

「まったく、射命丸お前はここ一年どこかおかしいぞ、妖精なんてものやらよくわからん外来人と過ごしているとか聞くではないか」

面倒なことになったと外面にはださぬまま思う文。

チルノの悪口が出たら手が出る自信がある。と思いつつも社会の菌車気質が染み込んでいて理性が働くのだろうけれど……。

リヨウの悪口はまだ良い。余裕で耐えられる。

(さあ、なにを言ってきましたか！)

自分への小言を覚悟していると、幹部が口を開く。



そしてその口から放たれる言葉は——。

「射命丸、貴様まさかその外来人の男にたぶらかされてたりはしまいな？」

「……」

「齡1000を越える烏天狗に限ってそんなことは無いとは思いたいのが恋仲に見えると  
いう報告も……ん？」

返事はない。

射命丸文は眉一つも動かさぬまま固まっている。恐らく思考もなにもかも停止して、  
ついでに呼吸も止まっていた。

シヨックが大きすぎたのか口を半開きにしたまま。

「聞いているのか射命丸！ おい射命丸！」

それでもなにも言わず固まっている。

「おい！ おいつて！ ちよつと……ええ、これ大丈夫？」

さすがの幹部も焦った。

天魔は黙して座すのみ。

他の天狗は文に近寄って突っついてみたりする、

——そのまま会議は終了した。

射命丸文は見覚えのある川の前でサボっている死神と遭遇したところで目を覚まし

たらしい。

そして一方、リヨウたちは守矢神社へとやってきていた。

神頼みなど元々するほど信心深い人間でも無かったが、この幻想郷に来てまで『神は居ない』とも言えないので一応気を使って賽銭を投げ入れる。

チルノと大妖精もリヨウに渡された硬貨を投げ入れて手を合わせた。

「ふう、一仕事終えた気分だ」

「まだ1日は始まったばかりよ、リヨウ！」

「わかってますよ」

元気なチルノにそう言つて笑つて応えようと、リヨウは背を伸ばす。

なにはともあれ、文を待たなければならぬのだが、彼女は一時彼岸に出張中である。

いつそ暇潰しに『弹幕ごっこ』でもするかと考えていると、足音が聞こえてきた。

「おや、妖精がこんなところにいるとは珍しい」

「あ、諏訪子！」

そこにいたのはこの神社に君臨する『二柱の神』の一柱である洩矢諏訪子。

土着神でありかつて崇り神と呼ばれた八百万の神々の一。

すでに『崇りとして恐怖された者』とはまた違ったものとなつてはいるがそこは割愛、

特に考えることでもないだろうとリョウは考察をやめた。

「チルノお、カエルいじめてないだろうね」

「ふふん、いつまでもそんな子供の遊びにきよーじるあたいたいじゃないのよさー」

「ける、ならよし」

そう言つて頷く諏訪子がチルノの頭を軽く撫でる。

相変わらず友好関係が広いなど感慨深い思いをするリョウであったが、チルノの子供らしい部分がそうさせるのだろうと納得した。諏訪子にチルノが抱きつくのもまだ納得した。

恐らく納得していないのは隣にいる大妖精だけだ。

「……大ちゃん、顔こわい」

「え、やだなありョウさん、そんなわけないじゃないですか!」

ニコニコしながら目が笑っていないので、これ以上突っ込むのはやめておいた。命は惜しい。

「やっ……」

チルノと諏訪子が話しているのを横目に近くの本ベンチに座るリョウ、そして大妖精。

少しばかり不服そうにしているが、先ほどの怖い顔とは違い純粹に拗ねてるように見えて、そんな可愛らしい大妖精の珍しい表情に頬を綻ばしてそつと頭を撫でる。

「なんだかんだで一番の親友は大ちゃんでしょ？」

「親友じゃなくて又チャリたいんです私は」

前言撤回だ可愛らしきなどない。

純粹は純粹だが、純粹な悪だった。目指すはスーパーサイヤ人かと遠くを見ながら思うリョウ。

そんな遠くを見ていたリョウの視界に現れるのはまた別の少女。

「あ、リョウさんじゃないですか」

「早苗さんと神奈子さん」

ベンチに座る二人の前に現れた新たな二人、正確には一人と一柱。

緑色の巫女と、青い髪の神。

守矢神社の風祝と外向きの守矢神社の祭神。

「リョウさんがここに来るなんて珍しいですね」

「故ありまして、話行つてないかな？」

「話……ああ、射命丸の取材を受ける予定な」

なるほど、と言いながら手をポンと叩く神奈子。

早苗の方はチルノと諏訪子の方を見て微笑ましいという風に笑うと、リョウの方を向き直す。

「相変わらず一緒にいますね」

「まあチルノさんと俺のことは知ってるでしょ、ほぼみんなさ」

「それもですけど文さんとのことですよ」

「ハア？」

突拍子もない言葉に素つ頓狂な表情を浮かべていつもと違う返事の仕方をする。

逆に驚く早苗と神奈子だが、すぐに二人同時に笑う。

リヨウはハツと表情を変えると苦笑いを浮かべながら出そうになる汚い言葉を整えつつ話す。

「ま、まあチルノさんと一緒にいれば多少はね？」

「いや、チルノちゃんいなくても一緒にいるじゃないですか」

「大ちゃん!？」

「良いじゃないですか！ チルノちゃんは私に任せてお二人で！」

「大ちゃんさん!!」

楽しそうな大妖精に反してどんどん焦ったように汗を流すリヨウ。

大妖精の言いたいことを悟ったのか早苗と神奈子は苦笑を浮かべた。

しかし、リヨウと文のお互いの思っている関係と、周囲から見た二人はまた別。

「勝った！ やったよチルノちゃん！」

「勝つてねえよ！ 戦つてすらねえよ！」

早苗は大妖精がなんだか文に似てきたかなとも思ったが大妖精が自決（死なないが）を図りかねないので言うのをやめた。

まあ大妖精がいつも通り、それは置いておくとしてもリヨウと文の関係性は周りから見ると人によつて変わってくる。

「犬猿の仲、には見えませんけどね」

「え、そう？」

早苗の言葉にリヨウが反応した。

大妖精は未だに勝利（してない）の余韻に浸っている。

「んー友達？ いやもつと仲良しにも」

「いや、あたしには恋人に見えなくも」

「ハハハご冗談を」

「凄い汗……」

動揺があからさまに出ているので少しばかり心配になってきた面々。

大妖精から見た二人は確かにそういう感じでもないのもわかるが、心底嫌いではないのとわかっている。

故に中途半端だなどは感じていた。

「あつ、でも」

「な、なんだい早苗さん？」

(口調ブレてる……)

「雛さんがお二人、恋人かと思ってたって」

そう思う人もいる。大妖精も知っている。

そういう噂がないわけでもない。

むしろ有力説。

色々と名前が知れてる二人がしょっちゅう一緒にいたらそうもなるだろう。

そして大妖精は、隣を見る。

「あれ、リヨウさん？」

「……」

「どうしたんですか？」

「あ、こいつ息してないよ」

「ふえ!?!」

「リヨウさん!?!」

そして——リヨウは見覚えのある川で見覚えのある死神に『今度はあんたか』とか言われたとかなんとか。

## 第7話 『ファンボーイと親心』

少しばかり遠くに行って死神と雑談していたリヨウがハツと帰ってくる。

ホツとした表情を見せる大妖精と早苗の二人、そして神奈子はケラケラ笑っていた。リヨウは額に流れる汗を拭う。

「ふう、びびらせやがって」

（ナツパ……）

「リヨウさん戻ってます」

ふとリヨウがチルノと諏訪子の方を確認すると、いつの間にやらチルノの服が汚れていた。

諏訪子も少しばかり服が汚れている気がする。

そんな二人が近付いてくるも……。

「むうー」

「ハハハ、さすがにね」

「チルノさんなにを……あつ」



察した。

「『弾幕ごっこ』ですか、結果は……」

「聞くまでもないでしょ、さすがに負けないよ」

「あたいのさいきよーへの道があ」

前までのチルノを知っていれば驚きそうなものだ。

無鉄砲に『あたいさいきよー』とは言わずに『さいきよーを目指している』という彼女に、ただし相変わらず猪突猛進ではあるが……。

「でもかなり強くなってるよ、一応私に当ててるし……」

「リヨウに色々教えてもらってるからね！」

「力はチルノさんのが強いですけどね」

「おつむの差かね」

「むっ、バカじゃないよ！」

自分で自覚はあるのか反応する。とは言え「おつむ」の方も前と比べるとだいぶ変わった。

リヨウから言わせればもともとしっかり丁寧に色々なことを説いてくれる相手がいなかっただけで、教えれば吸収・学習するのだ。

妖精でも大妖精のように大人びている者だっているのだからそれもそうだ。

などと考えていると、バサツと音がして黒い羽が落ちてきた。

「お待たせしました！」

「よーやく来たか射命丸」

「あやや、すみません八坂さん」

軽く謝罪して地を足をつける文に、誰かが抱きつく。

無論チルノである。

「あやー！」

「あややや、不覚にもこの射命丸文……下品なんです、その」

「やめろお前！」

「あーへヴン状態、すーはーすー……つめたあつ!？」

「リヨウにこうすると良いって聞いたから」

冷気全開にしたチルノに驚く文と、驚く文に驚く面々。

そして気を遣ってすぐに冷気を弱めるチルノ。

文がリヨウを睨む。

「この過保護」

「いや過ではない」

「ごもつともな言葉に頷く大妖精。」

文はそつと抱きついていたチルノをおろしてその姿に気づき、軽くチルノの服を叩いて埃を落とした。

「チルノさんなにを……あつ」

察した。

「さつき見た」

「同じくです」

諏訪子の言葉に頷く早苗。

苦笑する神奈子をよそに、文は首をかしげつつリヨウの方を見た。

そこにいるリヨウはというとなんととも言えない表情で、それを見た文はなんとなく察する。

「にしてもチルノさんも頑張りますね。どこかのインドア派にも是非見習ってほしい」

「パチュリーさんのことか」

「いやあなたでしょ」

「異変になったら本気出す」

「知ってますけどね」

淡々としつつも、どこか楽しそうでもある二人の会話にクスリと笑みを溢す大妖精と

早苗。

とりあえず取材の準備を、と文がメモを取り出したところで、早苗が口を開く。

「そう言えば相変わらさずのいつもの四人ですね」

「確かに、早苗の言う通り」

「あはは、文さんたちと一緒にしないでくださいよ」

「大妖精さん軽く毒吐きますね」

（それ俺も入ってる？）

文たち、なので恐らく入っている。

「にしても前回の異変じゃ大活躍だったらしいじゃないかあたしらは解決に乗り出さなかつたけど相変わらず霊夢と魔理沙はいたんだらう？」

「まあ、てかレミリアさんたちもいましたし」

「けろ、よくその面子の中で活躍できたね」

「あたいたち四人ならさいきよーなのよさ！ 大ちゃんとりヨウのアレもあつたし！」

胸を張って言うチルノを見て苦笑するリヨウ。正直、確かに役にはたつたがまともな戦力という意味では明らかに文とチルノがメインだ。

精々できてサポートだが、チルノにそこまで言われて悪い気はしない。

「へえ、射命丸が主力だと思ってたけどね」

「あやや、まあ伊達に鴉天狗などしてませんよ……大ちゃんもリヨウも確かに強くは

なってますしね」

「お前が俺を褒めるなんて珍しい」

「“あれ”には私も一度煮え湯を飲まされてますからね」

「違うない」

ハツと笑うリヨウが大妖精を見て軽くウインクをすると、大妖精はそれに応えてニコツと笑顔を浮かべた。

そんな二人を見て、早苗が首を傾げる。

諏訪子が腕を組みつつ、ふむふむと値打ちをするような視線を向けた。

「早苗はリヨウみたいのが好みかあ？」

「いえまったく」

「まったく否定」

さすがに傷つく。そして文は大爆笑。

「なんだかりヨウさんが今みたいにするの珍しいなって」

「今みたい？」

「ウインクとか」

「……」

言われてから無性に恥ずかしい気分になって、リヨウは顔をそらした。

そらした先に、文のニヤニヤとした顔。

そして同時に視界に入るチルノの好奇心溢れる表情。

「……なんだよ」

「いえいえ、男前なことしちやつてーうりうり」

「やめれ！」

「あたかもリヨウのウインクみたい！」

「やめれつて！」

文がからかい、チルノが天然で追い込む。

額に手を当てて赤い顔でため息をつくりヨウ、そんな彼を見て大妖精がクスリと笑顔  
を浮かべる。

なんだかそんな四人を見ていて妙な安心感を覚えて神奈子は柄じゃないな、と後頭部  
を搔く。

「射命丸」

「おっと失礼しました。そうそう取材ですね！ おもしろい話を聞いたのでそれについ  
て」

お仕事モードになった文を横目にリヨウがカバンを下ろして背を伸ばす。

両腕も伸ばすとパキパキと関節が音を鳴らす。

息をつきつつ立ちあがり、さらに首をならして爪先で地面を叩いた。

「あれ、リヨウさんやりますか？」

「まあ暇潰しがてらありかも」

「なら私がお相手しますよ」

そう言つて早苗が前に出る。

なにかと彼女と話しているのは、*“かつての世界”*を思い出して嫌いではなく、彼女もそう思っているのか積極的に話しかけてくることが多い。

故に彼女との弾幕ごっこもこれがはじめてではないのだが、しかし……。

「……いや、やめときますか」

「あれ、そうですか？」

「大体あれ、レベルが高いんですよ早苗の場合、俺はもう少し下のレベルで」

その言葉に、チルノが小首を傾げた。

「リヨウだつて弱いわけじゃないじゃん」

「いや、雑魚です雑魚」

「魔理沙に勝つし」

「んー何て言うか相性と言うか初見殺しというか、なんかこう……ほら俺の弾幕ごっこつて弾幕つて言うかこう、肉弾つていうか」

その言葉に、大妖精が苦笑する。

リヨウの弾幕ごっこを見たことがあるのであればわかるだろう。質はそれほど悪くはない。

しかし致命的に荒々しい。

「ほら俺、美鈴さんとかとやるならまだね」

「よーむとかもこー?」

「そうそう、どっち相手でも死ぬかと思うけど」

「けろけろ、幻想郷じや霊夢たちに並んで有名な人間なのにな」

けろけろ笑って言う諏訪子に顔をしかめるリヨウ。

別に有名になりたくてなったわけでもないが、それでもおかげで色々便利な時もある。

知名度と言うのは毒にも薬にもなりえるが幸いリヨウにとっては益になっていて、文と違って『伝統のロリコンブン屋』『逮捕に最も近い天狗』だとか言われないで済んでいた。

「霊夢さんたちに並んでは言い過ぎでしょ」

「そうかな?」

「そうかも」



「リヨウのご飯はすごいんだからもつと有名になっていいわよ！」

実際、リヨウの店はそれなりに有名ではある。

人里の中にあるというのに妖怪やら妖精やら悪魔やら吸血鬼やらが現れる博霊神社擬きと化しており、一部の妖怪からは実家のような安心感とまで言われることすらあった。

結果、ヤバい奴等がこぞって集まっていることもあるが、それはそれでおもしろい現場だと某マスコミは嬉々として語っている。

「熱い自分語りを心の中でもしてしまった」

「え、なんて？」

「いえいえ、チルノさんの料理はさいきよーですよ」

最近、料理を手伝うチルノは日に日に腕前を上達させており、割りと手際よく作っていてこの前は一人でオムレツを作ってリヨウに振る舞った。

思い出して涙腺が熱くなる。

「でも、リヨウの料理がやっぱりさいきよーだよ？ むねがあつたかくなるしっ！」

「ああどうしよう諏訪子さん、うちのチルノさんが良い子すぎて辛い」

「鬱陶しいなこいつ」

私が相手してやろうかな、とか思った諏訪子だったが弾幕ごっこ最中に惚気を聞か

されたら手が滑ってしまい殺ってしまいかねないのでやめた。

そもそも、射命丸文はロリコンと自身を認めているくせにチルノにしか興味はない。同じくリヨウとてそうならば……。

「いや、どっちかってーと親か兄妹か」

「ん、なにがです?」

「あんたとチルノ」

「どっちかって言うとなファンボーイって感じですよね」

そんな言葉に顔をしかめるリヨウが、コホンと咳払い。

「ん我が救世主……」

「なにそのネットトリした言葉遣いは」

「いや、様式美というかなんというか」

頬を掻きつつ笑うと、すぐに表情を引き締めた。

そんな彼を見てチルノがニパツ、と笑顔を浮かべて大妖精は心配そうに眉を潜めつつ笑う。

下手をすればリヨウがしばらくしんどそうな表情を見せるだろうが、チルノが嬉しそうならば細事に過ぎないだろう。

まあ良いかと、大妖精は大妖精で楽しむこととした。

「さ、やりますか……」

「リヨウさんと弾幕ごっこも久しぶりですね！」

「四季異変前、か？」

そんな言葉に頷く早苗が幣を手に構える。

「ま、やりましょうか」

「はい、リヨウさん」

まともな型等無いが構えるリヨウ。

そんな二人を遠目に見る面々、取材は終わったのか文と神奈子もその二人を見る。

すると意外にも声を出すのは——文だった。

「リヨウ！」

「ん？」

「チルノさんは私に任せて安心して逝きなさい！」

「早苗倒せたら次はテメエだからなこのクソ鴉！」

十中八九——次はない。

## 第8話『癒しとおっぱい』

結果として弾幕ごっこはあつさりと終わった。

スペルカードと呼ばれるソレは三枚。

しかしながら早苗は二枚を使ったところで弾幕ごっこは止められた。

「あー明日絶対筋肉痛だよ」

「リヨウさんに限ってソレはないかと」

先程よりもボロツとしたリヨウがつぶやき、早苗は苦笑する。

「いやー中々に頑張っていましたよ」

「そりやなによりで」

ため息をつきつつ、文の言葉に頷く。

そもそもただの一年前から怪異もなにも知らなかったただの人間の男が良くもまあ一年間でまともに弾幕ごっこができていると、神奈子は内心でリヨウ買っていた。

いや、神奈子だけでなく、あの異変を知っている者であればどうあれ一目おかざるをえないという方が正しい。そしてその結末まで知っていれば……。

「憐れ、っていうのは違うか」

苦笑する神奈子の隣の諏訪子が苦笑を浮かべた。

「またまた難しいこと考えてるね、良いんだよあれはあれで楽しんでるんだから」

「そういうもんかね」

「そうそう、だから私らみたいなの年寄り黙って見守っててやろうって……たまには手出すけど」

「違うない」

そう言つて微笑を浮かべる神奈子だったが、すぐに諏訪子の方を向く。

妙な視線を感じて、諏訪子はそちらを、向いた。

「だがあたしらは年寄りじゃない、若者だ」

「いやそれは無理があ……いや、マジごめん、うん、若い若いから、ちよつ顔が怖い顔が！」

「仲良しふーふね！」

「ちよつ、やだチルノつたら！」

神奈子が頬を赤らめてなぜかリヨウの肩を叩く。

疲れているところに神の照れ隠し打撃、紙のような防御ではとても耐えることもできずに一メートルほどふつとんだ。

「リヨウさん！」

「リヨウが死んだー！」

「この人でなし！」

大妖精、文、早苗の順で叫ぶ。

駆け寄るチルノが必死にリヨウを揺すったがその度にリヨウの体は固く冷たい石畳に押し付けられて、蛙を潰したかのような変な声が出る。

だがチルノは必死なのだ。

「リヨウー！」

「だ、大丈夫だから揺すらないで」

リバーズしそようになる朝飯を無理やり胃袋に封印して、チルノに離れてもらう。

文が大爆笑しているのとリバーズあとで殴ろうと誓いつつ立ち上がるが、なんだか神奈子が諏訪子相手にメス面を شدしたので空気を読んで帰ろうと思った。

いや、正確には……。

「チルノさんの情操教育によろしくない」

「お前が言うのか」

「文さんが言うんですか」

恐らく一番教育上よろしくない存在である文を見て言う二人に『やれやれ』と両手を上げて首を振る文に、手が出そうになる二人。

諏訪子が神奈子に連れられて本殿へと帰っていく。

そんな二人を見送りやるせない表情を浮かべる早苗。

「……早苗、生きれ」

「はっ」

申し訳程度の慰めの言葉をかけてリヨウたちは守矢神社に背を向ける。

あまり長居すると嬌声が聞こえてきかねない。もちろん神奈子だ。

奴は誘い受け、リヨウにはわかる。

「神奈子さんって絶対誘い受けですよね」

石段を降りながら言う文に頭を抱える大妖精とリヨウ。

大妖精は『ダメだこいつ』的な意味で、リヨウは『同じことを考えてしまった』的な意味。

似て非なる理由。

「なんですかその反応!？」

「いや、こうもなりますよ」

「ねー〴〵さそいうけ〴〵ってなに?」

チルノの疑問に顔を逸らす大妖精。

「えーっと文みたいなの奴ですよ」

「ッ!?!」

「リヨウさん!?!」

文を指差してテキトーに答えるリヨウに、思わず文はバツとそちらを向き、大妖精は驚愕にその名を強く呼ぶ。

大妖精は突然のブレーキ故障に困惑した。

然るべきメンテナンスを怠った故の人身事故、危険運転致死。誰が死んだか、そんなもの一人だ……。

「あ、文さん……」

「あつ、いや、だ、誰が誘い受けですか!?!」

「ああ……誘い受けだ」

無論、顔を真っ赤にしてる文だ。

「お前普段自分でロリコンのドマゾを自称してるだろ」

「い、いやだからって!?! こ、このアホがア!?!」

今回に限っては大妖精も全面同意だった。

確かに文は（大妖精もだが）暴走しがちなチルコン（造語）の変態のドマゾだが自称していても言われればまるで違う。

しかもなおかつ……。



「え、えっと……」

「ねー文はさそいうけなの？ どまぞなの？」

「あつ、いやっそのつ」

射命丸文は珍しく狼狽していた。

いつもであれば『キくうー！』ぐらい言っていたが一度乱されたペースは整わない。

そしてチルノに聞かれても自分で説明できずに赤くなってよそを向く。

まさに誘い受けらしいリアクションではあるがそんなしおらしい文、そうそう見れない。

「文さんが静かに……ハツ!?!」

奴の方を見た。

「ハツ……」

勝ち誇った笑みをした奴を、大妖精は見逃さなかった。

ブレーキは壊れてなどいない。

「と、とんだ急ブレーキですよ、リヨウさん……」

(大ちゃんも結構意味わかんないこと突然言うよなあ)

心の中で大妖精を再認識するリヨウ。

「しかしリヨウさん……」

「ん?」

「天然攻めのチルノちゃんも良いけど、鬼畜攻めのチルノちゃんも良いと思います」  
もう、一発殴るぐらいなら許されるかなと思っただ。

しかしまあチルノになにを言われるかもわからないし大妖精もいなければ困る。主に文のコントロールに……。

とりあえず一刻も早くこの流れを断ちきりたいと、自分で薪を焚べておきながらそんなことを考えた。

「飯に、しようか」

「リヨウさん話は終わってないですよ!」

(終われ……! 一刻も早く……!)

「わーいリヨウのご飯だ!」

(うちのチルノさんが良い子すぎる……ツツ!!)

結局、みんなチルコンなのである。

そして道中に見つけた小さな木陰で四人は昼食を取ることにした。

おそらく、いや間違いなく騒がしくはなるのだろう。

リヨウたちが食事を取っている時間、妖怪の山から離れた場所にある博麗神社。

その本殿の居間、3月でも未だ炬燵の呪縛から逃れられぬ我らが楽園の素敵な巫女、博麗霊夢がため息をつく。

今日も今日とて幻想郷は平和。

良いことではあるのだが金も賽銭もなければ予定もない墮落していく日々。

「リョウさんとこ休みなのよねー」

「あら、またツケが貯まるわよ?」

そんな声が聞こえてそちらを見れば、そこにはこの幻想郷のトップクラスの大物。

幻想郷を見守る者。

“外の世界”と幻想郷を隔絶する二重結界を守る者。

二つ名など腐るほど出てくる大妖怪。

スキマ妖怪、八雲紫。

彼女は霊夢の前、炬燵の上の空間にある“スキマ”から上半身を出している。

「紫……冬眠から目覚めるには早いんでない?」

「なぜだと思っ?」

「……早く目覚めざるをえなくなつた」

その言葉に、扇子を口許に当てて紫は頷く。

暇で予定は無かったがこういうのもごめんだなど、霊夢は立ち上がるが、紫はスツと

手を前に出した。

小首を傾げる霊夢。

「なに？ 動かないの？」

「少し調べたくてね。推測通りの異変ならまだ日にちはあるし」

「起きる予定の異変ってなによ」

その言葉には他の異変解決請負人たちも同意するだろう。

異変というものは起こっているからこそ異変なのだ。

起こる前ならば、起こす者がいるなら締め上げればいいし、異変が起こされるまで悠長に待っていて良いそれほど大したものではなければ、紫が起きてくるまでの理由が無い。

「そういうものよ、それに今回は異変という言葉で語るべきかも憚られるわ」

「あんたがそこまで言うってなによ」

「死人が出るかも……それどころかこの幻想郷の、消滅の可能性すらある危機」

霊夢が生睡を飲む。

その言葉の重みは最も幻想郷を愛し守ろうとする紫が言うからこそその重みがあった。

静かに座る霊夢が、紫と視線を交わらせる。

スペルカードが通用しない。そういう意味だろう。

「同じ土俵でやりあえない相手、ね」

「ええ、そういうこと」

「ならあんたらならもつと楽なんじゃないの？」

わかつている。霊夢とて馬鹿ではないのだから理解はしているのだ。

その解決法があるならわざわざ霊夢のところに来る必要がない。

「……また来るわ。色々調べることもあるし」

「りよーかい」

飄々とした態度で答えると、座り直す。

八雲紫は霊夢を見て頷くとスキマの中へと姿を消し、スキマも程なくして消えた。

霊夢は自分の右手をみてから、グツと力を込めて額に当てる。

その瞬間、スパーンと音をたてて開かれる襖。

「さむっ！」

「遊びに来たぜ霊夢！」

白黒魔法使いの魔理沙がそこに立っていた元気一杯の笑顔で言う彼女を見て、霊夢がた

め息をつく。

「たく、人がシリアスモードでいたつてのに」

「霊夢がシリアスモードって……そうか」

その言葉で察した魔理沙が頷くと、静かに霊夢の肩に手を置く。

いつになく真剣な表情の魔理沙、彼女はことの重大さを理解——。

「そんなに金がないのか」

——したわけではない。

「違うわよっ！ いや違うくないんだけど！」

違うわけではなかった。

少し遠くの未来より、まずは目先のピンチ。

尋常ではない霊夢の剣幕に魔理沙は蕪蛇だったかと頬を搔きながら目をそらした。

霊夢が「魔理沙から有り金全て巻き上げるか」の葛藤に陥っているそのとき、リョウたちは昼食を終えて山を降りてきていた。

リョウの顔は既に疲れきっている。

もちろんボケ倒す面々にだ。

「あー癒されたい」

「疲れちゃった？ 明日お仕事だいじょーぶ？」

「ああチルノさん、大丈夫大丈夫」

「しんどかったらしつかり休まないとダメだからね！」

(癒されたわ……)

ビシツと指を指すチルノを見てニコニコと頷くりヨウ。

他の者からみたら文や大妖精とそれほど変わらないチルコン。

しかし文はそれに加えてロリコンとも呼ばれる悲しいモンスターの性。

「リヨウの癒しといえはやはり大きなおつ」

「うおおい射命丸ウ！」

「あやや、私またなにかやつちやいました？」

「殴るぞ？ いいな？ 殴ってからロングホーントレインだからなー」

「そんなことのために慧音先生連れてくるの!？」

いつも通りの言い争いが始まるとチルノは小首を傾げる。

大妖精はおつぱい大好きリヨウさんを軽蔑の視線で眺めていた。いや、知ってはいた

が眺めていた。

ちなみに大妖精からの視線で喜べるほどリヨウもレベルは高くないので……。

「なんでこうなる……!!」

「ちなみにリヨウさんの中の癒しキャラは？」

「幽々子さん、小悪魔さん、永琳さんで」

そして、沈黙……。

「やっぱりじゃない」

「待て待て！ まだ聖さんとか」

「自分で首絞めてますリヨウさん！」

「チクシヨウー！」

欲望に正直すぎる男だった。

チルノは頭の上にクエスチョンマークを浮かべたままで、大妖精はそんなチルノを見て『純粹であれ』と願う。

そして、そんな四人を遠くから見ている権は安心したように笑みを浮かべて背を向けた。

今日も幻想郷は平和だと、誰もが思うこともない。

そんな当たり前の日々を過ごすのみ、それこそがなんでもないようで重要なのである。

そしてもつとも重要なのは……。

「あつ、そういうえば私もおっぱいはそこそこ……まさかりヨウ!？」

「あ、それは、ない。マジで」

「あつはい、すみません」

おっぱいが大きければなんでも良いということではない、ということだ。



## 第9話 『おぜうと新聞』

あれから数日が経った。

今日も今日とてチルノの家は朝から騒々しい若干二名の喧騒が場を制しており、いつと通り朝食を取ってから寺子屋へと向かい、チルノと寺子屋の前まで行ってからリヨウと文はそれぞれ自らの仕事へと向かう。

ここは喫茶レインメーカー。

忘れ去られた者たちの楽園、幻想郷の人里の中でも中々の異色を放つ茶屋。否、喫茶店。

河童製のはいから感溢れるその店には今日も今日とて多種多様な種族の者たちが集まる。

昼時を過ぎて落ち着いてきた頃、リヨウが欠伸を噛み殺しつつ目の前のカウンター席に座る少女に視線を向けた。

開店してから来た最初の客なのだが既に開店から5時間経った今もいる、彼女は一人でコーヒーを飲みながらなにかしているのだが……いや、なにをしているかリヨウもわかってはいた。

「はたて、おかわりいるか？」

「うん」

「は、いよ」

少女、姫海棠はたては切羽詰まった表情で手元のどっからどうみてもケータイ電話な折り畳み式のカメラを見ながら紙に文字を書く。

彼女は所謂「新聞記者」、射命丸文と同じ職業ではあるのだが文の『文々。新聞』とは別の『花果子念報』の発行者である。

「はあーなによーもおー」

「どうした、そんな風にぼやいて」

「取材でネタを拾って写真まで持つてるのに、なんか上手く書けないのよお」

「スランプとか？」

ジトツ、と睨まれたリヨウは苦笑してコーヒーのお代わりを出す。

嫌なことを言うなど言わんばかりの視線に、リヨウは少し身を乗り出して新聞を見ようとするも、はたての手がその進行を止める。

見るな、ということだろうと理解して下がった。

(めんどくせえ……)

「まだ書いてる途中でしようが！」

「自分家でやった方が」

「こつちのが落ち着くのよねー」

「そうかい」

ため息のように息をつくとき、比較的空いてきた時間ということもあり作っておいたサンドイッチを口に含みつつ今朝の新聞を見る。

無論、『文々。新聞』や『花果子念報』ではなく普通の新聞。

昔はこういうときは適当にスマホをいじったりテレビを見たりできたが今はそうはいかない。

「ん、おやじくさ」

「え、なんか言った？」

「なにも」

客が来るまで暇だなど思いつつ、コーヒーを飲む。

なんでもないような報道やコラムを見てみると時間の経過も早いのだ。

一息ついて新聞を畳んで目の前のはたてを見ても変わらず新聞を書いている。

先程までと違うのは表情の剣呑さがなくなっていること、だろうか……。

(順調そうだな)

ふむ、と頷いて体を伸ばすと扉が開く。

カランカランと音をならして開いた扉から入ってくる二つの影は見慣れた姿で、頬を綻ばしてリヨウがカウンター席に手を向ける。

満足そうに頷いた「小さな影」がもう一つの影を引き連れてはたてから一つ開けて座った。

「いらつしやい」

「今日は別の天狗と一緒になのね。天狗侍らす趣味でもあるのかしら？」

「勘弁してくださいよレミリアさん、いや咲夜も笑ってないで」

目の前の少女は霧の湖の中心に聳える紅魔館の主レミリア・スカーレット。そして従者十六夜咲夜。

二人に静かに抗議しつつ、リヨウはそつとコーヒーを淹れ始める。

そして今の言葉を聞いていなかったようではたてはひたすら新聞作りに没頭していた。

「でも、今日はこの天狗だけ？」

「まあこの時間はね、あと2時間もすれば閉店だし」

「早いわね」

「まあ時期によつて開店閉店時間は変えますからね。日の入り時間とかによつて、そろそろ閉店時間伸ばす予定ですけど」

なるほど、とレミリアが頷く。

“街灯”などもない夜には闇が制するこの人里の理にかなった理論。

リヨウが最後の仕上げを終えて、レミリアと咲夜の前にそつとティーカップを出した。

「はい、レミリアさんにはウインナーコーヒードで咲夜にはブレンドのホット」

「うん、いつと通りの良い薫りね」

「まあそこまでこだわったものではないですけどね」

「このレミリア・スカーレットが誉めてるのだから誇りなさい」

その言葉に、リヨウは微笑を浮かべながら頷いた。

一口飲んで息つく二人、すると最初に口を開いたのは意外にも咲夜。

「リヨウは最近、美鈴のところには行ってる？」

「ああ、一応顔は出してよ。師でもあるし……寝てるけど」

「ああ……そう」

一瞬、怖い顔を見せた咲夜を見て『余計なこと言ったかな』とも考えるが、さして問題はなだらうとすぐにポジティブに考えて頷いた。

たまに美鈴と咲夜の喧嘩（？）のようなものを見るが正直……。

「仲良いよなあ、美鈴さんと咲夜」

「な、なんでそうなるのかしら?」

汗を流す咲夜に、レミリアと顔を合わせたリヨウ。

二人で『ねえ?』という顔をしながら咲夜の方を見るが、少し赤い顔で咲夜は目をそらしてコーヒーを飲む。

「私と美鈴は、ほら、あれだから……」

「怒ってるようでなんだかんだじやれてるだけで」

「お・嬢・さ・ま?」

「……悪いわねリヨウ、ここは戦略的撤退よ」

「メイドに押し込められるってのもどうなんですかね」

主の威厳が壊死しているレミリアに悲しげな目を向けるリヨウ。

しかし、こんな感じだからこそ「紅魔館」の主として皆に好かれるのだろうと、微笑を浮かべてそつと頷く。

そう思うと、チルノとは少し似ているところがあるのかもしれないと、そつとコーヒーを一口。

「できたあ!」

「っ!」

叫び立ち上がるはたてに、ピクツとする三人。

原稿を立ててからトントンと整えて持ってきていたカバンに入れる興奮気味のはたて。

ニコニコしている所を見るとそちらは文を思い出した。

「まあ同じタイプだしなあ」

「なにか言った!？」

「いいやなんでも、ほれ伝票」

スツとそれを渡すとはたては札を出してタンっ、とカウンターに置く。

受け取ったリヨウが領いてお釣を返そうとするも……。

「釣りはいらないわ!」

「どうも、ありがとうございます」

リヨウが言い終わると同時にはたては店を出ていく。

肩をすくめてため息をつく、咲夜は苦笑。

レミリアはと言うと抗議するように扉を睨み付ける。

「可愛いもんじやないですか、若いって感じで」

「あいつあんたよりよっぽど年上よ、何百年単位で」

「わかってないなあ、見た目が大事なんですよレミリアさん」

「私のがよっぽど若いじゃない!」

若いというよりは幼い。と言うと面倒そうなので適当に流しておくことにした。咲夜もそれがわかつているのか苦笑するのみである。

レミリアの『うがー』と聞こえてきそうな威嚇をするが、それが可愛らしく見えて笑う。

「お嬢様がかわいいからって天狗みたくロリコンにならないでね」

「ならねえよ」

「いや、もうロリコン？」

「ちげえわ！」

口調にバラつきが見られる辺り焦っていることは間違いない。

クスクス笑う咲夜に顔をしかめてため息をつく、レミリアに目を向ける。

少しばかり拗ねた顔をしているがそういう趣味があるとは信じていないらしく安堵した。

「……違いますからね」

「そりやそうよ、それでチルノと暮らしてるんだつらとつくに殺してるわ」

「こえーよ」

文が殺られてないのが嘘と思いたいぐらいには彼女もまたチルノの過保護な友人の一人。



幻想郷広しと言えどここまで妖怪やらなんやらに囲まれている妖精などそうはいないだろう。

時々『なに考えてるかわかんねーイカれた奴』等々も集まってくるのも……。

「チルノさんの魅力故に仕方ないか」

「突然どうしたの？」

「なに考えてるかわかんねーイカれた野郎ですね」

フツと効果音が付きそうな笑みを浮かべて言うリヨウと若干引いているレミリアと  
咲夜。

突然の語りとチルノ褒め、チルコンはこういうところがあると、里の有識者である稗田阿求は後に書を残した。

「あ、今日そつち行っても？」

「唐突ね、別に構わないけれど」

「フランは今日は？」

「寺子屋」

なるほど、と頷く。

レミリアの妹のフランドールは、時折寺子屋に行くことがあるというのを知っている。

それほど驚くことではないものの、しばらくは一緒に行動することになりそうだと静かにはたての使っていたカップを洗う。

「……フランはあげないわよ？」

「そういうんじゃないって」

「じゃあ誰が？」

「小悪魔さん、とか？」

その言葉に、なるほど、と頷く二人。

嘘ではないがそういう気かと聞かれれば微妙なところだ。

美人だし慎ましいしおっぱい大きいしで非の打ち所がない。好みである。

だが口説くかと聞かれれば答えはノー。

「良いじゃない小悪魔、バックアップしてあげましょうか？」

「いや、気にしないでください」

頷くりヨウ。

そもそもそんなことになるものならその小悪魔の主人に燃やされかねないし、失敗したあと気まずいしで良いことなどそうそうない。

それに現状、べつに恋人だとか欲しいとも思っていないのだ。

最悪このままゆつたりと死を迎えることすら怖くない。

「わからないわね」

「大人になればわかりますよ」

「だから貴方より大人だって」

「はいはい」

「ナデナデするな！」

両手を上げて再び威嚇するレミリアを見て笑う。

隣の咲夜もおかしそうに笑っているが、鼻から赤い液体が一滴落ちた。

とりあえず見ないふりをして、レミリアの頭を撫で続ける。

それはもう優しく。

「あ、少し癖になってきたかも」

咲夜の目から光が消えたのでやめた。

## 第10話『頭とネジ』

幻想郷は既に夕刻、空は茜色に染まり、人々も帰路につく。

そしてレインメーカーも閉店時間となり、店の前にリョウ、レミア、咲夜の三人。扉についた札を返すと鍵を閉めて、腰をトントン叩いてから伸びをした

「お疲れさま」

「ま、楽な方だったよ今日は、妹紅さんもすぐに帰れたし」

「そうかしら?」

その言葉に頷くりョウ。

同じく咲夜の差した日傘の下でレミアが頷く。

「さて、フランとチルノを迎えに行つて帰りましようか」

レミアが無い胸を張つて言うのでリョウは一瞬、悲しい目をしてからいつも通りの表情に戻して頷く。

だが、黒い羽が目の前を落ちる。

「カラスと一緒に帰りましょ」

「七つの子はいないけど」

「そりやそうだ」

そう言つて笑うリヨウの隣に降りる鴉天狗こと射命丸文。

レミリアと咲夜にも軽く挨拶をするがそれほど歓迎されないのはおそらく、いや十中八九あの『文々。新聞』のせいだろう。

表の世界で言うところの週刊誌じみた記事やもろもろ、嘘は書かないが逆に嘘じゃないので困る場合もある。

「あやや、嫌われたものです」

「嫌いではないわよ？」

「それはなによりで」

ニコニコ話す文を見てリヨウが少しばかり息つく。

いつも通りの安堵感もあるのだが、それ以上に文を見ていてハラハラする所もある。

別に彼女が疎ましく思われてることはかまわないのだが……。

「今日はフランドールさんも一緒ですか」

「手え出すんじゃないわよ天狗」

「私はチルノさんにおみ発情するのでお気になさらず！」

「余計え気になるわ！ なんなら絞め殺したい！」

文の発言に思わず声を荒らげるリヨウ。

「リヨウ！ 自分だけまともな人間のフリを！」

「お前と比べたら遥かにまともだわ！」

レミリアと咲夜は思った。

文と比べてまともというのは、些かまともじゃない奴の発想だなと……。そしてやつぱりリヨウはまともな人間ではないと……。

歩きながらのその会話、咲夜が片手で頬を押さえる。

「リヨウ、一件まともそうに見えてネジが飛んでるのよね」

「お前にも言われたくないわ！ おせうの姿見て鼻血だすようなやつ！」

「失礼ね、妹様の場合もでるわよ」

「変態だあ!!」

リヨウはハッとレミリアを見るが、悟ったような表情をしていた。

見た目だけなら年齢15にも満たない少女のそんな表情を見て、リヨウはやるせない気分一杯だ。

ここは忘れ去られた者たちの楽園、幻想郷。

住んでる奴は大体ネジが飛んでおり、ネジ飛んでる奴は大体友達。

まともな奴ほどFeel so badである。

「早く帰りたい」

「チルノさんとの愛の巢に私も帰りたいたい！」

「そんなもんはねえ！」

「ていうかりヨウさつき私のこと『おせう』とか言わなかった？」

「文々。新聞ではそれで通りますよ」

「廃版だそんなもん！」

リヨウとレミリアがツツコミ倒し文と咲夜はボケ倒す。

どちらかが倒れるまで続くノーガードの殴り合い。

しかし終わりはすぐに訪れる、

「寺子屋に着いたぞ」

「いまの独り言必要あった？」

リヨウがホッしながらつぶやいて、息つく。

丁度、寺子屋から出てくるチルノたち。

もちろんルーミアやリグル、ミステイアたちも一緒に他にも三月精とよばれるいたず

ら三人組等もいるのだが、そこから飛び出してくる影。

「まったくしょうがない妹ね、ほら来なさい」

「リヨウ！」

飛び出してきた影がリヨウへと飛び付く。

そつと受け止めて苦笑を浮かべつつレミアアの方を見るが、固まっていた。

やるせない感覚を覚えながらも、リヨウは抱き止めた。フランドール・スカーレットに目を会わせる。

「久しぶり、フラン」

「うん！」

そつと下ろすと、チルノがニヤつきながらフランへ近づく。

ハツとしてから恥ずかしそうによそをむくフランの頭を軽く一撫でして、リヨウは妙な視線に気づいた。

文がリヨウを見ている。ジト目で……。

「なんだよ」

「いえー別にー?」

おおよそ言いたいことを理解して頭を押さえる。

とりあえず切り替えなくては出る……手が。

冷静になりさえすればどうということはないと、頷く。

「ではチルノさん、どうぞ！」

「ん、こう?」

「ぬはあ! 冷やつこい!」



文がチルノを抱いていた、健全な意味で。

そして文が興奮していた、不健全な意味で。

そしてリヨウは思った。

「手え出そう」

「どーしたのリヨウ?」

「え、ああ、なんでも」

目の前に浮遊するルーミアが小首を傾げていたので軽く笑いつつ返すと、レミアに視線を向けるリヨウ。

ギリギリと音が聞こえてきそうな悔しそうな顔でリヨウを睨んでいる。

「手え出そう」

「やめてくださいレミアさん、死んでしまいます」

さすがにこんなことで死ねない。

「大丈夫、死にかけるだけよ」

「どこに大丈夫な要素あんの!?!」

「死にかけたらリヨウを眷属にするわね!」

「フランさん!?!」

勝手に改造計画が立てられている。

「あやや、リヨウが夜の眷属入りとは見てみたい気も」

「やめろ、属性が渋滞する」

「言うほど属性あります?」

「……」

言われて、特徴が無いのが特徴みたいなどころあるなど顔をしかめる。

モビルスーツならジムカスタム。

一応、なかなか名前は知られている方なのにとやるせない気分にもなった。

「リヨウは主夫よね! あたいの!」

「そうか俺は主夫だったのか」

「ななな、なんでリヨウがチルノさんの主夫!?! なら私は大黒柱です!」

フランは首をかしげる。

「ねえお姉さま、あれって親子」

「しっ、伝えたらあの二人がシヨック死する運命が見えるわ」

「しかしあれですね、一見親子に見えるのに母親役が娘に発情しているという倒錯的なシチュに私興奮を隠せません」

この従者どうしようかなとレミリアは一瞬マジで考えた。

「あ、咲夜の代わりにリヨウを使えば」

「おげうさまがりヨウをチルノから心変わりさせられるとは……」  
「確かに、つておいおげうやめろ」

従者に死ぬほど舐められていて、同意する妹にも悲しみが溢れる。

確かにあのリヨウをチルノからこちら側に引き込むなど無理だとわかっているのだが、レミアア自身やはり気に入りはしているのだ。

フランのお気に入りでもあるし、なにより紅魔館の他の面々からも少なからず友好的に思われているだろう。

「フツ……まあそれもチルノのおかげか」

「お姉様なんでかっこつけたの？」

「……」

無性に羞恥心を覚え館どころか顔まで赤くなるレミア・スカーレット。

ふと、透き通った声が響く。

「お待たせチルノちゃん！」

寺子屋から大妖精が出てきた。

小走りでリヨウたちの前にやってくる。

ちなみにチルノはすでに文から降りていた。

「おー大ちゃんにしてたの？」

「ちよつとわからないとこ聞いてたの」

頷くチルノ。

勉強のこと等は大体はリヨウか文に聞けばわかるがそうでもないとなると、一つ。

「歴史ね！」

「うん」

「あたいつたら名推理ね」

素直に感心してリヨウはふむ、と頷く。

そうしていると大妖精がレミリアたちに気づく。

「あ、今日はレミリアさんたちも一緒なんですね」

「ええ、ていうかそうよ紅魔館に帰るのよ」

思い出したように言うレミリア。

リヨウは肩をすくめて笑う。

「なんか余計なところで余計な時間使っちゃいましたね」

「誰のせいよ」

「まあここは誰のせいでもないということですかね！」

文が頷きながら言つてふとリヨウの方を見て目が合うが、リヨウは首を傾げるが文がニヤリとするとすぐに理解して首を横に振る。

そんな二人を見て今度は大妖精が首を傾げた。

「どうしたんですか？」

「いやあ、リヨウがなんで紅魔館行きたいのかなーと思ひまして」

「だから邪推すんなよ」

おそらくまた小悪魔のことだろうと顔をしかめる。

「そういうのは良いの、今の俺はチルノさんの主夫なんだから」

「んー?」

意味がいまいちわかっていないチルノに微笑みかけると、チルノが満面の笑みを浮かべる。

そしてそんな二人をみて齒軋りする文、そして羨ましそうにしている大妖精。

いつの間にか出てきていた上白沢慧音は微笑を浮かべて頷いていた。

「慧音、年より臭くない?」

「も、妹紅、もつとこう言い方をだな」

慧音の隣に現れる白髪の少女、藤原妹紅。

慧音の相方と言うか、ツレというか、なんとも説明しにくい関係ではあるが “人間のような者” 同士なにかしら通ずるところがあるのだろう。

ふとりヨウと妹紅の視線があり、リヨウが軽く手を振り、妹紅も返す。

リヨウがパンツ、と手を叩いた。

「さて、そろそろ行きますか」

「あたいも行く！ 久しぶりにパチエとも会いたいし！」

「何人増えても一緒だしいらつしやい」

優しいな笑みを浮かべて言うそんなレミリアにチルノが抱きつく。

「レミリアって優しいから好きなのよき！」

「なっ」

顔を真っ赤にするレミリア。そして修羅と化す文と大妖精。

リヨウはため息をついてまた足止めを食うなど、腕時計を見た。

隣の咲夜に視線を向ける。

「ロリロリの百合百合」

こいつはもうダメだ。

「もう一人で行っちゃおうかな」

遠目をしてぼやくも、誰も聞いていない。

妙な虚しさを感じていると、服の袖を引かれる。

視線をそちらに向ければそこにはフランドールがおり、リヨウを見上げていた。

「んっ」

「いっつー！」

満面の笑みで言うフランに、もうロリコンでも良いかなとか一瞬思ってしまったがすぐに頭を振って考えを掻き消す。

フランと手を繋いで歩き出すと、チルノも駆け足でついてきた。

それにつられて他の面々も然り。

「なんだかお兄様ができたみたい！」

「うん、色々とこわいからそれはやめよ」

「？」

背後から二つの殺意を感じ、冷や汗を流しながら言うがフランが首を傾げた。

早く紅魔館に着きたい。

自分も小悪魔のような従者が欲しい。

しかし、こんな所にまともな者を入れたら頭がおかしくなってしまう。

「待てよ、なぜ俺の頭はおかしくなっていない？」

「あやや、自覚なかったんですか？ 貴方頭おかしいですよ？」

手が出た。

もちろん避けられた。

## 第11話 『天使と悪魔』

紅魔館の前へとやってきた面々。

リヨウ、文、チルノ、大妖精と館の主であるレミリア、咲夜、フラン。

門前にはもちろん門番がいる……。

いるにはいる……。

「め、美鈴めいりんさん……」

「リヨウ、少し傘お願い」

「ああ、うん」

レミリアの日傘を代わりに差しリヨウ。

話は代わるが吸血鬼故に陽の光へと弱さがあるので普段から日傘を差しているのだが、一応それをどうにかできる“魔法使い”はいる。

フランドールはその魔法を使ってもらい陽の下で活動しているのだが、レミリアは優雅さが失われるとのことではない。

そして話は戻り、美鈴の前に立つ咲夜。

ふう、と息を吐くと目に鋭い光を宿すし、眠っている美鈴の前で飛び上がる。



驚愕する面々。そして苦笑するリヨウ。

「高いー！」

「あれはまさかー！」

大妖精と文が声をあげる。

そして咲夜はそのまま、美鈴の顔面に両足を打ち込んだ。

そう——ドロップキック！

「教えたのリヨウでしょ」

「いや、教えた覚えはないですー！」

チルノの言葉に首を横に振るリヨウ。

教えた覚えはないが、「弾幕ごっこ」で使った記憶がないでもないし、そもそもあの蹴りであれば教えるとか教えないとかではない。

普通に知っていて使っただけかもしれないが……。

「リヨウ以外あんなのしないし」

「言葉もない」

だがそこで全員が違和感を覚えた。

綺麗に着地した咲夜、だが顔は苦々しい。

美鈴は寝ている。しかしちやつかり腕を前に出して……。

「寝ながらガードとかどうなってるんですかそちらの門番」

「褒めて良いのかダメなのか……」

「さっすが美鈴！」

文の言葉にレミリアが頭を抱えてフランドールが手をあげて喜ぶ。

リヨウも大妖精もなんとも言えない表情をしていた。

咲夜は表情を変えずに直後に――。

「……はっ！」

「目潰し!？」

「あれは知らんぞ俺も」

だがその手も避けられ、直後にまた手を出すが全て避けられる。

顔をしかめる面々の中、咲夜が指をパチンと鳴らすと次の瞬間には美鈴の頭にナイフ

が突き刺さっていた。

「うわあ、手段を選ばなくなった」

「時止め？」

咲夜が『時間を操る能力』を使ったということだろう。

「さ、行きましよう」

「美鈴さん……」

弾幕ごっここの師の見慣れた哀れな姿になんとも言えない表情を浮かべてリヨウは昨夜に続いて歩いていく。

門を抜けて件の美鈴が育てていた花を見やり、そのまま館へと入る。

趣味を疑いたくなるほどの紅色の外観と内装、妖精メイドが働いている姿を見て、いつも通りの紅魔館だと頷く。

そのまま廊下を歩き、咲夜とレミリアの案内で面々は大図書館に通ずる扉の前に立つ。

レミリアとフランと咲夜は後で合流するとだけ言つて去つていく。

軽くノックすると、扉を無遠慮に開ける。

「どーも」

「清く正しい射命丸とそのフィアンセのチルノさんです！」

「うるせえよお前は」

「ねえ大ちゃんふいあんせつてなに？」

「うーん、文さんは頭がおかしいから気にしないで」

いつも通り騒がしく巨大な図書館へと入る。

どういふ原理か紅魔館に入っている巨大な図書館の主である少女は巨大なテーブルの前に腰掛けていた。

読んでいた本を閉じるとリヨウたちに視線を向ける。

「ん、いらつしやい」

「どうも、パチュリーさん」

紫色の髪を持つその魔女は軽く立ち上がって背を伸ばす。

チルノと大妖精がパチュリーに近づいていき、文はキヨロキヨロ記事になりそうなのを探していた。

そして、駆けてくる少女が一人。

揺れる赤い髪、揺れる豊満なバスト、そして悪魔の翼と尻尾も同じく揺れる。

（俺の幻想郷はやはりここか！）

不純で正直で下衆な男であった。

そしてリヨウの前までやって来る大図書館の司書こと

「あ、やつぱりリヨウさん」

「久しぶり小悪魔さん、よくわかったな」

「ノックするのなんてリヨウさんぐらいですから」

それはそれでどうなんだ、とも思ったがいつもの幻想郷である。

リヨウがパチュリーの方へと向かうと小悪魔もその後に行く。

「で、今日は誰が何のよう？」

「俺が本を借りたくて」

「……まあ貴方ならちやんと綺麗に返すし」

そう呟きながらそつとリヨウの前に立つ。

身長差は大きく、距離も近いのでパチュリーがグツと顔を上げて見上げる。

さすがにリヨウとしてもパチュリーのような少女に至近距離から見上げられれば照れるわけで、顔を逸らす。

「パチュリーさま？」

「……やっぱ首疲れるわね」

「いや今のなんだったんですか」

「なんでもない」

そう言つて頷くと首を揉みながら距離を取る。

「で、借りたい本って？ 気とか霊力とかの系統のは大体貸したでしょ？」

「まあそうなんですけど今回は妖力とか神力、神通力なんて、そのへんを」

そんな言葉に頷くパチュリー。

リヨウの隣の小悪魔が小首を傾げた。

「でもリヨウさんそこらへん使えるんですか？」

「ん、自分のものとしては使えないが知識としては使えるよ。神様相手にしたりするん

ならなんかの特効になるかもしれないし」

「なるほど」

ふむ、と頷く小悪魔。

パチュリーは魔法で本の検索に入っている。

チルノと大妖精はのんなパチュリーを見て興味深そうに目を輝かせていた。

「スペルカードルールに結構真剣なんですね」

「まあここで生きるなら……それに負けっぱなしはカッコ悪いし？ それは疎かバカにされるし」

主に文等に、だ。

それに三月精と呼ばれる妖精たちや博麗神社の地下に住むこれまた妖精。

さらには魔理沙やらその他もろもろ。

「あれ、俺バカにされすぎじゃ……」

「私はカッコいいと思いますよ。真剣に努力する人」

フフツ、と頬笑む小悪魔に天使を見た。

（頭のネジが飛んでる幻想郷において唯一のオアシス！ 我が世の春がきてしまう！）

自制しなければなにがどうなるかわからない。

頭の中によってききそうになるなんの罪もない春告精をコブラツイストで極めて追い

出す。

息をつき、パチュリーの方を見やった。

「あれで本出せるのにしまうのは小悪魔さんってのも難儀なもんですね」

「まあじやなきや仕事なくなっちゃいますから」

（むしろ俺の専業主婦に来てほしい）

リヨウの頭はかなりきいていた。手遅れ寸前である。

思っても言わないのでまだ射命丸文よりはマシ程度。

「お待たせ……ってどうしたの」

「ん、なにがですか？」

「いやこう……楽しそうだったから」

「まさか」

ハハハ、と笑いながら目を逸らしてよもや自分がそこまで来ていたとは隣の小悪魔に恐怖を感じる。

これが悪魔の力かとリヨウは頷くが、間違いなく違う。

ただ恋愛の無さを拗らせているのみ。

「で、件の本は？」

「結構な数になったからその中でもわかりやすそうなのを数冊ね」

「助かりますよ」

礼を言うとテーブルに置かれた本を軽く手に取る。

「頑張ってくださいねリヨウさん、私で良ければお相手もしますから！」

「ありがとう、小悪魔さん……困ったら頼む」

「はいっ！」

笑顔で、両手をグッと上げる小悪魔。

そして両腕に挟まれる豊満なバストにリヨウは速攻で視線を逸らす。

直視していれば只ではすまない。

「リヨウどーかしたの？」

「ああ、いやチルノさんなんでもないです……俺は情けない男だ」

「どしたの？」

いやしかし、トリヨウは冷静さを取り戻すために思考する。

豊満なバストというだけなら大妖精もそうだし、早苗や神奈子もだ。

大ききならば小悪魔以上の慧音や最近会った死神もいる。

「どうしました？」

（やはり雰囲気や性格が大事だな）

「ああいやなんでも、それじゃパチュリーさんこれ借りてきます」



そう言つて微笑を浮かべると、パチュリーもそつと笑みを浮かべた。

「どうぞ……あんたたちはなんか持つてく？」

「あたいたち？」

「ん」

頷くパチュリーに、考えるチルノ。

最近は勉強等もしている彼女だが、それでも本を読むかと聞かれれば微妙だ。

学ぶ楽しさというのはわかつてきたとは思いたいと……と、リヨウは大妖精を見る。

「大ちゃんは？」

「私は大丈夫ですよ」

「んーそれじゃあ、パチュリーさん、水系の魔法や術について乗つてる本ありますか？」

解つきの」

「そりやあるけどなんで……ああいや、なるほどね」

頷いてパチュリーがまた魔法を発動する。

なるほど、と小悪魔が手をポンと叩く。

頭に疑問符を浮かべるチルノを見てクスツと笑つたりヨウが説明を始める。

「チルノさんの水系の弾幕に役立つのが書いてあるかもしれないですよ」

「あたい魔法少女じゃないよ？」

「いやそれはわかってますよ」

苦笑するリヨウは『魔法少女チルノちゃんハアハア』している大妖精を見なかったことにしてチルノに説明を続ける。

パチュリーはチルノにそれを見せて理解できるかは保証できないなどしながらも探す。

「おそらく魔法やら術が理論立てて説明されてるでしょうけどそれは特に見なくて良いです」

「いいの？」

「はい、だからこそその図解つきです」

「絵だよね？」

そんな疑問に頭を縦に振る。

「チルノさんは基本天才肌なんで理論で理解するより見て理解した方が早いんですよ。百聞は一見にしかずならぬ、百文より一見ってとこですかね」

「うわ、肉体派の癖にここぞとばかりに理論だててる」

ノリノリで説明していたのに、横槍が入る。

そこにいるのはどこにいたのやら射命丸文で、やれやれと言った表情でリヨウの隣に立つ。

気恥ずかしくなったリヨウは視線をチルノの方に向ける。

「……ということですよ」

「ひやくぶんがなんたらつてのはわかんないけど大体わかった！」

「なら良かった」

フツと笑みを浮かべて言うリヨウ。

聞いていたパチュリーとしては『チルノを天才肌』と言うのなんて幻想郷広しと言えどリヨウと文と大妖精ぐらいのものだろうなと思う。

いやもしかしたら親友であるレミリアもチルノを買ってるというかだいたいぶ好意的に思っているところがあるので言いかねない。

「さっすがリヨウね！　さんぼう！　こうかつ！　うみのりはく！」

「チルノさん、最後は誉めてないです」

「ぐぬぬ、チルノさんの好感度をここぞとばかりに上げて……ッ!!」

「少なからずお前みたい不純な他意はねえよ」

そう言つて文に軽いデコピンをくらわす。

「お待たせ、この一冊で十分かしらね」

「ん、ありがとうございます」

そう言つて本を受けとる。

リヨウの手元には5冊の本、どれもそこそこ厚みがあるのだが小悪魔がそつと小さなバックを用意してくれた。

そういう所だぞ！　と思いつつも通りの笑顔。

「ありがとう」

「いいえ、このぐらいでよろしければ」

「このぐらいが嬉しいんだよ」

そんなリヨウの言葉に、小悪魔が人差し指を顎にそえる。小悪魔らしいモーシオンをする。

少しばかりトキメキかけるリヨウ。ちなみに文も少しばかり揺れたそう。

「じゃあ今度お店に行ったときは一杯サービスしてくださいねっ♪」

そう言つてウインクする小悪魔。

「もちろん」

後にリヨウはこの時、良く平常なふりして返事を返せたなど自分で自分を素直に感心する。

小悪魔は『楽しみにしてますね』とだけ言う仕事に帰るために巨大で大量の本棚の方を歩いていく。

「なんかあそこまではしやいでるこあも珍しいわね」

「おやありヨウ、案外脈ありじゃない？」

ニヤニヤしながら言う文に顔をしかめるリヨウ。

大妖精も「そういうこと」に興味がある年頃なのか目をキラキラさせてリヨウの方を見る。

首を横に振つたりリヨウが恐る恐るパチュリーの方を見てみた。

「パチュリーさん、なにか誤解をされ」

「良いんじゃない？」

「うおい止めてくれ！」

むしろニヤニヤしているパチュリーを見てリヨウは頭を押さえる。

これではせつかくレミアと咲夜を止めたのに余計なことをされかねない危機。

いや別に嫌ではない。嫌ではないのだが……。

「ん、リヨウはこあが好きなの？」

「えー」

さらにおかしなことになってきた。

別にそういう意味ではないと思っっているのだがどんどん思惑とは違う方に話が進んでいく。

やはりそういう意味で真面目に好きで付き合っていくかと聞かれればハッキリと答

えられる感じではない。

そして文は手帳になにか書いているしちやつかり咲夜とレミリアとフランも合流している。

小悪魔<sup>大天使</sup>はいたが神はいない。

それを身をもつて実感した。

その後、レミリアたちと食事を取ってから一同は紅魔館を出た。

すつかり暗くなり闇が支配する湖から離れ、リヨウたちは家へと帰ってくる。

大妖精も一緒なのは今日は泊まるから、だそうだ。

「で、お前は帰るのか……意外だな」

「私は仕事があるんですよー残念極まりないですけど」

家の玄関前でリヨウと文が二人立っている。

「余計なこと書くなよ?」

「えー余計なことつて言うとお悪魔さんとリヨウがまさかまさかな展開とか?」

「だからそーいうんじゃないつて」

そう答えるも文はケラケラ笑うのみで、聞く耳持たず。

ただし現状にもないのが本当だ。

あることないこと書く相手でもないのとはわかつてるのでその点は信用はできる。

「それかりヨウが妹紅さんと？」

「ねえつて、変なゴシツプ乗せんな」

「じゃあ紅魔館の大図書館から本が盗まれたーとか？」

ニヤリとしながら言つてバッグから取り出される一冊の本。

その本はリヨウがパチュリーに借りたどれとも違う。

手を出してそれを受け取つたりヨウ。

「そんなんしよっちゆうだろ」

「まあ黒魔法使いの場合だけど、それ以外なら中々ないし？」

「まあ確かに、てか盗んでないから」

その言葉に文が首を傾げた。

ニヤリと口角を上げるリヨウが、そつとその本に指を這わせる。

「借りたんだよ」

「ハツ……死ぬまで、ですか？」

「死ぬ前には返すさ」

それに「その本」が近々パチュリーに必要ななると思えない。

そつと本を開いて軽く目を通してから頷く。

「にしてもよく持ってこれたな」

「伊達に最速名乗ってませんよ」

「そりやそうか」

そう言つてハハツ、と笑つた。

文が背中の翼をバサツと広げて宙に舞うと黒い羽が落ちる。

その一枚がふわふわ浮いてリヨウの持つ本の上に。

「ではまた明日」

「ん、おやすみ」

その言葉に文は軽く手を振つて去つていく。

息をついたりリヨウが家の中から聞こえてくる話し声に頬を綻ばした。

明日は仕事が終わればどこに行くかと、背を伸ばしながら考える。

扉を開けると、もう少し良く二人の楽しげな声が聞こえた。

「ただいまー」

「おかえりなさい」

「おかえりつりヨウー！」

平和で素敵で刺激的な日々。

そして、いつもの幻想郷の1日。



第三章【東方崇散郷】  
U n k n o w n c u r s

e.]

## 第12話『怪異』

あれからまた数日が経った日。

喫茶レインメーカーは定休日でありリヨウはチルノと共にとある場所にお邪魔していた。

もちろんと言うべきか、大妖精と文も一緒である。

「あー眠くなる」

呟いたのはリヨウ。

畳の上で未だ片付けられていないこたつに下半身を突っ込んだまま寝そべっていた。

そして文も同じくこたつに下半身を突っ込んで転がっている。

大妖精とチルノは同じ場所に入って隣同士でせんべいを食べていた。

「いやあんたらなにしにきたのよ」

そうやって、家主である博麗霊夢はため息をつく。

忘れ去られた者たちの楽園、幻想郷。

そしてここはその幻想郷の中でも大事な役割を担う『博麗神社』だ。  
博麗神社の巫女こと霊夢はお茶をズズツと啜る。

寝転がっていたリヨウが上体を起こして首をコキコキと鳴らす。

ボケーツとしているのは過ぎしやすくなつた暖かさ故なのかいつもの疲れが出ているのか……。

「霊夢さん」

「なにリヨウさん」

「……眠い」

「いや知らないわよ」

本気で寝てしまおうか迷っていると突然部屋の壁が“開いた”。

そういうギミックが存在する忍者屋敷のようなものではない。

リボンが端について目が沢山見える空間から現れるのは……。

「八雲、紫……」

目を細めて眩くりヨウ。

その女性、八雲紫はリヨウたちがいて少し驚いたのか、一瞬表情を変えるもすぐにもとに戻る。

胡散臭い飄々とした態度と笑顔で、妖怪賢者八雲紫はそこに立った。

「紫だ！ 久しぶり！」

「ええ、ごきげんようチルノ」

そう言つてニコツと笑う紫に他意は感じられず、今のは純粹にチルノとの再開を喜んだのだとわかる。

一方、リヨウは訝しげな表情を浮かべていた。

「異変か？」

「ご察しのとおり」

リヨウの言葉に頷く紫。

文も上体を起こして手帳を出すと、そういうところはしつかりしてるなどリヨウは少しばかり感心した。

霊夢の雰囲気が変わつて、紫はリヨウたちの方を向いたまま言う。

「まあどちらにしろ各所に伝えて回らなきゃいけないし、いつか」

「私たちが聞いたらなにか不味いとか？」

「いいえ」

そういうと紫がヒトガタの紙を数枚飛ばした。

こたつの上に置かれたそれに妙な感覚を覚えたリヨウは、視線を紫に戻す。

「コホン、と咳払いをして、口を開く。

「聞こえてるかしら？」

『もちろん聞こえてるわよ』

「この声は……」

「幽々子だー」

チルノが驚いて声を上げる。

『あらチルノ？』

『チルノさんとリョウさんの声ですよね』

『つてことは、天狗と大妖精も？』

数々の声が聞こえてくるがどれも幻想郷における大物の声であり、霊夢や文も驚愕していた。

白玉楼の西行寺幽々子。

太陽の畑の風見幽香。

命蓮寺の聖白蓮。

永遠亭の蓬莱山輝夜。

その他もろもろと声もする。

「……までやるってのはどういうことだ？」

「言つたでしよ、異変が起こる予定があるのよ」

「予定？　大型連休じゃねえぞ」

口調が荒いリヨウに苦笑する紫が、そつと扇子を畳んで畳の上に座つた。

その雰囲気、靈夢や大妖精はおろかりヨウと文もピリツとした表情を浮かべる。

いや、リヨウとてわかつてはいるのだ。

ここまでするということがどうということか……。

「……『タタリ』が起こるわ」

その言葉に、顔をしかめるリヨウ。

意味がわからないが、声のするヒトガタの紙からはざわついた感覚を感じとる。

レミリアや神奈子たちの声も聞こえていたが、その中でもわからない者達もいるよう

だった。

もちろんチルノや大妖精もわかつておらず、文や靈夢すらも然り。

「ねえ紫、それが前言つてた異変とも言い難い異変つてやつ？」

「そう、タタリ……恐怖、最悪、災厄の具現」

『崇りで具現つてことは諏訪子様とかと同じ？』

早苗の言葉に、見えていないだろうけれども首を横に振るリヨウ。

「『崇り神』というくりなら諏訪子さんも妖怪も吸血鬼も違うと言えば違うが、大体

似たようなもんだ」

『あつ、そう言えばそうですね……』

「勤勉ねりヨウ、その通りよ。ただ、だからこそ問題なのよ」

紫の言葉になんとなく見えてきた。

頭を押さえる霊夢に同調してリヨウも頭を押さえたようになってくるが、まだだ。

解決策も無しに八雲紫がこの場を設けるはずもない。

だがまず、やるべくことは“タタリ”というものを完全に理解することが必要。

「理解してるみんなには申し訳ないけど、しつかり確認させてもらっても？」

『どうぞ、貴方はここにいる資格がある』

「ありがとう永琳先生」

反対の言葉は出てこない。

黙ったままの面々は口を出す必要もないと思っっているのだろうし、紫も静かに頷いた。

どちらにしろここにリヨウがいて行程を省ける部分もあるのが確かだからだ。

「崇り神と同様なら恐怖心や畏れから具現化するんだろう？」

「ええ、具現化は間違いないけれど違う。“タタリ”という現象によつて恐怖が具現化する」

「崇り神が崇りを撒き散らすんじゃないやなく、タタリそのものが崇り神を創る？」  
 「そうね。そう考えてもらって相違ないわ」

それを理解した瞬間、背筋にゾツと悪寒が走る。

文を見ても霊夢を見ても深刻そうな表情で、チルノと大妖精も雰囲気を察して静かにしていた。

おそらく式神の向こうの「理解していなかった者」も同じ状況だろう。

「敵は、なんだ……」

「何度でも答えるわよ。タタリ、最悪と災厄と恐怖の具現。現象、そして——」

答えは同じ。変わることはなく絶望は一つ。

「——崇り神崇り神を創る怪異タタリ」

静まる博麗神社。

能天気な鳥の声も聞こえず、ただ時間を消費するわけにもいかずリョウは真っ直ぐ紫を見据えた。

危機的狀況の理解はでき、あとはもう一つの確認。

「敵は、妖怪か？」

「然り」

「天狗か？」

「然り」

「悪魔か？」

「然り」

「吸血鬼か？」

「然り」

質問の応酬に全て応える紫。

すでに答えを出しているのではなく、ただ応えるのみ。

「幽香さんも、レミリアさんも、神奈子さんも、お前もか」

「然り」

止まるリヨウが深いため息をつく。

その程度のリアクションに紫が少しばかり驚いた様子を見せた。

もつと焦るかと思った、霊夢は深刻そうな表情をしている。

「ドツペルゲンガーみたいなものか？」

「言い得て妙ね。本人を殺しに来るという意味では」

「本人をつてことは、お前の分身はお前を狙う？」

「一定以上の力を持った怪異のみらしいけど……」

「本物に成り代わろうとするってか」



つまり逆に雑魚のみを相手にすれば良い。

リヨウ自身、恐怖心を持たれてるわけがないと自覚があるし他の面々もリヨウはないと確信している。

だが力が強い妖怪、例えば幽香対幽香やレミリア対レミリアとなった場合を考えると人里付近でやらせるわけにはいかない。

「一部の妖怪を離れた場所に移動させれば……人里は安心か？」

「逆に一定以下の弱い怪異は弱い者を狙うそうよ。タタリを起こした者たち、とかね」

「つまり人里も安全じゃないか……いや、慧音先生はどうだ？」

その言葉に反応したのはレミリアだった。

『なるほど、 “歴史を隠す能力” か』

「それが絶対と言えるかと聞かれたら、微妙なところね」

「わかってる。慧音さんがやられたらそれまでだしな」

ならばやはり慧音を守るように戦う必要ができる。

それもタタリで分身が産み出されないような程度の力でタタリの下位妖怪の分身にやられない程度の力。

「まず俺、戦力になるかはわかんないが」

『妥当ですね。お願いします』

「はい」

白蓮の言葉に軽く返事を返す。

恐怖心が生む怪異と戦うならば、自分のように恐怖心を抱かれてない者がそれなりの数で戦えば互角以上の戦いができるということだ。

そこでリヨウは一つの考えに至った。

「妖精か」

その言葉に頷く紫。

『けれど妖怪のタタリが出てきたとして、妖精が役に立つの？ それともやられるけど出しとく？』

「輝夜さん、俺が妖精たちに肉の壁になれなんて言うとか？」

『それは……悪かったわね。確かにあんたはそういうこと絶対言わないでしょうけど、ならっ？』

「並以上の力を持ちつつ恐れられてない、となればチルノさんと大ちゃん」

そう言つて二人を見ると、チルノがグツと手を突き出し、大妖精は不安そうにしながらも頷いた。

フツと笑みを浮かべて紫を見ると、彼女もこの展開を望んでいたのか微笑を浮かべて頷く。

あと数人、候補がいる

「三月精を呼ぼう、戦闘特化じゃないが使える……いや、あいつらは防衛戦より他のサポートに回すか」

「適当にあたいが話つけてくるわ」

「私も行くよチルノちゃん！」

三月精のライバル（？）のチルノが言うと、大妖精も同調する。

そこらは問題ないあの三人のサポートがあれば同等の力の敵が現れた場合でもなんとかなるだろう。

「それと、魔理沙を呼ぶ」

「……分身出てこない？」

「いや、恐怖を抱かれてるとかそういうのではないだろ」

そんなリヨウの言葉に頷く霊夢。

異変解決組でも正直どうなるかはわからない。

霊夢はアウト、魔理沙と早苗は恐らくセーフ、咲夜と妖夢は微妙なライン……となれば。

「人里、いや慧音先生の防衛に回せるのは魔理沙のみか……早苗は神奈子さんと諏訪子さんの方で、同格二体相手なら多少は戦力増強させた方が良い」

「そうね、弱すぎるのだと瞬殺されて増強にならない場合もあるけれど」

紫の言葉に頷きつつ、さらに思考する。

被害を最小限で押さえるにはどうするか、同格相手に味方を着けるならそれなりの実力者。

顔をしかめつつ、考える。

それなりに友好的な人形使いアリスはセーフかもしれない、河童は十中八九アウト。冥界も地獄も妖怪の山も総じてタタリによってドツペルゲンガーが出現するだろう。

「待て……タタリの終わる条件って？」

勝利条件。

防衛のことばかり頭に浮かんでそこが抜けていた。

「終わる条件らしい条件なんてないわよ」

「つまりは……」

『ドツペルゲンガーと仮称するとして、それを殲滅するまで終わらない。ただ襲つてくるものを倒し続けられ』

「勝てる可能性は充分ある」

永琳の言葉にうなずいて言う。

防戦一方でも構わない吉報のように思える反面、全て叩かなければ終わらないという

## 凶報。

舌打ちをしてさらに思考するが、そこでハツとする。

「あ、いやすみません、素人が」

『別に良いじゃない。案外的を射たことは言ってるし』

「そう、言ってもらえると助かります」

仙人、茨木華扇の言葉に軽く礼を言つてリヨウはさらに紫の方を見る。

「ここまでの面子を集めて、これで終わりということはないだろう。」

「タタリが起ころるのは二日後、明後日よ」

その言葉に、リヨウは息をつく。

あと2日もあるならば対策は練れる。

故にすぐに立ちあがり、チルノと目を合わせて領いた。

「あたい、ルナたちのところ行つてくる！」

ルナチャイルド、三月精に協力を求めに行くのだろう。

リヨウは古参でも強い力を持っているわけでもない、しかしそれでも動く必要があつた。

状況と声などを聞いて、人里には繋がっていないこともおおよそ理解はしている。

紫の方に目をやると、静かに頷かれた。

「人里に行く、お前は？」

「妖怪の山に話をつけにくいわ、紙を通してじゃ無礼とか言われて話も通らないでしょうし」

「OKだ、文は？」

「チルノさんに、と言いたいとこだけドリヨウと行きましようか……二日後は山での戦いになるだろうけど」

それに領くと、すぐに脱いでいた上着に腕を通す。

やはりやれることは全てやっておく必要があると、異変解決の素人ながらに状況に抗う。

紫には紫の目的があるように彼にも彼の目的がある。

「人里の方、任されても良いですか？」

『人里の方は君と魔理沙に任せる』

「ありがとうございます、神子さん」

豊聡耳神子に礼を言っ出ていくリヨウ。

それに続いて文とチルノと大妖精も出ていったのを見て霊夢も動こうとしたが、止まる。

息をついてからゆっくりと座り直した。

「狙ってた？」

「ええ、彼は間違ひなく動くと思ってたわ。この一年で充分理解してる」

『彼を買っているんですね』

地底、旧地獄の古明地さとの言葉にクスツと微笑を浮かべた。

「幻想郷は変り者ばかりだけれど、あれは最先端の変り者だから……そりや覚えてるし見てるし、買ってるわよ」

「ま、あんたは嫌われてるけどね」

「構いませんわ。私はそういう者でありたいんだもの、それにだからこそ」

そこで止まって苦笑を浮かべた。

「いえ、とりあえず私は妖怪の山に行った後に地獄にでも行くわ。他の皆様も準備は怠らぬように」

それだけ言うとして神すべてと自分を「スキマ」に沈めて消える。

残された霊夢は一人、立ちあがり手をパキパキと鳴らす。

「リョウさんも変なのに気に入られるわね」

そう呟くと動き出す。

伝えなくてはならない友人たちがいるのだ。

人里はリョウに任せられるからこそ、そういう動きができる部分があるのだが、だか

らこそその心配もある。

今さらそんなことを考えても仕方ないのだが、と霊夢は思考を切り替え準備を始めた。

一方、リヨウたちは神社の前で固まっていた。

とりあえずチルノと大妖精は魔法の森に向かい、三月精に協力を求めなくてはならぬ。

肉体的な死がない妖精と言えど、痛い思いをして死ぬのはまた違ってくる。

だからこそしっかりと協力を頼む必要があった。

「それじゃ頼みますチルノさん」

「任せてよ！ リヨウと文も頑張ってるね！」

これから危険な戦いが迫っていても、そこ笑顔に曇りは一切無い。

「チルノさんの応援があればなんでもやります！ 調教しほうだいですよ！」

「お前の口縫ってやろうか！」

「調教って……文、犬とか馬になっちゃおうよ？」

「ち、チルノさんに犬と言われるとかもう死んでも良い！」

「良かったな良い機会だぞ」



「えっと、それじゃあ行きますね」

大妖精がそう言うのと、チルノが大妖精の二の腕あたりに手を添えると少しばかり気になったのかピクツと反応して、文は羨ましそうにしている。

その大妖精が額に片手の人差し指と中指を当てて目を瞑る。頭に浮かべるのは魔法の森。

「それじゃあお願いします」

「またね！」

そう言うのと二人が消えた。

大妖精の瞬間移動の能力による移動。

残されたリヨウと文の二人が、動き出す。

「さて、行くぞ、ついでに作戦会議だ」

「戦場が違うのにな？」

「だからこそだよ、八雲紫が俺を利用してこういう風に仕向けたなら俺もこの状況を上手く使っておきたい」

「そういうことですか」

その言葉に頷いたリヨウ。

文も少しばかり楽しそうにしている、リヨウの意図は理解しているようだった。

口角を上げたりヨウが掌を前に出してから、握りしめる。

「タイミングは悪くない」

「まあ確かに……」

「さて、行くか」

そう言うのと両手を出す。

「運べと」

「飛べないからな」

「……はいはい」

不服そうな顔をしながら翼を翻して飛ぶ文が上からリヨウの手を取る。

そのまま飛んではかなり腕に負担がかかるので風力も使ってふわっとリヨウを浮かせつつ飛ぶ。

「このまま直接人里に？」

「ああ、俺はな……ただ文に頼みたいことがある」

「チルノさんのためになるならなんでもどうぞ」

「そりやなにより」

そう言つて笑うリヨウに、文は苦笑をこぼした。

言いなりになるのは癪ではあるのだが、彼の提案に乗らないわけにもいかないし、

乗った方が間違いないとも理解している。

飛びながらそんなことを考えていて、ふと思いついたかのように文は言う。

「……チルノさんに犬って呼ばれたの羨ましい？」

「んなわけあるか、この色ボケ鴉」

深いため息をつくりヨウの視線の先には、人里が見えていた。

## 第13話『協力者』

人里に着いたりリヨウが文と別れてまずやったことは里の権限者らを集めることだった。

何人かに声をかけてそこから里の集会所に先に入り座っている。

徐々に人里の中でも一定の権限を持つリーダー各が集まり始めた。

こういう時に、喫茶店をやつていてなおかつ人当たりしていた甲斐があるというものでほとんどの人間が友好的に挨拶をしてくるし集まってもくれる。

そうしていると、関わりが深い者たちも現れた。

そしてその中の1人の少女に声をかける。

「ああ、ちよつといいか小鈴」

「リヨウさん、どうしたんですか一体……なんでかこんな偉い人ばつかの場所に私を呼んで」

ツインテールの少女、本居小鈴に声をかけた。

パタパタと小走り混じりで近より隣に座る小鈴に、そつと顔を近づける。

男とそこまで接近することに慣れてないのか顔を赤くしながらリヨウの言葉を待つ

小鈴。

「お前、八雲紫になにか頼まれたか？」

「えっああ、はい、妖魔本について聞かれて……ある本について探して読んでくれと」

「……タタリか」

「え、なんでそれを」

「後で話す」

その言葉に小首を傾げた後にハツとした表情を浮かべた。

みるみる内に彼女の顔が青くなるので軽く背中を叩き微笑を浮かべながら頷くと少しばかり顔色も良くなる。

状況がわかっていればこうもなるだろう。

「揃いましたか？」

そんな声が響いた。

発言したのは人里の賢者“稗田阿求”であり、隣には慧音が立っていた。

阿求が話を始めると一同すぐに沈黙し、集会所には静寂が訪れる。

「えーこれで全員ですね。ではリヨウさん、緊急事態ということで召集をかけましたが理由を」

その言葉に立ち上がるリヨウ。

注目が集まり少しばかり気にもなるがそう言っていられる場合でもない。

「急なことでしたが集まってくれてありがとうございます。まず召集をかけた理由ですが……明後日、異変が発生する予定です」

その言葉に、集会所がざわつく。

もちろん訝しげな表情を浮かべている阿求と慧音。

「予定？」

「オーケー言いたいことはわかる。歯医者や接骨院じゃあないんだからってことなら、もうそんな感じの流れはやった」

手を出してそう言っていると、阿求が首を傾げてリヨウの言葉を待っているがその前にリヨウは咳払いして頷く。

場の雰囲気はピリピリし過ぎていても困る。

どちらにしろピリピリはするだろうけれど、話やすさが欲しい。

「そもそも今回の異変は起こされたものというより、曰く『現象や災害』の類いとのことですよ」

「災害って……台風や大雪みたいな？」

「まあそういうことらしく、八雲紫曰く『タタリ』」

その言葉に誰もが正確に『祟り』を想像したが、それとこれは似て非なるものだ。

だが、すぐに理解するのは稗田阿求、数千年を輪廻転生した者。そして『一度見たものを忘れない』という能力を持つ者。

そんな阿求が顔を青くして頭を押さえる。

「阿求さんはわかるか」

「ええ、そうですかそういうことですか……対策は？」

その言葉は既に知っているリヨウに向けられたもの。

八雲紫から聞かされているということは、対策済みなのだろうという大凡の予想をつけてのものだ。

それも当然、リヨウが無策でここに「一般人」を含めたものを呼ぶはずがない。

策も無しに事実だけ伝えればパニックもいとこだ。

「対策というか作戦はあるから、とりあえずタタリについての説明をしておこうか」

「では、それは私から」

そう言うと、阿求が説明を始めた。

話を終えるまで座ることにしたリヨウだが、服の裾を引かれる感覚を覚えて振り替える。

引っ張っていたのは小鈴。

「どうした？」

「た、対策があるっていうのは本当ですか？」

「阿求さんが言ってただろ、対策もなしに集めたりはしないさ」

なまじ詳細を理解しているからこそその恐怖なのだろう。

数々の大妖怪や神が敵で、殺しに来るかもしれないのだから。

良い意味で適当に、小鈴に慰め程度の言葉をかけながらその頭をそつと撫でると、安心したような表情を見せる。

「そろそろ終わるか」

眩き周囲を確認するが誰もが顔を青くしていた。

冷や汗を書いたり、口を押さえて震えていたり、中には今すぐ逃げ出したそうで一杯の者もいる。

今までの異変とは違うい、明確にこにらを殺しに来る異変。

「以上がタタリについてですが、リヨウさん」

「ええ、阿求さんが話されたもので相違はないですね。タタリとはそういうもの、らしいです」

そう言うリヨウは不敵な笑みを浮かべていた。

対策は絶対ではない、だがここで不安そうな顔をしていればそれこそ混乱の元だ。

「とりあえずいつも通り、慧音さんにこの里の歴史を食ってもらって隠します」



「それで安全とはいかないでしょうね。里の人を狙うそれらが慧音さんを狙いかねない、知能があるかはわかりませんが『現象』そのものというぐらいですし」

「ああ、だから護衛に着く……」

全員、*「力が強い神や妖怪」*では意味がない。

相手の戦力の増強になりかねず、同等の力の相手プラス余計な敵がいればより不利である。

それは既に全員、承知しているだろう。

「俺と……皆さんご存知チルノ、魔理沙、それと大妖精でいくつもりです。場合によっては増えますが」

「待て他のところも戦場になっていいるならこちらにそこまで戦力を割いて良いのか？」

慧音の言葉にリヨウは首を横に振る。

微笑を浮かべて、人差し指を立てて言う。

「人里優先です。ほかのところならまだ拮抗してるからまだ良いがこっちはどうなるかわかりませんし、なによりチルノさんが犠牲が出るってのは許さないでしょうし……知ってるでしょ？」

「まあ……そうだな」

そう言つて慧音も微笑を浮かべた。

チルノは伊達にガキ大将をしていたわけではない。リーダー各をキープするのは力だけでなくそれなりのカリスマが必要になり、それ故の孤独すらも耐える強い心が必要になる。

孤独な者ほどそれを理解できるからこそ、慧音は領いた。

「とりあえずその戦力で向かってくるタタリ全てさばきます」

「その戦力で、本当に可能なんでしょうか？」

「よそこにも一応、戦力はありますからね……早く片付いたとこの者に援軍に来てもらう予定です。早い話時間が稼げれば良い」

阿求が領いて、ホツとしたような表情を浮かべた。

他の面々も同じくと言った表情で、リヨウの方を見ているのだが、不安そうな者もないでもない。

だが、こればかりは口で言ってお安心させる以外の方法はないのだ。

「とりあえず明日また集まってもらいます」

「もつと詳しいことはそこで、とっ？」

「ええ、まあ年密な計画を立ててここに在るわけだし、人里を守るといふことでそれなりに一致してる。安心しておいてください」

そう言つて、リヨウは笑顔を作り言った。

別段パニックが起こることもなく終わり、慧音が話を閉めてそれぞれ出ていく。仕事が進んだ者、小走りが出るし、そうでない者も早く伝えなくてはと出ていった。

小鈴もリヨウに手を降って去っていき残されるのはリヨウ、慧音、阿求の三人。そんな三人も少し雑談を交えつつ集会所から出てその前で止まる。

「お、きたか」

「射命丸？」

集会所の前には文が立っていたが一人ではない。

慧音は文のことを言ったがその隣には不服そうに腕組みしてたっている少女。

リヨウが笑みを浮かべて頷く。

「来たか、はたて」

腕組みしていた少女、姫海棠はたてがリヨウの前まで近づく。

身長差は約20センチぐらいだろう。

そんな下からの強い視線に苦笑する。

「来たか、はたて……じゃないわよお！　なんで私だけ連れてこられたの!？」

「俺のプランにお前は必要不可欠なんだよ」

「なにそれ」

訝しげな表情をするはたてに、リヨウは少しばかり申し訳なきような顔をしていた。それを見てはたても少しばかり表情を和らげる。

「頼むよ、人里の方にはお前が必要だ」

「なっ、なによ！ てか私だって烏天狗なんだからあ」

「コピーぐらいでてくる、だろ？」

はたての言葉に続けて言うリヨウ。

飄々とした表情で言う彼に、はたては目を細めた。

「私の実力、舐めてんの？」

「そういうわけじゃないさ、ただ……敵でお前が出てくるより、お前を連れられた方が間違いなく利口だと思っただよ」

「買ひ被りすぎじゃなくて？」

そんなはたての言葉にリヨウは頭を振って、慧音と阿求はそれを見守っている。

文は腕を組んで少しばかり眉をひそめていた。

「鴉天狗だろ、もうちよつと自信もて……てか俺は搦め手が好きなんだよ」

「搦め手って、あの戦闘スタイルで？」

「それは関係ないだろ」

そう言って後頭部を掻くりヨウに、慧音と阿求が笑って歩き出す。

「それではリヨウさんまた明日」

「え、ああ、また明日、慧音先生も」

去つていく二人、残されるのはリヨウと文とはたての三人。

溜め息をついたりリヨウが軽く髪をかきあげた。

雰囲気が変わる感覚を覚えるはたて。

「とりあえず頼むわ」

「なんか急に雑になつたわね」

そんな言葉にリヨウはバツの悪そうな表情を見せた。

「今回に限つては文も出せないからな。こいつが敵で出たら地獄に行つても見れないよ  
うなおもしろ殺戮ショーが始まるからな」

「まあ、片手間に殺されるわよね……あ、でもあんた」

「デモもストもないさ、一対一でさえないんだ。だからお前に頼る」

なんとなく彼の作戦に自分が必要なのは理解してはきたのだが、なんだかつつかえる。  
る。

文がその場において、静かにこちらを見ているというのも気にかかった。

「なんか腑に落ちないのよねえ」

「えーと……じゃあ愛故に」

「すっごい雑な愛！」

「おもしろそうな素材発見！」

「お前変なこと書いたらぶっ殺すかな！」

そんな言葉に文がケラケラ笑って返す。

どことなくいつもの雰囲気になり、はたては何の気なしにホツとしてしまい、そんな自分を自分で疑問に思う。

だがどことなく、リヨウを信用する気にはなつた。

そもそも本気で彼をそこまで疑っていたわけでもないのだが……。

「わかつた。とりあえずあんたの言う通りにする」

「サンキューはたて」

「おお、はたてがリヨウの愛に応えた」

「変な言い方するんじゃないわよ！」

少しばかり気恥ずかしくなり、顔が熱くなるのを感じる。

行きつけのカフェのマスター、友人に過ぎないリヨウだしそういう感覚で見たことなど一度もないのだが、そう言われると変な感覚を抱く、が……。

「……いやないか」

「なんだよ？」

「ないない」

そう言つて笑うはたてに小首を傾げるリヨウ。

文は理解しているのかケラケラ笑つていた。

少しばかりほのぼのした雰囲気の中、ふと気配がしてリヨウのすぐ横に二人の妖精が現れる。

額に指を当てて瞬間移動で戻つてきた大妖精、それとチルノ。

「ああ、おかえり大ちゃ」

「チルノさん！」

幻想郷最速が最速で、公衆の面前でチルノを押し倒して馬乗りになる。

無言の大妖精と呆れたような表情のはたて。

チルノは突然のことに目をパチパチさせたあと、首を傾げる。

「チルノさんおかえりなさい！ あなたの力キタレ（死語）射命丸文です！」

「死ぬ！」

背後から射命丸の首に腕を回してゴキツとなるまで捻る。

ぐったりした文を放つてリヨウはチルノを立たせた。

未だに状況が理解できてないのか首を傾げるチルノ。

「この万年発情クソ鴉が！」

「ねーリヨウ、なにがどーなってるの?」

「気にしないでチルノさん」

「そうだよチルノちゃん、あんな天狗放っておこ?」

「なんだか文が悪いことをしたのだろうとは思うチルノはとりあえず領いておく。

「あややや、痛い、ひどい」

「そう言つて首をゴキツと戻して立ち上がる文に誰も驚かないあたり慣れがあるのだろ。」

「はたても呆れたようなに溜め息をついて四人に近づく。

「文がチルノに抱きつこうとしているのを片手で頭を押さえて止めているリヨウ。

「とりあえずルナたちはオツケーだつて!」

「意外とはやかつたですね」

「大ちゃんが説得した」

「大ちゃんなんて言つた?」

「協力しなきゃリヨウさんがキレてお嫁にいけなくするつて」

「大ちゃんさん!!」

「驚愕するリヨウ。」

「爆笑する文。」



着いていけないはたて。

「まあそれは良いじゃないですか、協力は決まりましたよ」

「良くないけど」

「やーいロリコン犯罪者！」

「お前には言われたかねえんだよ！」

くわつと表情を変えて言うが文はどこふく風。

「とりあえず次行くぞ次」

「次ってまだ協力者いるの？」

「ああ、いるさ」

そう言つて笑うリヨウがトントんと自分の頭をつつく。

理解した文が『なるほど』と手を叩き大妖精が苦笑を浮かべた。

「バカを集める」

その言葉に頷いたはたて。

歩き出すリヨウに着いていく面々。

二日後、近づく決戦でできることは全てする。

リヨウの目的は一つ、人里を守るなんてそのついでにすぎない。

文も妖怪の山なんてどうでも良い。

大妖精だって同じだ。

〃チルノ彼女〃の〃異変解決望み〃を叶えるのみ。

「そういえば幻想郷バカまみれだけど」

「違うない」

「あやや、言われてますよりヨウ」

「お前もだよ」

## 第14話『鬪争』

あの日、「タタリ」が起こるとされてから2日が経った。

つまりタタリ発生の日、八雲紫に「タタリ」の発生時間まで割り出され、リヨウたちはそこに立っている。

所謂、草木も眠る丑三つ刻。

現代風に言うならば、おおよそ午前一時。

そんな深夜に人里の門前に立っているのはリヨウ、チルノ、大妖精、慧音、魔理沙、はたて。

昼間に十分眠ったお陰か、チルノはハッキリと意識を覚醒させて腕を組んで待つ。腕を組んだチルノの両隣にリヨウと大妖精、リヨウの背後にはたて。

後ろにいた慧音が静かに息をつく、背後の人里が「隠される」。

魔理沙がそんな面々を集めて苦笑した。

「チルノおその並びだとなんか強そうに見えるな」

そんな言葉に、チルノとリヨウと大妖精が同時に口を開く。

「なに言ってるの魔理沙、あたいはさいきよーよー」

「なに言ってるんだ魔理沙、チルノさんはさいきよーだ」

「なに言ってるんですか、チルノちゃんはさいきよーですー!」

三人の言葉に驚いたような表情を見せる魔理沙と、呆れたようなはたて、慧音は苦笑しつつ前方を見据える。

次の瞬間、背筋にピリツとした感覚を覚えて魔理沙は慧音が見ている方を見て帽子をスツと押さえた。

はたては翼を広げ、大妖精はその手にクナイを持つ。

「くるらしいよ、チルノさん」

「どっからでもかかってきなさい!」

リョウが地面に落ちている石ころを軽く蹴りあげてパシツと手に持つ。

チルノが体から冷気を溢れ出させ、周囲の風が揺れる。

「近づく奴から氷漬けにしてやるわ!」

そして眼前に——「タタリ」が起きた。

最初からそこに在ったかのように存在する妖魔。

見覚えのありそうな狼のような奴やコウモリ、蜘蛛やらヒトガタのナニカ。

全て共通して——暗い。

50はくだらないその数を見て、チルノがニツと笑う。

「さあ——異変解決、開始よッ!!」

その瞬間、動き出す。

瞬間、リヨウが握っていた小石を力一杯に投擲。

鋭く尖ったそれが赤い輝きを宿しながら真っ直ぐ一体の頭を貫いた。

暗い血液を撒き散らすタタリで産み出された“分身体”。

「『弾丸ごっこ』だ」

「遅れんなよチルノ!」

「魔理沙こそね! はたて、けーね先生をよろしくね!」

「やれるだけやるわ!」

そう叫ぶはたてが慧音の隣に立つ。

別に慧音は弱くはない、だが“最高の実力”ではない慧音にガード役は必要だ。

慧音<sup>人里</sup>目掛けて走ってくる分身体の前に立つリヨウ。

「……しっかり頼むわよりヨウ!」

「わかってる!」

その手に纏うは紅の気。

分身体が慧音に走るように、正面から走るリヨウはその腕を横に伸ばして走り、振るう。

ただし拳を叩き込むでもない、それは――。

「ぶっ潰す！」

――ラリアット。

分身体の体が地面に叩きつけられる。

ぐつたりとしたその体を、同じく紅い気を纏った脚で蹴り飛ばすと、眼前の数体の敵に両手を向けた。

それと同時に放たれるのは数十もの“霊力”の弾丸で、それらに被弾した分身体たちが止まる。

「ここらでお遊びはいい加減にしろつてところを見せてやる」

「その台詞は死ぬわよイキリチンピラー！」

はたての言葉に青筋を浮かべながら振り返った。

瞬間、リヨウを襲おうと狼のような分身体が迫るが、リヨウが振り返ると同時に蹴り飛ばす。

倒れていた狼が起き上がろうとしたその時、上から落ちてきた大妖精がその狼の頭部にクナイを突き刺す。

「さすが大ちゃん」

「私、アイツのああいうところが怖いのよね」

はたての言葉に頷くリヨウ。

顔を上げた鋭い目をした大妖精が、横から近づく蜘蛛型の分身体にクナイを投げつけ、その活動を停止させた。

すぐに新しいクナイを両手に持ち、大妖精が地上を走る。

「うわ、空にもわんさか出てきやがった。魔理沙に頼むか」

「私のドッペルゲンガーはいないみたいねえ」

「出る前にさっさとこいつら潰す！」

そう言うと、リヨウも敵の軍勢に走っていく。

分身体は誰の分身がいつ出るのがランダムらしいと、紫には聞いた。故に速攻をかける。はたてと慧音も上空から近づく敵に手を向けた。

一方、チルノは敵に囲まれた状態。

だがその顔は不敵な笑みを浮かべており冷気が足元を凍らす。

放たれる分身体たちの「弾幕」だが、チルノが腕を振るえば、凍る弾幕。

そしてチルノが両手を広げ必殺技スペルカードを使う。

スペルカードルールに縛られない戦いはスペルカードの枚数や宣言すら存在しない

が、それでも必殺技は必殺技。

違うことと言えば、受ける側の難易度ぐらいだ。

——凍符「パーフェクトフリーズ」

そしてお返しとばかりにチルノから放たれる弾幕に被弾していく分身体。

「みんな大火傷ね！」

上空から見える地上のチルノの戦いに箒にまたがつて飛ぶ魔理沙が笑みを浮かべた。

その青い少女の周囲の綺羅びやかな氷細工。

だが、見惚れたままでいられるほど優しい戦場ではない。

「やるなあチルノのやつ、あたしも負けてらんない、かな！」

右手にミニ八卦炉と呼ばれるモノを持つ。

それを眼前の「敵勢」に向けて、ニツと笑みを浮かべた。

初っ端から手加減なし。

魔理沙の性格を表す一直線な技。

「マスターアア……スパアアアクツツ!!」

——恋符「マスタースパーク」

放たれる極太のレーザーが敵を撃ち落とす。

だがまだ敵はいるしむしろ増えてる気すらしていた。



否、実際に増えているのだろう。

「厄介だぜ、まあ援軍が来るまで持ちこたえられりや良いだろうけど……！」

加速した魔理沙が弾幕を散らしながら、空を駆ける。

地上のリョウが放たれる弾幕を避けながら素早く人型の敵に走った。

ただの人間にしては強い部類に入るだろう彼の戦闘スタイルは主軸が肉弾戦である。

弾幕の数はそれほどでもないし、レーザーだって十数秒の溜めが必要で、しかも一発づつ放つのが精一杯。

故に「氣と靈力」というものを学び自力でここまでやれるようにはなったが、所詮は「その程度」という域を出ない。

それでも、効率良く敵を「潰す」方法に関しては頭が良く回り、容赦無用の戦いであればその戦闘力は「弾幕ごっこ」の時とは一線を画する。

「ッ！」

人型の分身体が鋭い爪のついた手をリョウの顔に向けて振るうが、軽く体勢を低くして避けつつ加速をつけて跳んだりリョウが、両足を揃えてその顔面に蹴りを叩き込む。

「リアッ！」

——ドロップキック。

両足がその顔面にぶつかった瞬間、軽い爆発のようなものを起こして吹き飛ば分身体。

蹴りが入った瞬間、脚部に弾丸を生成し爆破する情け容赦なしの一撃。

ドロップキックによりそのまま地面に落ちつつも、慣れているのがわかるぐらいに綺麗に受け身を取ったリヨウは、即座に腕のバネを使って素早く起きあがる。

波状攻撃の様に次にと迫る別の人型分身体に対し、リヨウは視線を向けた。

「当たるかよッ！」

相手が弾幕を放ちつつ接近してくるがそれらを回避し、気を纏った拳で捌く。

そして近距離クロスレンジにまで接近した分身体の振るわれる拳を回避し、後ろに回り込むと素早くその胴体に両手を回した。

リヨウが敵をホールドしたまま後ろに体を反らすと、分身体は勢い良く宙に浮く。

「シャオラアッ！」

——投符「投げっぱなしジャーマン」

その勢いのまま、掴んでいた両手を離すと分身体は真っ直ぐに飛んでいき、別の分身体につかる。

そして投げ飛ばされたその腹部には、紅い気の弾丸。

分身体が驚愕の表情を浮かべた瞬間、その気弾が拡散し数十の弾幕となって周囲に撒

き散らされた。

「やっぱ人型はやりやすいな」

「ちよつとリヨウ！ あんたまだ全然倒してないじゃない！」

「弾幕は火力だぜー！」

「うるせー！」

離れた場所から飛んでくるヤジに文句を返してから、溜め息をつきつつ、リヨウは次の敵に視線を向ける。

とりあえず弾幕を展開して敵の動きを妨害しつつ走ると、分身体をラリアットで倒してその頭に気弾を撃ち込む。

「仕方ないッ！」

後ろに何度か跳ねて敵と距離を取る。

両足を開き地を踏み締めると、両手を球を掴むように合わせて脇の方へと持つてきた。

その姿を見て、チルノは上空へと飛び上がり、同じく意図を理解した大妖精はすぐにリヨウの「射線上」から回避。

そして上空の魔理沙が苦笑を浮かべる。

「例のレーザー系か……！」

そう、チャージに十数秒がかかるのは魔理沙も知っていた。

所謂レーザー系はその他の弾丸と要領がまた変わってくるものであり、習得している者といない者がいるのも事実でリヨウは元々弾幕ルールについては「才能が無い側の人間である。

だがそれでも彼はそれを一撃とは言え、戦場で十数秒隙を晒すとは言え、撃てた。

離れた場所から慧音が分身体の一部を頭突きで倒し、はたては素早く弾幕を形成し敵を牽制。

慧音がリヨウの方を見る。

「……弾幕ごっこはイメージだ」

「え？」

「あれに関しては、少しばかり罪悪感もあるんだ」

いかに密度の濃い弾幕を作るか、なおかつ「避けられる」弾幕を作るか、そして美しい弾幕か……。

花火の如く美しく、色鮮やか、華麗に優雅に、そんな弾幕を用いて荒事を「ルールに則って」収める。

それが「スperlカードルール」だ。

## ——妖怪の山。

色鮮やかな弾幕が飛び交い、数百数千の天狗の分身体とオリジナルが戦う。

その中でも一部の者しか捉えられぬような速度で加速し、弾幕を拡散しあう二つの影。

それがぶつかり、距離を取る。

「ハアツ……あやや、さすが私、ですね」

射命丸文の視線の先には射命丸文……その分身体。

暗い色をした自分を前に苦笑して肩をすくめ、余裕そうな表情を浮かべつつも内心では少しばかり状況の不利さを理解する。

気づいたこととしては、相手に疲労が見られないということだ。

「休憩、でもないですかッ！」

放たれる弾幕を回避していく文。

文は余裕を保ったふりをしつつもそれなりに疲労が溜まっている。

分身体も同じように隠している可能性がないでもないが、それにしては文のスピードが少しばかり落ちてきたのに対し向こうは変わらない。

「厄介な……」

瞬間、背後からの視線に気付き振り向くと同時に、迫る刃を羽団扇で受け止める。

振るわれた剣を羽団扇が受け止め、唾競り合う。

普通の羽団扇ならばそのままサククリだ。

「っ！」

「チエストオ！」

目の前の剣を持つていた“犬走椀”が後方へと跳び、文の前に“犬走椀”が立つ。

先に攻撃してきたのは分身体だろう。

椀に背を向ける文が自らの分身体に視線を戻す。

「今のが分身体ですよね？」

「さて、どうだか……」

「まあ驚きませんけど」

とは言うものの、お互い犬猿の仲と言えどこの状況は理解しているだろう。

それに椀とて文の強さを丸々コピーしたモノを相手にするのは厳しいものがあると自覚はしている。

「ハッ！」

文が羽団扇を振るい色とりどりの弾幕を形成し、椀の分身体も自身の分身体も牽制しつつ息を整える時間を稼ぐ。

椀もさらに波状攻撃的に弾幕を形成した。

意外にも、椛が口を開く。

「綺麗なものだ、貴女の弾幕は」

「私を褒めるなんて珍しい」

「嘸みつくな」

「あややこりや失敬」

文が再び羽団扇を振るった。

「しかし、弾幕はイメージと実力ですから」

「自分はイメージ力と実力が十分と？」

「嘸みつかない」

そう返して苦笑。

「イメージ力があれば実力がなくてもそれなりの弾幕が作れる。また実力があればイメージ力がなくてもそれなりの弾幕がつくれる」

「双方が揃えば『最強』と、そういうことでしょう」

自慢話を聞いているようで顔をしかめる椛は、自分が発した単語で青い少女を連想した。

背後の女の『最も大切』な少女。

文はそのまま話を続ける。

「いえ、早い話が弾幕……ひいてはスペルカードなんかは『私たち』や『この現象』なんかと似たようなものでしょ」

「……そういう意味では、な」

「だからこそ『純粹最な力強のみ』をイメージして作られたスペルカードは、美しさも華やかさもない技。しかし、それでもそのメッセージ性だけは、確かに理解できる」

「今日はやけに詩人臭いな」

椀の皮肉を聞いているのかいないのか、聞いていても届いていないのか、文はそのまま話を続ける。

思い浮かべるのは一つの無骨なスペルカードと使用者たる男。

まともな弾幕も作れるはずなのに、絢爛華麗なイメージはできるはずなのに彼が生んだ高火力スペルカードは、武骨なものだった。

「それでも、アイツらしいとか、思っちゃったんですよ」

「……ああ、そういうことか」

しかし、レーザーというものを自分が出すイメージをしると言われたとき一体どういう風なイメージをするだろう。

文は既に初めて撃ったときのことなど覚えていないし、もしかしたらイメージなんて対してせずともできたかもしれない。



彼は気を扱うことだって靈力を扱うことだって割りど無難に覚えたが、それだけは何の苦戦を強いられていた。

曰く『俺からレーザーが出るイメージなんかできねえ』だった、そこである半妖は言った。

ならば、誰かが撃っている姿を想像しろと……。

そして、そのスペルカードは、純粹な力破壊光線”を成立させた。  
ルール作法無視の無骨で力のみのスペルカード。

なまじそのイメージで完成されたせいでそのスペルカードは彼自身が好きな”  
揃頭を使う”手作戦では使う機会を大幅に失い、レーザーはその撃ち方以外で撃てないだろ  
 う。

だがそれでも彼の”得意嫌い”なガチンコ勝負で使う姿は似合っているし、なによりも

……。  
カッコイイ「綺麗とか思っちゃったんですよ。そのスペルカード」

そう言いながら、自分自身の分身体に三本のレーザーを放つ。

風を纏い、木の葉と黒い羽が舞い散る美しい光線。

さらにその間を加速し文は自らの分身体に蹴りを叩き込む。

——そして、リヨウたちの戦場。

眼前の敵をしつかりと睨み付けながら必殺技スベルカードを発動する。

イメージするはただ一つの〃照射レザイであり必殺技ビームであり〃気の波。

視線は空いた、避けようとももう遅いし、幻想郷広しとて今さら間に合う奴なんてそうはいない。

合わせた両手の中に輝く紅い光。

球を持つように合わせた両手の指の隙間から溢れ出る輝き。

そしてその両手が、突き出される。

——闘符「懐古の気功波」

「波アアアッ!!」

紅い光と共に、破壊の閃光が放たれた。

その一撃は妖魔を呑み込み伸びていく。

その一撃は地を削る。

その一撃はただの一撃で十分だった。

「つ……ハアッ、はあつ……」

閃光が消えると、リヨウは手を下ろして肩で息をする。

射線上の敵は消え失せたが、まだ全滅には遠い。

ここでの消耗は押さえたかったが速攻で決めるにはここで使うのが正解だ。  
「たくつ……」

軽く髪をかきあげつつ、前方を見据える。

放った一撃は魔理沙の「全力の必殺技」マスターパークにすら匹敵することだろう。

しかして、リヨウと魔理沙の違いは放って仕留められなかった後のリカバリだ。

「相棒いなきやマジで無理だな、これっ……」

目の前には凍りついた狼。

それが上から降ってきた少女の蹴りで粉々に碎け散る。

キラキラと星のように輝くダイヤモンドダスト。

「だからあたいがいるのよさ」

「さすが、チルノさん」

前に立つその姿はまさに「さいきよー」だった。

少なからず彼等リヨウたちにとつては彼女こそが「さいきよー」なのだ。

だから遠く、だから離されないように着いていき、隣に立てるように……。

「シャアッ！ まだまだいきましようチルノさん！」

「あたいに任せなさい！ 無敵のパーフエクトフリーズでキラキラにしてやるわ！」

なんかメイクアップしそうだな、と思うが言わずにリヨウは再び拳を構えた。

——  
戦いはまだ終わらない。

## 第15話 『大戦』

——忘れられた者たちの楽園、幻想郷。

戦闘は各所で起こっていた。

それもそのはず、幻想郷に妖魔がない場所などなく、人里とてまた然り。

故に、どこもが戦場、あらゆる場所が命をかけた殺戮シヨ。

対等の敵との戦闘という命懸けのギャンブル。

死を恐れる自分と死を恐れぬ自分。

疲労する自分と疲労も知らぬ自分。

弱いものたちは怯えながら隠れ<sup>夜</sup>異変<sup>明</sup>解決<sup>け</sup>を待つ。

強き者たちは自らを消し去るため、また自らを証明するため戦う。

どちらでもない者は自らのするべきこともわからない。

そして強者であろうと弱者であろうと普通であろうと、やるべきを理解した者だけ

が、本来の意味でこの現象と戦う。

自分の友のためや、自らを「殺し」守るべき者を守るため、この現象は心を殺すタタ

り。

だが、それでも折れず戦う者たちが確かにいるからこそ、まだ幻想郷は生きている。

——妖怪の山、地上。

多数の河童たちが兵器を使い戦う。

タタリの分身体たちにはない武装を駆使して、確実に襲いかかってくる分身体を消す。

銃撃を行っていた河童たち、調子に乗って前線に出る河童たちの銃が突然、弾詰まりを起こした。

混乱する河童たちがすぐに気づく。

厄が溢れ出ている。

「厄神様か！」

後方にいた河童の一人である『河城にとり』が叫ぶ。

敵の中でも先頭きつて接近してくるのは緑色の髪、赤い服の厄を纏ろう者。

「なら、私が」

「っ！」

現れるのは厄神様のオリジナルこと鍵山雛。

その雛が自身の分身体を掴んで、そのまま押し込んで森の中へと消えていく。

河城にとりは素早く近場の「トランシーバー」を手を取った。

「鍵山雛確認！　あと山中で出てない強力なドツペルゲンガーは!?」

『守矢神社の二柱と秋姉妹は確認済み、天魔様や射命丸も……恐らくこれで全部かと!』  
それを聞くと同時ににとりは側にあるスイッチを叩くように押す。

弾幕の数々が襲いかかるも、にとりも持っている銃で応戦。

そして、にとりたちの背後から轟音と共に上空に向かって放たれたのは真つ赤な照明弾。

「リヨウ、これで良いのかいっ……」

そう言いながら転がるようにバリケードの裏に隠れる。

肩で息をしながら上空を見上げるが、色とりどりの弾幕が飛び交っていた。

「あんたの作戦信用してないわけじゃないけど……」

悪態をつきながら、バリケードから頭を出して銃撃。

「奢ってもらうからなあっ!」

そんな叫びが妖怪の山に響く。

——紅魔館。

門から飛び出る。いや、吹き飛ばされる影。

吹き飛ばすのは暗い色をした紅美鈴。

吹き飛ばしたのは通常通りの紅美鈴。

二人とも流血しており、勝負はどっこいどっこいと言ったところなのだろう。

上空ではレミリア、フランドールの二人が己の影と戦っている。

咲夜とパチュリーは少し離れた森の中はずだ。

次の瞬間、上から落ちてきたのは装飾された紅の槍で、それは彼女の主人のものに間違いはない。

門前に突き刺さるそれを見て顔をしかめつつ前を見るが、周囲にナイフが展開された。

「咲夜さんッ!?!」

地面を勢い良く叩くと空気が揺れ、周囲のナイフが弾き飛ばされる。

だがその隙に接近してくる美鈴分身体が美鈴に蹴りを打ち込んだ。

両腕でガードしながらも、吹き飛ばす。

「美鈴!」

主の声が聞こえ意図を理解し、両足を着いて門前で止まった。

真横に刺さっている主人の槍、グングニルを手に取ると回転させて構える。

迫る自分を槍を振るって吹き飛ばす。



「……私が倒れちゃ家族にも弟子にも示しがつきませんからね！」

口元を伝う血を拭って、美鈴は立ち上がる自らの影を睨み付ける。自分たちだけが守れても仕方がないのだ。

一刻も早く終わらせ、助けなければならぬ弟子がいる。

——迷いの竹林。

人里から少し離れた場所にある竹林の中を炎が舞う。

放たれた炎を別の炎が呑み込む。

竹を蹴って加速した「影」が、勢い良く着地、スライディングしながら後ろに振り返り手から火を放つ。

「いい加減ッ！」

藤原妹紅は悪態をつきながら火を放った方から現れる自身の影を見てため息をつく。体の半分が焼失しているように見えるが、やはりそこは妹紅と同じく問題なさそうだった。

息をついて走りだす妹紅に合わせて、分身体も走りだす。

「てか、ちゃんと死ぬんでしょねこいつッ！」

足を振るうが、それを回避した分身体が火の宿った拳で妹紅の胸を貫く。

だが妹紅の体が炎へと変わり、そのまま分身体を取り込む。  
燃やされる分身体だが、そこと妹紅の分身体。

「クッ!!」

炎が妹紅と分身体に戻るが、既にお互いの腕を合わせて組み合っている状態だ。

妹紅は素早く頭を突き出して頭突きを見舞うと少しはダメージが入ったのか、手の力が緩んだので距離を取りつつ額を押さえる。

訝しげな表情を浮かべながら眼前の敵を睨む。

「痛うう、慧音なら頭突きで一撃だったのに」

そう言う妹紅。

目の前の不老不死蓬菜人を殺すことができるかは、わからないものの、目の前のそれを放置していい理由にはならないだろう。

故に、疲労は隠せなくても戦う。

「どっちが先に死ぬるかの勝負か……おもしろい!」

その背中に炎の翼を展開する。

「殺してあげるわ!」

そして、蓬菜人が翔ぶ。

人里には大事な人間たちがいるのだ。

## ——輝針城、外部。

空にそびえる鉄の城。

別にスーパーロボットは関係ないのだが、そう形容するのが一番正しくあるだろう。

それにスーパーロボットなど出てきてはどこぞの風祝が真つ先に飛んでくるので作る予定もだす予定もない。

楽園の素敵な巫女から言わせれば欠陥住宅と名高い、空から反対向きにそびえ立つその城の周囲には弾幕が飛び交っていた。

そしてその中に「空飛ぶ石」に乗る少女が二人。

青い髪を振り乱し、片手に持った「ビームサーベルの様なもの」で向かってくる弾幕を切り裂きつつ、脇にいる同じく青髪の少女に笑みを浮かべる。

余裕そうなその表情、だが確かに厄介ではある……敵は己自身だ。

「たく、以外とメンドくさいわね」

「て、天人様……すみません、わたしも一緒に」

「いやいや、むしろ放置してたら大変でしょうよ」

天人、比那名居天子が笑って答えると貧乏神こと依神紫苑は不安そうな表情で敵を見た。

天子と同じく要石と呼ばれる石に乗って飛んでいる分身体と、反対側に挟み込むようにして紫苑の分身体が存在している。

ちなみにもう一人、少名針妙丸という少女がいたのだが“不慮の事故”により分身体と頭をぶつけ合い落ちていった。

死んではいないだろうが、戦線復帰は無理だろう。

要石同士がベーゴマの如くぶつかりあい、天子が自らの影と剣『緋想の剣』を唾競り合わせる。

そんな天子の背後で紫苑が背後に弾幕をバラ撒き自身の幻影を妨害するも、着々と接近してきていた。

それを確認した天子が目の中の自分に蹴りを入れる。

「掴まってなさい紫苑っ！」

「えっ、は、はいっ!？」

ふらつく分身体を前に緋想の剣を逆手で持つとそのまま自身の要石に突き刺し、紫苑を引き寄せる。

それと共にまさにベーゴマの様に回転する要石が、接触していた分身体の要石を吹き飛ばした。

「紫苑！」

「ふぁいー！」

回転しながらバラ撒かれる弾幕に、二体の分身体が被弾するもまだ倒せてはいない。

だがそれでも時間稼ぎにはなり、回転を止めた要石の上で天子は軽く舌打ちしつつ紫苑を離し緋想の剣の光刃を消す。

「あのワンコが言ってた通りやっぱ影同士のコンビネーションは皆無みたいね」

「えつと……リョウですか？」

「そうそう、あのワンコ」

「ワンコってより狂犬じゃあ……」

立ち上がって帽子の位置を直しつつ、軽く緋想の剣の柄を投げてから順手に持ち直した。

目の前に存在するのは自分、そして紫苑。

「たく、紫苑と同じ姿ってのはやりづらいわ」

「す、すみません天人様……」

接近してくる紫苑分身体を確認して、要石にて距離を取りつつ弾幕で牽制。

隣にいる紫苑の頭を軽く撫でた天子が静かに首肯く。

「私は許すわ……だが緋想の剣が許すかな！」

そう言って要石から飛び出した天子が、紫苑分身体を斬りつける

「浅かったー！」

そう言う天子の足下に要石が加速して追い付き、要石に着地した天子は再び接近してくる自身の分身体を確認。

緋想の剣の切っ先をスツ、と向けると紫苑を自身の後ろに下がらせた。

「どーなるうが知ったこつちやなかつたんだけど」

「あの……天人様？」

「ワンコに頼まれて約束しちゃったし」

弾幕が放たれるも、輝く緋想の剣が一振され眼前の弾幕がすべてかき消されると、天子はフツと笑みを浮かべながらさらに一振。

大量の弾幕が撒き散らされる。

「美しく残酷にこの幻想郷から往ね!!」

——人里。

本来ならば人里のあった場所、そこには現在人里はなくなただの戦場か広がるのみ。

上空から青い閃光のように、チルノが一体の分身体に蹴りを打ち込むと、吹き飛んだその分身体が塵となって消える。

そのチルノを背後から襲おうとした人狼、その足にクナイが突き刺さった。

「さっすが大ちゃん」

笑うチルノの背後でその人狼の頭にクナイを突き立てる大妖精。

そんな大妖精も笑顔を浮かべて、上空を見上げる。

心配もないだろうなと思うのは魔理沙はいつも通り戦うのみ、だからだ。

「いっくぜー！ 出し惜しみなしだー！」

——魔符「スターダストレヴアリエ」

放たれる色彩豊かな弾幕に、避けることもできずに落ちていく妖怪たち。

倒せていても倒せていなくても構いはしないのは、下の仲間を信頼してのことなのだろう。

地を走るのはリヨウ。

紅い気を纏い、さらに強く地を蹴り数メートルを跳んだ。

彼は飛行はできない、それは彼を知っていれば当然のように皆知っているのだが、不思議なことに彼は「飛行」できないだけである。

空中で落ちながら移動はできるし、加速もできるのにも関わらず上昇浮遊ができない。

「くっそマジで飛ぶ奴等とか人間かよー！」

そう言いながら魔理沙に近づこうとする妖怪の足を掴み、そのまま地上に加速。

分身体が暴れだすが、リヨウは素早く体勢を組み換えていくと、妖怪の足を上にその足を掴んで足は妖怪の脇に、拘束しつつさらに加速。

「潰れるオツ！」

—— 壊壊 「グレートクラッシュャー」

そのまま地上に頭を叩きつけられる分身体。

頭が潰れ血液が周囲に飛び散ると、その体を蹴り飛ばして空中の敵を落とす。落ちてくる敵の着地点まで走り、地上につく前に蹴り飛ばす。

それを見ていたはたてが顔をしかめた。

「悪魔みたいな戦い方するわね」

「まったくだ」

げんなりする二人のもとにリヨウが戻ってくる。

見ている方向は妖怪の山の方であり、弾幕の光が見えるがその中でも一際輝く照明弾を見た。

「誰が悪魔超人だ」

「いやそこまで言っていない」

「今日は慧音さんとツープラトンもできないしな」

「角が生えてたら別だがか」



苦笑する慧音、呆れるようなはたて、そしてリヨウはピリつくような空気を感じて空を見上げ、顔をしかめる。

黒い翼が舞い、黒い羽が落ち、現れるわ少女の影。

わかつてはいたことだが、やはり「全力の殺し合い」で鴉天狗が出てくれば思うところがあった。

「おいはたて、きたぞ」

「なんであたしがあたしと戦わなきゃなのよ」

ため息をつきつつ、はたては前に出ようとするがリヨウが手を出して前に出る。

まったく同じ強さの天狗同士の戦いに人間が手をだす危険性。

だが、はたては頷いて下がる。

魔理沙とチルノと大妖精もさがってきた。

「あとはたて、念写を頼む」

「え？」

念写の目的を話すと、はたては頷く。

指をパキパキ鳴らしつつ、顔をしかめつつ、それでも前に出た。

チルノや大妖精、慧音も心配そうにしているが仕方がないとリヨウ自身思っているし覚悟もしている。

大妖精の方を見ると静かに頷き会う。

「いいから、慧音さんは巻き込まれないようにしてください。全員間違っても手を出すなよ」

「りよーかい、雑魚はやつとくよ」

「流れ弾気を付けとけよ」

そう言うと、リヨウが息をつく。

やるべきことは一つ、答えは出ていた。

そつとチルノを見る。

「リヨウ、勝つてね！」

「お任せあれ！」

タタリに具現化されたはたてに向かって跳び上がった。

見送られるリヨウ、魔理沙とチルノが再び分身体たちの元へと飛ぶ。

慧音も両手を構えて弾幕をいつでも張れるようにする。

「念写ね、やるわよ……」

そう言った瞬間、リヨウが斜め上から吹っ飛んでくる。

はたてと大妖精の間を通って砂煙を上げながら落ちてはたてはゆっくりとそちらを見て、顔をしかめた。

「ハッ……」

笑いながら立ち上がるリヨウは頭から血を流しながら歩く。

ちなみに一撃をもらったにすぎない。

心配そうなたてにふらつきながらサムズアップするリヨウ。

「よ、余裕だよ……」

「すっごい不安！」

## 第16話『降雨』

人里であつた場所で、山ほどいる妖怪たちを相手取るチルノと魔理沙。

氷が地を走り、その先で氷の針が飛び出る。

魔理沙が八卦炉からレーザーを放ち一掃。

「キリがないぜー！」

「リヨウが頑張つてるんだ！ あたいだつて！」

だが二人とも肩で息をしている。

数時間のぶつ続けの戦闘、魔理沙もノーダメージではなく、チルノとてまた然り。

額から流れる汗を拭い、魔理沙は後方のリヨウを見る。

「死なないだろうなアイツ、こつちがなんとかできるもんでもないだろう？」

「うん、タイマンで頑張つてもらおうしかないのよさ」

「チツ、歯痒いな」

そして魔理沙は八卦炉を向けて敵へと突つ込む。

リヨウが両足を地につけて目の前に迫る風の刃を “拳で拡散させる” とさらに接近してくるはたての分身体の蹴りを回避、その顔面に拳を打ち込んで吹き飛ばす。

空中で回転しながらも、体勢を整えるはたて分身体に、さらに接近しその腹部に拳を叩き込む。

それを見ていたはたてが顔をしかめる。

「容赦ないじゃない」

「しかし勝負になつてきたんだ。手を抜くわけにはいかないだろう……きつとまだ続く」

違いないが、はたてとしては自分と同じ姿のものが友人である彼にしこたま殴られて鼻血やら流しながら吐血していたりする姿は快いものではない。

どこもそうなのかもしれないが、自分じゃなくて友人がそれをやっているのが気になる。

「かわいいそうじゃないと抜けないタイプかしらねえ」

「ぬっ!? そ、そういうことを言うな!」

「意外に、いや初心っぽいか」

そう言いながらリョウウから目を逸らして、迫る妖魔を風で吹き飛ばす。

だがまだ敵は多い。

その時、すぐ前に現れるのは大妖精。

「よし帰ったわね!」

そしてそんな大妖精と共にいるのは三人の妖怪。

誰もがボロボロではあるのだが、戦うつもりの方ですぐに構えた。

ミステリア・ローレライ。

リグル・ナイトバグ。

ルーミア。

チルノの友人三人組。

先ほどリヨウがはたてに念写させて戦闘終了を確認させ、さらに大妖精に連れてこさせた。

そもそもそういう作戦ではあったのだ。

三人のコンビネーションがそこそこなを知っていたリヨウが、さらにこの二日でそれを実践レベルにまで上げて一対一で戦うよりもさらに効率良くした。

故に、ここ一番の速度で自身の分身体を殲滅が可能となったということだ。

「いくよ三人とも、チルノちゃんの援護！」

「わかってるよ。ホントもう、チルノばっかだね大ちゃん」

「今さらでしょ……あ、リヨウさん戦ってる」

「わはー、相変わらず血生臭いなー」

大妖精、リグル、ミステリア、ルーミアの四人が同時に動き出す。

リグルが放った蟲が敵を貫き、また別の蟲が弾丸を放ち弾幕を形成する。さらにミステイアが歌を口ずさみながら弾幕を放つ。

ルーミアは敵に接近してその喉仏を引つ掻き削る。

「ハッ！ よーやくきたわねー！」

そう言つて笑うチルノの隣に立つのはルーミアとリグル、背後にはミステイアと大妖精。

それを少し離れた位置から見て、慧音は苦笑を浮かべた。

いつもの五人、クラスのムードメーカー。

「さーいぎよー五重奏よー」  
クインテット

誰が呼んだか大妖精を除いてバカルテット。

チルノとルーミア以外はそこまで頭が悪いわけではないし、最近はその二人だつてわりと頑張つてはいるのだが印象が変わるわけでもないし、態度とかは間違いなくバカと呼ばれるだけある。

その二人を制したり時には一緒にイタズラをしたりする故に、バカルテット。

だがこと弾幕戦場ごっこにおいては五人揃えば大妖怪も面倒がるレベルにもなるだろう。

そしてそんな五人の保護者の様な扱いになっている一人の人間こと、リヨウは鴉天狗こと姫海棠はたての分身と戦闘を続けている。

先ほどと違い、今度は偽はたてが連続で放つ風の刃を凌ぎ続ける防戦一方状態で、全てを捌けずに切り傷を作っていく。

「くそっ……裏目に、ぐっ、出たなっ」

「リヨウ大丈夫なの!？」

「大丈夫じゃねえよ! 大丈夫なのが不思議なぐらいだっ!」

はたての心配する言葉に応えて、風の刃を凌いでいるとリヨウは一瞬の隙を見つけて走る。

偽はたてがさらに風の刃を放つが、横にとんで回避するとさらに地を蹴り加速、その加速度は今までの比ではない。

「せえやあー!」

その加速度のまま、リヨウは偽はたてに接近。

拳が放たれるもそれを回避しつつ、通り過ぎる要領で横に避けつつ、腕を横に伸ばしその首に引つ搔ける。

今日何度目かのこの技。

「リアリアットオー!」

偽はたてがそのまま地に倒れるも、リヨウは素早く倒れている敵に追撃をかけるべく足を振るう。



しかし、偽はたては翼を翻し素早く回避する。

リヨウの目が光、逃さんとばかりに左腕を伸ばしてその翼を掴み引き寄せた。

「死ねエツ！」

見ていたはたてがゾツとするような、魂のこもった言葉と迫力。

偽はたてはそのままリヨウへと引き寄せられながら風の刃を放つも、リヨウは構わず翼を引いた左腕の勢いそのまま右腕を再び伸ばし偽はたての首にかける。

——驃符『レインメーカー』

首を借りとるように腕を振るって、そのまま偽はたてを地面に叩きつける。

偽はたての後頭部から血が吹き出すと同時に、リヨウの胸元から血を吹き出す。

「リヨウ!？」

叫ぶはたてが、先程の風の刃による攻撃のダメージであると理解したときには遅い。

さらに倒れた偽はたての首に紅い輝く気弾。

はたてが驚愕に顔を歪めるが、刹那——爆散。

砂煙が巻き上がり、リヨウはその中に消える。

先程の技は元々そういう近距離で弾幕を叩き込み拡散させる危険なものでもあるのだが、本来は撃つた後に素早く距離を取るものだ。

それができる余裕が彼にはない。

砂煙が晴れるが地には血溜まりのみ。

すぐに血の雨が振る。

「あつ、ああつ……」

「なに情けねえ声、出してやがるっ……」

「ツ!!」

「俺は、鉄華団だんちよ」

「余裕あるわね!?!」

そこにはふらつきながら立っているリヨウ。

血塗れで今にも死にそうな、そんなリヨウの横に彼に手を添えて焦ったような表情をしている大妖精。

息をついて、安堵した表情を浮かべる彼女を見て状況を理解し頷いた。

「ま、間に合った……」

「サンキュー、大ちゃん」

「無茶しすぎですよ」

「殺さなきゃならないとなりやこつちも殺されそうになるだろ」

そう言いながら座らないのは、座れば起き上がれないと理解しているからだろう。

だが、はたてはもう休ませようと近づいていくが、迫る影。

狼の妖怪の分身。

「なっ！」

「ッ！」

はたても慧音も大妖精も反応が遅れる。

だが、地から伸びた氷の槍が狼を貫いて消し去った。

そこに立つのはボロボロの蒼き少女。

「チルノさん……」

「やだチルノちゃんほんと素敵」

「大ちゃんえ……」

顔をしかめるリョウト、苦笑する慧音。

はたてはホツとしたように地面にしゃがみこむ。

だが戦闘はまだ続いているようで、チルノが両手に氷の剣を生成して放つ。

「俺、そろそろ寝ても」

「いやお疲れ様よ、良いわよ寝ててえ」

「そういうわけにも、また念写を」

「はいはいすぐに……て、あれ？」

はたてが止まると、リョウトは首を傾げて次に慧音を見るが慧音も止まっていた。

まさか、と思い振り返って理解すると苦笑を浮かべつつ大ちゃんの頭を撫でて、チルノにてを伸ばして引き寄せる。

驚くチルノをそのままに、さらに慧音の腕を掴んで引き寄せた。

「なる、ほど」

つぶやく慧音に首肯くりヨウ。

視界に映る“人里”は慧音が隠したはずだが、今“暴かれている”のは慧音の力を相殺させた者がいる。

思い浮かぶのはただ一人、“上白沢慧音”に間違いない。

なぜなら彼女として半分妖怪、なのだから……。

「大ちゃんー！」

すぐにハツとした表情を浮かべて、大妖精が指を額に当ててりヨウ、チルノ、慧音を連れて瞬間移動で消えた。

はたてはポカんと口を開けていたのだがすぐに頭を振って立ちあがり、振り返った。

ルーミア、ミスティア、リグル、魔理沙の四人はまだ戦っている。

はたても羽団扇を出して風を発生させた。

「頼んだわよ……」ここで失敗しちゃ、全部おしまいなんだからっ！」

背後に在る“人里”を守るように鴉天狗は吠える。

## 第17話『散る華』

——ここは忘れられた者たちの楽園、幻想郷。

誰もが愛した楽園の全てが戦場だった。

誰もが死を感じながら、誰もが戦う。

それは物理的だったり精神的だったり、自身と戦い恐怖と戦い、そして、守られると信じていた者たちに牙が迫る。

——人里。

上白沢慧音の力が解除された人里。

念には念を、と集会所に人々は避難していたのだが人々はどこか安心しきっていた。

慧音と魔理沙、それにリヨウとチルノの四人がいてさらに援軍が来るとなれば並み以下の妖怪など敵にならないと……。

自分達だけが絶対安全だと、そんな幻想<sup>希望</sup>を信じきっているのだが、現実はそうはいかない。

ここからは蹂躪され動く肉から動かぬ肉にされ、誰かもわからないぐらいバラバラに

裂かれ、潰される。

集会所の壁が破壊され、現れるのは妖怪、いや正確には半妖。

その分身、と言っても良い存在。

人から最も好かれていて、恐れられている存在と思われていなかったもの、しかし妖怪という時点で具現する可能性は十分あったのだ。

人々が慕っていた者と同じ姿のモノに襲われ、逃げ惑う。

我先にと集会所から出ていくが、そこに残される者が何人かいた。

「ああっ」

「小鈴、あなただけでもっ……っほっ」

「っ」

稗田阿求と本居小鈴の二人がそこにいる。

逃げようと、出口側から振り返り迫る偽慧音にどうする術も持たない。

二つの角を持つ妖怪が迫り、二人は目の前に迫る死を意識せざるを得ず、小鈴は怯えるように周囲を見るがなに一つ助けになりそうなものも助けてくれそうな者もいなかった。

——だが、突如それは現れる。

「チルノさん！」

ここ一年ですっかり聞きなれた声が聞きなれた名を呼ぶ。

目の前に現れる四つの背中、その中の蒼き氷の羽を持つ少女が跳ぶ。

「スーパーアイスキック！」

跳んだ勢いのまま「チルノ」が蹴りを放ち、偽慧音を集会所から吹き飛ばす。

チルノが一瞬、振り返って阿求と小鈴の二人と視線を交わせ、微笑すると共に外に飛び出すと同じく「大妖精」も外に飛び出た。

小鈴がすぐに視線を移動させてリヨウの方に視線を動かす。

「り、リヨウさん！ 怪我がっ!？」

「情けねえ声ネタはやったからいいな、問題ねえ」

「も、問題ないわけっ」

「ないって、まだ死ねないし、な」

血を流すリヨウが笑みを浮かべた。

「リヨウさん、どうもありが」

「あー阿求さん、お礼は後で、チルノさんに……」

「……妖精を、匹で数えるのは、やめます」

その言葉を聞いて笑うとゆっくり歩き出すリヨウ。

そんなリヨウを止めようとする小鈴だったが、そんな小鈴を止めるのは意外にも慧音であり、彼女は『わかつているから』とでも言いたそうに頷いてからリヨウを追つていく。

まだ死ぬないと言っているにも関わらず、歩き続けるリヨウは至ってシンプルに、わかりやすく矛盾していると思つた。

そういうものなのだろうか、きつとそういうものなのだろう。

「あの人はきつと壊れてるんです」

「え？」

「私たちが、壊したんです」

集会所から出てくるリヨウはチルノと大妖精が慧音の分身体と戦っているのを確認した。

強力な妖怪であるはずが本人を狙っていなかった理由は慧音半妖というイレギュラー性によるものなのかと思ひ

つつ、素早く両手を前に出す。

わざわざ弾幕を出す必要はない。

「ならば、デヤアア！」



突き出した両手から放たれる紅い気弾。

次々連射されるそれらに偽慧音が気づくが遅かったようでそのまま砂煙の中に消える。

本来なら砂埃を巻き上がらせたりするのはよろしくない戦い方ではあるのだが、今回ばかりは構わない。

「目的は……」

瞬間、砂煙の中からリヨウ相手に突っ込んでくる偽慧音。

「俺を狙わせることだっ！」

接近か遠距離か、どちらかの攻撃をしかけられても対処する準備はしていた。

ただ接近戦ならば反撃の準備がある。

リヨウが迫る偽慧音を前に、振りかぶることもなく足を前に思い切り突き出す。

——闘符「黒のカリスマ」

「ガツデム！」

「!!?」

リヨウの、所謂『ヤクザキック』を受けて吹き飛び、地を転がりながらも偽慧音は即座に起きあがる。

だが、それを狙って素早く接近した大妖精が真上からクナイを持って落ちていく。

確実な直撃コース、だがその瞬間、偽慧音が地面になにかを“書く”。

「大ちゃん!」

「っ!」

確かに偽慧音の頭部に直撃する予定だったクナイは、偽慧音の目の前に刺さっていた。

なぜ外したのか、大妖精も理解が追いつかないが離れて見ていたリヨウは気づいてすぐに動く。

しかし間に合うことはなく、大妖精が偽慧音の蹴りにより斜め上に吹き飛ばされ、さらに追撃の弾幕を受け爆煙の中に消える。

「大ちゃん!」

叫びつつも、爆煙の下に行くときた大妖精をキャッチするリヨウ、だが偽慧音が思い切り口を開きリヨウの方を睨んだ。

「まずいつ!」

「リヨウ!」

「チルノさん壁を!」

その言葉を発する頃にはチルノは両手を前に突き出して、それとほぼ同時に偽慧音の口前数センチの場所から放たれる“レーザー”。

迫るレーザーに、リョウが大妖精を庇いつつ背を向けて耐えるような姿勢になる。  
「クソガアアツ!!」

叫ぶリョウの背後に数枚の氷の壁が展開されるが、当たるまでの時間を引き伸ばせて数秒もないだろう。

大妖精が瞬間移動を使える状況でもないのはわかる。

だからこそ覚悟もしたのだが、攻撃は来ない。

「っ………慧音先生!?!」

「う、ぐっ………に、人間を、守ることが、生徒を守ることがっ!」

慧音が両腕の前に出してレーザーに耐えていた。

彼女にも思うところがあるのだろうか。とリョウは推測するが、それは恐らく正解に近い邪推。

彼女を恐れる者がいて、さらに「半妖状態」の自分が人々を襲い、大妖精たちを傷つける。

それを見るところというのは彼女にとって耐え難い屈辱。

「うあああっつ!!」

叫び——耐える。

チルノがさらに氷壁を出現させるがすぐに突破されていく。

だがそれでも耐えきった。

レーザーの照射が止むと、慧音はそのまま前のめりに倒れる。

目を見開くりヨウ、そして腕の中の大妖精も目を覚まし状況を理解して悔しそうな表情を浮かべ立ち上がった。

「あああつー！」

「潰すツ!!」

「行くわよリヨウ！ 大ちゃん！」

普段からは想像もつかない咆哮をする大妖精。

怒りを露にするリヨウ。

そして強い踏み込みと共に加速するチルノ。

三人が同時に動き出す。

チルノが二本の剣を作り出し接近、剣戟にて偽慧音と相対して、大妖精はクナイで接近する。

だがそれでも慧音レベルの妖怪には、疲労もありそれに先程のダメージが残る大妖精、そんな二人では互角レベルで戦うことすらもキツイ。

「オオオオツツ!!」

リヨウが先程のレーザー攻撃を撃つための体勢に入る。

両腕を脇に持つてきてチャージを開始した。

そんな血生臭い戦場だが、住人たちは遠くまでは逃げれない。

人里の周囲を襲っているであろうタタリの生み出す分身体。

ならば内側も外側も危険度はそれほど変わるものではない

「きやあつー！」

「大ちゃんっ……あたいはっ！」

吹き飛ばされる大妖精が、地を転がる。

一対一だがチルノは疲労とダメージの中、それでも偽慧音と互角の戦いを繰り広げているのは、彼女の気合い故かなにか、その力はどこからきているのか、その力をリヨウと大妖精は知っていた。

「ぐっ、あたいは……あたいが守るんだッ！」

迫る爪撃を、頭を少し下げて回避すると素早く剣を振るい、その一撃が偽慧音に傷をつくる。

さらに次の攻撃を剣で凌ぎもう一方で斬りつけ、次々と連撃で斬り込んでいくが、決め手に欠けておりこのまま偽慧音を仕留めるよりチルノの疲労のピークの方がはよい。

「大ちゃん！ チルノさん！ ♪アレ♪で殺るッ！」

「っ……はいー！」

「ッー」

素早くリヨウに接近した大妖精が、攻撃をチャージするリヨウの背後に周りその背に手を添えて、自身の額に指を添えた。

チルノが偽慧音の攻撃に隙を見つけた瞬間、素早く下がる。

「リヨオッー」

「ウオオオッー」

先程、大妖精の攻撃は「慧音」の能力によって当たらないように「創られた」のはわかかった。

だからこそ、それより速く隙を見て攻撃を撃てばいい。

幻想郷最速を自称する風神とまで呼ばれる烏天狗、射命丸文ですら『煮え湯を吞まされた』と言われる技。

リヨウと大妖精の二人が揃っているからこそ発動できるその必殺にして必中の一撃。そして二人が、「消えた」。

——零闘符「至高の超気功波」

瞬間、慧音分身体の背後に「瞬間移動」するリヨウと大妖精。

気づこうとも遅い。

間に合うわけもない。

「波アアアツツ!!」

叫びと共に放たれる「赤い一撃」に飲み込まれる偽慧音。

民家を考慮して少し上向きに放たれた一撃。

放たれるそのレーザーは真つ直ぐに伸びて、いつの間にか赤色に染まった朝焼けの空に消えていく。

レーザーが消えるがそこには――。

「なっ!?!」

「リヨウー」

ぼろぼろの慧音の分身体は立っていた。

角は折れて体の半分近くが「削れて」いるにも関わらず、そこに立ってリヨウを殴り飛ばし共にいた大妖精も一緒に地を転がる。

チルノが加速し止めを刺そうとするが敵の方が早い。

「弾幕っ!?!」

誰が言ったか、偽慧音は弾幕を形成し周囲に放つ。

もう余裕がないのは確かなようで、放った弾幕は横360度のみで、倒れているリヨウと大妖精には当たらないだろう。

しかし人間たちはそうもいかない。

即座に回避の判断はできないだろう。

「うおおおおおおつ!!!」

雄叫びを上げるチルノが、両手を地に叩きつける。

頭を下げるようにしたチルノの頭上を過ぎ行く弾幕、そこで走り込めば速攻で偽慧音に止めは刺せるが、それをすれば人間たちの被害は怪我だけでは済まないし、子供だつているのだ。

だからここで、なにもしないわけにはいかないとチルノは咆哮しながらも、力行使する。

(やるんだっ！ あたいがやらなきゃ！)

冷気が溢れ出て、チルノの瞳が蒼く輝いた。

「リヨウも大ちゃんも、文だつて……みんなを！」

人々に弾幕が当たる……その直前、現れる氷壁。

「みんな守りたいっ、無理だつて言われても！」

混ざりつけ無しの高密度の純度100%の氷壁。

それなりの厚さを誇りながらもガラスのように向こう側がそのまま見える透明度。

そんな氷壁を出した妖精を、人々は見守る。

「あたいはバカだから、だから……全部、やってやる！ やつてみなきゃ、わかんないよ



!!

叫び、地を蹴った。

先程よりも速い……とはいかないが、速い。

地を蹴り、次の一步目で地に氷を張り加速し、慧音分身体に高速で接近していく。

!!?

「こいつが、あたいのツ!!」

その勢いのまま懐に潜り込み、加速が止まると同時に、拳を握り混む。

偽慧音はその加速度についていけずに今、チルノの方に爪を向けるが、遅い。

「最後の、スペルだツ!!」

拳を打ち込む!

!!?

瞬間、分身体の背中から氷が突き出す。

——凍符「フルフリーズパニツシャー」

その背中に突き出した氷が、華に変わる。

見たこともないような美しい氷細工の華を中心に、分身体の体が凍りついていき——

——碎ける。

散る氷塊の華。

そしてたつていているチルノが拳を振り上げる。

「あたいの勝ちだこの野郎ッ！」

巻き起こる歓声。

まだタタリは終わつたとも聞いていないのにまるで生き残つたと言うかのように喜ぶ人々を、一応気を失うまではいつていなかったリヨウが起き上がり、聞く。

チルノはリヨウに気づいて笑みを浮かべ、リヨウはジャケツトを脱いで気を失っている大妖精の枕代わりになると、ゆつくりと立ち上がってチルノに近づく。

「あつ……」

「チルノさんっ!？」

目を瞑って倒れそうになるチルノだったが、すぐに支えられた。

黒い翼と共に現れるのは幻想郷最速の風神。

リヨウは息をついてから安堵したように顔を合わせて笑った。

「サンキュー」

「いいえ……お疲れ様です。チルノさん」

そう言うのと射命丸文はチルノをギュッと抱き締めた。

さらに落ちてくる黒い翼に、リヨウはこの闘いの終焉を理解し心を落ち着かせてあとは文をどうやってチルノから引き離すか考えるが、まずは礼だ。

「ありがとなはたて……それとチルノさん、記事一面で頼むわ」

「……あんた一面にしても良いわよ？」

「断る。チルノさんの勇姿をだな」

はたてとしては「ただの人間」が着いていったのも凄いとは思うのだがこれ以上なを言っても無駄だろうと黙って笑う。

周囲から聞こえる『チルノちゃんすげー』やら『チルノちゃんありがとう』やら『チルノちゃんマジ天使』等々聞いていればわざわざ自分が宣伝するまでもないと思うが、他ならぬ友人の頼みだ。

「あ、それとアイツ引きはなっ……！」

ふらつくリヨウが後ろによろめき、そのまま下がる。

はたても反応できずに、手を伸ばすがその瞬間——リヨウは後頭部にフヨン、と柔らかな感触を感じた。

理解が追い付かないが支えられているのはわかり、上を見るとそこには桜色の髪。

「幽々子さん？」

「せえ〜か〜い」

おっとり間延びした声の主は『西行寺幽々子』である。

その豊満な胸に後頭部を支えられていることになりそうになる口角を精神力で押

さえていると、別の手がそつと自分を支えてくれたようでなんとか起き上がれたが、その手の主は支えたまままでいてくれるようだった。

「ありがとう妖夢」

「いえ、お疲れ様です。守りきったよう、ですね」

「ああ……」

支えてくれた『魂魄妖夢』は幽々子の従者であり、半人半霊の少女で、やはり彼女も激しい戦いに巻き込まれていたのかパツと見ただけで幾つも怪我が視界に入る。

視線を慧音に向けると、医師である八意永琳が看てくれていた。

「終わった、か……」

「リヨウ、お疲れ様ね」

「八雲、紫い……」

フツと頬を綻ばせるその女性を見るが、彼女もまた見たこともないほどにボロボロになっており、服もまた赤く染まっているとところが何カ所も見える。

彼女もまた同等の敵と戦っているのだから当然と言えば当然なのだろう。

「ありがとう、素直に感謝してるわ」

「……ああ、まあなんでも、チルノさんに」

「それはもちろん、でも貴方に言う必要があるのよ」

その言葉を聞いて、軽く頷くと紫がクスクスと笑い『素直ね』と呟くので、リヨウは適当に反論をしてチルノの方を見ると、チルノを抱いた文が近づいてくる。

「それじゃあ私は阿求の方に」

「ああ、お疲れさん」

「また後でね」

そう言つて阿求の方へと向かう紫を見て、幽々子もそれについていく。

リヨウは射命丸の肩を掴んで妖夢から離れるとそつと幽々子の方を指差す。

その意図に気づくと妖夢は軽くお辞儀をしてから幽々子の方へと歩いていく。

「もうちよつと体重かけても平気だけど」

「わりい、すぐに腰を落ち着ける」

そう言いながら、文の肩に腕をかける

「で、どーですか?」

「チルノさん、頑張つてくれたよ。おかげで、助かった」

「強く、なりましたね」

微笑する文が腕の中のチルノを見てホッと息をつくつと、リヨウの方はそんな文を見てハッ、と笑い先程から黙っているはたてを見た。

うとうとして見えるように見えるのでリヨウは放つておくことにし、さらに離れた場所

を見ると人々がチルノを指差して話をしているように見える。

「これで、妖精だからつて馬鹿にするような奴が滅れば、それで良いですね」

「ま、どうでもいいよ……チルノさんが幸せなら」

「……このロリコン」

「お前に言われたきやねえよこのロリコンドマゾ鴉」

「じゃあチルコン」

「お互い様だろが」

否定できずに、二人は顔を合わせて笑う。

遠くからポロポロの霊夢と魔理沙が歩いてきており、その横には鬼やら、吸血鬼やらもいるようでリヨウは少し回復したのか自分で立つて軽く首を回す。

「ゴキゴキと音が鳴り、ふうと息をつくと軽くはたての肩を叩く。

「えっ、あつ寝てないわよ?」

「いいから行くぞ」

「えっ行くつてどこに?」

「決まってるでしょうそんなの」

リヨウが大妖精を抱え、文と共に歩いて行く。

戸惑いながら歩き出すはたてに、文とリヨウの二人が同時に口を開き、宣言する。

異変の終了の合図を……。

——宴会だ！

文の腕の中で眠るチルノが、僅かに笑みを浮かべた。

## 第18話『宴会』

——忘れられた者たちの楽園、幻想郷。

外の世界とこと幻想郷とを隔離するのは二重の結界。

その一つが博麗大結界であり、それを維持するのに必要なのが博麗神社だ。

その博麗神社。

一つの災害異変が終わり、そして始まる祭り、所謂『宴会』なのだが今回は規模が違う。

境内一杯にシートが引かれ、様々な者たちがそこにはいた。

人間、妖怪、妖精、半人、その他エトセトラ。

ある意味この幻想郷の混沌つぷりの象徴とも言えるし、この幻想郷の平和を体現しているとも言える。

今回の現象、便宜上異変と呼称されるそのタタリはこれまでの異変とは違い生々しい怪我などが多かったりもするのだが、アルコール消毒と言わんばかりに、浴びるように酒を飲む面々。

とは言えやはり飲み方も違い、静かに嗜む者もいれば騒ぎながら飲む者、飲み比べをする者等もろもろ。



「ほれ霊夢！ もつと飲め！」

「うるっさいわね萃香！ 飲んでるわよ！」

怪我人が多いはずだがそこは人外たち、既に回復傾向にあるようでラフプレーを受けたサツカー選手よろしく「痛いよ〜」となつてゐる者は既に見えない。

人間の面々も「医者」によつてそれなりの治療を受けて既に重症者はいなかった。

そんな混沌渦巻く宴会中。

今回の異変解決の立役者……ではないが確かに被害を減らし活躍したとして、意識を取り戻したチルノはその喧騒の中心にいた。

いつもなら側にいるリヨウと大妖精、そして文は離れた場所にいる。

「……うう〜チルノさんが遠い所にいく私のチルノさんがあ〜」

「うるせえよ、お前のじゃねえし」

「リヨウは良いんですか!?!」

「良くないわけねえだろうに」

そう良いながらグラスを傾け琥珀色のウイスキーを喉に通す。

右足をまっすぐ伸ばし左足は立てており、そんな伸ばされた右足の太ももを枕にして大妖精は眠っていた。

一度は起きたものの、疲労がたまっていたのか一眠りしてしまい、今はこの膝枕とい

うわけだがリヨウとしては少しは思うところもある。

「大妖精さんのダイナマイトボディはどーていには刺激強いと思うんですよ」

「誰が童貞だ、犯すぞ」

「私の初めてはチルノさんって決めてるんです！」

瞬間、文の頭に直撃する拳。

「いったあ」

「大声で変なこと言ってるんじゃないよロリコン」

「も、妹紅さあん」

そこに立っていた藤原妹紅を涙目で見あげる不平不満ありそうな射命丸文なのだが、妹紅は気にせず座るとチルノたちがいる方を見た。

妹紅としては彼女が密かに人気者ということを知っているので微笑ましく見守りつつ手に持った一升瓶から酒を注ぐ。

「たく、射命丸はチルノの側に置いとくには不健全すぎんよ」

「妹紅さんに同意です」

「先に犯すとか言ったのこいつですよ！」

「テメエが童貞だとか言い出したんだろが！」

どんちゃん騒ぎと言って良い喧騒の中で言い合う二人の声は通常ならば通らないの

だろが、彼らを意識する者は多い。今回はことさらに多く、その者たちにはリヨウは『童貞』小僧ということが印象付けられただろう。

実際にどうかなど、本人のみが知ることだが、そんな言い争いにおもしろおかしく誘われて、新たな顔もやってきた。

「相変わらず楽しそうね」

「幽香さん……」

クスクスと笑いながらやってくる大妖怪『風見幽香』のそんな言葉に、リヨウは苦い顔をしながら妹紅にフォローを頼もうと視線を向けるが、なにを言うでもなく酒を飲み進めている。

リヨウもなんと返すか考えながら酒を一口、そこで文が幽香に言い返す。

「この『言い争い』 見てもそう言いますか？」

「ん、『良い争い』じゃない」

そう言いながらリヨウの横に座る幽香。

その意図を理解して、訝しげな表情を同時に浮かべるリヨウと文を見るとより一層おかしそうに笑う幽香。

そんな様子がツボに入ったのか妹紅まで笑いだし、リヨウと文が同時に溜め息を吐く。

「また揃った。良いじゃない、仲良くて」

「いや実際、仲良くないですし……幽香さん、からかわないでくださいよ」

「そのつもりは無いけど」

そう言つてリヨウの横に座る幽香はどこか疲れているようだったが、大妖怪たちがこぞつて疲れた様子を見せるのはやはり「自分自身」という強大な敵を相手にしたせいだろう。

幽香がそつと、リヨウの膝の上の大妖怪の頭を撫でる。

「お疲れさま」

そんな慈愛に満ちた表情と優しい声で言う彼女は、巷で恐れられている危険度が高い妖怪とは思えず、ドのつくサデイストという話すら疑わしくなってくるものだった。

リヨウは近くにあるそんな幽香の顔を見て、ふとチルノの方に視線を動かす。

「チルノさんとは話しました?」

「まだよ、だつて中心なんだもの話す隙もないわ」

そう言う幽香はどこか拗ねているようにも見えて、リヨウは少しばかり笑みを零し頷く。

今日はチルノが主役のようなもので、鬼たちや妖怪たちもこぞつてチルノを可愛がつており、チルノもまた恥ずかしそうにしながらも満更でもなさそうで、そんな微笑まし

い姿にリヨウは頬を綻ばしている。

「まあ夜は長いし、チルノさんも大ちゃんも幽香さんのこと大好きだから」

「あら、貴方はどうなの？」

「好き……って言つて欲しいんですか？」

「そんなわけないじゃない」

なら最初から聞くなと思いつつ文を見るとケラケラ笑っており、妹紅はそのやりとり  
に驚いたのか少しばかり酒をこぼしていた。

幽香はと言うと元々目的もない質問だったせいも既に興味をなくしており、リヨウは  
そつと息をついて酒を飲む。

「やっぱつまみ無いとすすまないな」

そう呟くと、目の前に差し出されるのは皿。

「鮭とば……海、無いのに」

「海がなくても意外となんでもあるものよ、幻想郷には」

そう言つて目の前の女性が頬笑む。

赤と青の二色で構成された服装で銀色の髪を揺らす件の医者。重傷であつたりヨウ  
の怪我を治した八意永琳がそこに立っていた。

彼女はそつと座ると、鮭とばの乗っていた皿を置く。

「お疲れ様ね、重傷者も少ないようだなによりだわ」

「永琳さんもお疲れ様です。蓬莱人のドツペルゲンガーってどうでした？」

その言葉に肩をすくめる永琳を見て、リヨウは小首をかしげた。

「中々大変だったわ、結局“蓬莱人もどき”に過ぎなかったけど」

「“不老不死”ではなかったと？」

「欠片も残さず吹き飛ばすっていう、処理だけなら貴方でもできたことよ……アレが当たればね」

そんな言葉に妹紅を見るが、苦笑しているところを見ると事実なのだろうと思いつつ、思ったより力付くでなんとかなるものだなと感心しながら幽香を見る。

彼女はどうかだったのだろうかとも思うが、きつと楽しくやっていたのだろうと自分で結論を出してふと思う。

「俺は無理でしょうけど……チルノさんと相性は良かったかも」

あくまでチルノが“処理のみをするなら”の話ではある。

まともに戦闘となれば戦力から考えて現状のチルノが勝利する可能性はないに等しいだろう。

そう考えると今回の異変では戦力の割り振り等は最も効率的ではあったものの……。

「次があるならもうちょっと上手くやれるか」

「二度とごめんだけど」

「違ういわね」

リヨウの言葉に顔をしかめる文と苦笑する妹紅。

幽香はそうでもないのか、次があるなら私も色々試してみたい、だとか言う。

永琳はそんな会話を笑って聞いているが、顔をしかめたまま文は次に肩をすくめる。

「やっぱ二人みたいな戦闘狂にはついてけません」

「誰が戦闘狂だ。幽香さんと一緒にすんな」

「あら、どういう意味かしら？」

「あーえつとその、ほらあれ」

笑顔を浮かべる幽香の手がそつと肩に乗るので、リヨウは必死こいて言い訳を考えるのだがどうにも思い浮かばない。

そもそも幽香が戦闘狂は周知の事実ではあるのだし、幽香もそれで通っているという自覚はあるのだからこれは単にからかっているだけである。

そつと手を下ろす幽香にホツとするリヨウだが、妹紅は首をかしげた。

「というより店長も戦闘狂で間違いないと思うけど」

「俺はしがない喫茶店のマスターだよ」

「あれだけ戦闘技術磨いておいて？」

「永琳さんまで言いますか」

妖怪たちに比べると強い弱いは置いておいて、それでもなおリヨウは戦闘好きだと思  
う幻想郷の住人はなにかと多い。

大体にして幻想入りから一月でそれなりに戦う技能を叩き込んでスペルカードル  
ルで戦いだすような輩だ。

「そのつもりは無いんだけどなあ」

「ま、自分で思っけていても、よ」

そう良いながら幽香がそつとお猪口に口付けて飲む。

「たまに鬼とかからもやらないかって言われてるしね」

「店長すごいわね」

文が余計なことを言うと、鮭とばを囓っていたリヨウは顔をしかめて文を指差す。

「やらねえよ、こいつはネタになるからやれとか言うけどさすがに死ぬ」

「じゃあ大怪我したとき用に私が見ていてあげましょうか?」

「永琳さん!?!」

「おーお膳立ては整いましたね! 萃香さん勇儀さん!」

「ばかッ! 呼ぶなッ……鬼ッ!!」

そんな鬼気迫る表情のリヨウを見て、ケラケラ笑う文に拳を振るいたい気持ちになる



も膝上の大妖怪を落とすわけにもいかず我慢せざるを得ない。

遠くの鬼が文の声に気づいたのか目が合うので、リヨウはなんでもないと言わんばかりに首を振ると、小首を傾げて元の話し相手と会話を再開。

「ふう、ビビらせやがって」

「ちっ」

「舌打ちすんな！ お前が鬼か！」

そんなやりとりをしていると、リヨウの膝の上の大妖精がもぞもぞと動くので、五月蠅くしすぎたかとリヨウはバツの悪い表情を浮かべる。

すると、幽香がそつと移動して大妖精の頭を持ち上げつつリヨウをどかして自身が代わりに座った。

「ん、良いんですか？」

「チルノの方、行つてあげなさい」

「……それじゃお言葉に甘えて？」

そう言つて立ちあがり、リヨウが背を伸ばしつつ手に持った酒を飲み干す。

チルノの方へと向かおうとするが、服の裾が引かれてそちらを見れば幽香。

「ん？」

「今度は貴方も来なさい。チルノたちと一緒に」

そんな誘いの言葉に、リヨウは軽く笑みを浮かべた。

「はい」

「……私も殺りあつてみたいわ」

「やだよ！」

思わず強めに答える。

「あら冷たいのね」

「鬼ぐらい怖い！」

「あたしらがなんだつてえ？」

「関係ねえ座つてろ！」

立ち上がりそんな鬼たちを座らせて、リヨウは新しい酒を注いでから溜め息をつく。

「……そのうち」

「約束よ？」

クスリと笑みを浮かべる幽香に少しばかりくらくたとくるも、ただの酔いだろうと心の中で納得させつつその場を離れてチルノたちの方へと向かう。

当然のように文も一緒なのだが、突如目の前に現れる二人を見て立ち止まった。

「八雲紫に、藍……」

八雲紫とこの従者、式神の八雲藍。

訝しげな表情を浮かべる藍に苦笑で返して、リヨウは隣で少しばかり目を鋭くする文の肩に手を置いてなだめると、紫の方に視線を向ける。

「さつきぶりだけど、人気者ね」

「チルノさんか？」

「貴方も、よ」

そう言つて柔らかに笑む彼女に、リヨウは後頭部を搔きながら視線を逸らして文の方を見た。

仕事柄、こういう時“人気者になりにくい”傾向にある文を見てみると、自分はその話しかけられる方かもしれないが、それでも引つ張りだこの霊夢たちを見てみるとやはりそういう感じでもないように思える。

もう一度紫の方に視線を向けるが、彼女はチルノに視線を向けていた。

「……本当に、チルノは凄いわね」

「今更ですか？ 貴女は知ってるでしょう。知つてて“あんなこと”をしたつ……！」  
「文ア」

ドスの効いたリヨウの声に止まる文は、バツが悪い表情でそっぽを向いてリヨウの背を軽く押す。

珍しくそんな文を見るので、リヨウの方もさつきと切り上げようと紫の方に視線を向

けると、彼女も意図を理解したのか頷く。

「チルノに抱きついてよしよししてあげたい気分だけど、鴉や狂犬が怖いからやめときましようか」

「鴉はともかく狂犬つて俺じゃないよな？ 椀さん？」

「どう考えても貴方でしょうに」

今日はじめて聞いた藍の言葉に苦い顔をして、リヨウは文に押されて歩き出す。

すれ違う間に、紫がリヨウを見てなにかを言おうとするが、すぐにやめて別方向へと足を進める。

歩く紫が、リヨウが元々いた場所に移動して座った。

幽香と永琳と紫、大妖怪三人が揃い踏みで、妹紅が場違いな感覚を覚えるも、特に退くこともなく酒を飲む。

紫が、鬼に囲まれている数少ないお氣霊に入りを見やるも、すぐに視線を目の前の面々に向けて笑みを浮かべた。

永琳が紫と藍にお猪口を渡して、妹紅が雑に注ぐ。

「あら、そんな感じでリヨウの店で働けてるの？」

「仕事は仕事だよ……今度来ればいい」

「機会があれば、ね」

そう言つて苦笑する紫に、幽香は軽く笑いながら乾杯をする。続いて妹紅と永琳も紫、藍と乾杯。

全員がお猪口に口をつけてから、最初に口を開いたのは意外にも幽香だった。「今度一緒に行つてあげましょうか？」

そんな幽香の言葉に、紫は苦笑を浮かべる。

「……いいわよ、子供じゃないんだから」

「あらそう、藍は？」

「私は、その……嫌いでは、ないんだが」

言い淀む藍に今度は永琳が苦笑。

たった一年の間の、色々な事情に翻弄される数千年を生きる大妖怪たちが思い浮かべる「モノ」は満場一致。

——人と鴉、そして氷の結晶。

苦々しい表情を浮かべる妹紅の肩を、永琳が軽く叩く。

「弾幕ごっこでもして気分晴らせば？」

「冗談、荒事は当分うんざりだ」

永琳がチルノの方にいる蓬萊山輝夜を指差すが、一時は日課とすらなっていた仇敵との戦いでさえも億劫になる気分で、そんな妹紅を見て幽香が笑う。

先ほどまでの表情が一転、紫もおかしそうに笑い藍も安堵した表情を見せた。

一方、リヨウと文はチルノの元へとやって来たのだが……。

「あつ、リヨウに文！」

「あらお二人とも、お元氣そうだなによりです」

前にいるチルノは「聖白蓮」の膝の上に座っており、後頭部をその豊満な胸に預けていた。

無言のリヨウと文に、聖は微笑を浮かべて軽く手を振る。

さらに西行寺幽々子もその場にはいて、チルノの頬をぶにぶにと押してくすぐったそうにするチルノとじやれていた。

聖の隣にいた寅丸星が、いつまでも無言の二人に首を傾げる。

二人の（豊満ボディの）美女に可愛がられるチルノを見て、リヨウは顔を押しさえて上空を見上げた。

「俺はチルノさんになりたい」

「究極の愛ですね」

星はゴミを見るような目で二人を見た。

## 第19話『終息』

あれから改めて、リヨウと文は座つて酒を飲んでいた。

チルノは聖白蓮の膝から既に降りており、幽々子もチルノを弄るのはやめたようで、魂魄妖夢に酒を注いでもらいつつ団子を食べている。

そんな幽々子を横目で見つつ、リヨウは「湖で上がったエイ」のエイヒレを齧り、飲む。

「よく団子で酒が飲めますね」

「んー？」

幽々子が団子を頬張りながら首をかしげる。

「くっ、かわいい」

「ありがとお」

自身の言葉にニコツと笑う幽々子にリヨウは「いつい、押し倒しちやっても良いぐらいい好感度溜まったかな？」とも思ったが従者が刀を抜きかねないので思い留まる。

息をついて落ち着くと、聖と目が合う。

「ど、どうしました？」

なんだが邪な気を感じたとか言われては事実故に否定もしにくい。

そもそもリヨウはそういう方向に関して人畜無害と思われがちではあるのだが、普通に性欲もあるしおっぱいが好きだ。

ちなみに性癖は一般的だと——本人は自負。

「一人で天狗に勝つたと聞きました」

「ああ、そつち」

「そつち？」

「いやなんでも！」

危うく自分からボロを出すところだったが、どうにかなった。

聖の隣の星はなんとなく察しているのかジト目でリヨウを見ていたが、とりあえずセーフと判断して一つ咳払いをするリヨウ。

「能力も『発動してた』んで正直まっとうな死合いとは言えないっすけど」

「その能力を含めての貴方でしょう？」

「そう、ですかね」

「ええ、それに立派なことを成し遂げました」

笑顔を向けてくる聖に眩しさを感じて目を反らすのは先ほどまで邪な想像をしていたせい、だけではないだろう。



話を変えようと、リヨウは再び咳払いをするのだが、先に口を開くのは聖の方だった。「リヨウさん、今度お手合わせ……どうですか？」

「……へ？」

「マジですか鬼とかち合うつてのもおもしろそうだったけどやりましょうよりヨウ」

「おい」

楽しそうに笑う文を睨んでから聖の方に目を向けるが、決して他意はない純粋な眼を向けられている。

チルノは楽しめと言わんばかり、星は口を半開きにして驚いているし、幽々子と妖夢も興味ありげ。

そして聖に再び視線を向けて感じるのは純粋さ。まあ確かに純粋は純粋なのだが……。

(純粋な格闘家……)

「どうしました？」

「ああいや、なんで俺なんて？」

「んー、自分を過小に評価しすぎるのもよくはありませんよ？」

「そのつもりは、ないんですけど」

聖白蓮はリヨウと同じく本気の戦いは「ガチ」なタイプである。

スペルカードルール自体に適應して、その強さもかなりのものだが本気は別で、実際にはリヨウが同じタイプと言うには「烏滸がましい」ほどに強い。

鬼たちも聖も、なぜ自分なんかとやりあいたがるかわからなかった。

「ねえリヨウ！」

「え、チルノさん？」

「あたいは知ってるよ！ リヨウは凄いつて！」

満面の、そんな笑みを見せられて、リヨウとてさすがにこれ以上は遠慮し続けることもできない。

そもそもリヨウとて仕合自体が嫌いなわけでもなく、聖のような強者相手ならば気持ち昂らないでもないのだ。

聖の方を向いて頷くと、嬉しそうに笑顔を浮かべて頷いた。

「それじゃあその、今度？」

「はい、盛大にやりましょう」

「文々。新聞も一面に乗せますよ！」

「ちなみになんて書く？」

「もちろん無様に死ぬ人間と」

「死ぬかつ！」

「事実しか書かない射命丸です！」

「なおたち悪いわ！」

リヨウと文が取っ組み合いを始めそうな勢いで睨み合うので、妖夢が止めようか悩んでいるとそこに新たに一人加わってくる者がいる。

緑色のチャイナ服を身に纏った「格闘のプロ」がそこに座った。

「あ、美鈴さん」

「お疲れ様ですリヨウ」

紅魔館の「本気を出さない門番」が笑みを浮かべる。

「お師匠登場かあ」

「いやあ射命丸さん、私そんな立派なもんじゃありませんって」

ケラケラ笑う門番の「右腕は無くなっていた」のだが、「どうせ生えるので」周囲はそれほど心配する様子はないようである。

ちなみに先ほどもまで咲夜は『あーん』で食べ物をもらっていたのだが、魔理沙にしこたまからかわれて咲夜はその行為を放棄し今では上空で弾幕ごっこ。

「美鈴さんも見に来てくださいよ」

「ん、聖さんとリヨウの一騎討ち？」

「聞いてたんですか」

「一応ね」

そう言つて左手に持ったお猪口から紹興酒を飲む美鈴。

「まあ良い機会ですよ。聖さんは私とまた違ったスタイルですからね」

「おー美鈴が言うんだからちよー強いよ！」

「ありがとうございませすチルノちゃん」

笑う聖にチルノも笑顔を浮かべた。

幽々子が少し考える様子を見せて妖夢を見るが、妖夢は『あなたもやる?』という意図を理解し、勢い良く首を左右に振つて拒否をアピールする。

リヨウの戦闘スタイルを知っていると相当な実力差がない限り好き好んでやりたいなど思うわけもないし、どうせ主のことだから弾幕なしとかい出しかねない。

「絶対に嫌ですよ、リヨウとなんて」

「あらあら、ですつてリヨウ」

「え、なんで俺は告白もしてないのにふられたの?」

「リヨウ、元気出して！」

「だからチルノさん違うつて……爆笑すんな文ア！」

笑い転がる文に怒鳴るリヨウ、それを見て笑う周囲の者たちなんていう構図もすつかり見慣れた幻想郷。

そうしていると、突如背中にドカツと衝撃を感じて振り替える。

そこには黒い帽子に青い髪。

面倒そうに視線を反らして美鈴の方を見るが、美鈴はすでに聖たちと話をしている。

「なんだよ天子い」

「なんだとはご挨拶ね！」

比那名居天子はドヤ顔でそこに立つており、その後ろには貧乏神こと依神紫苑が浮遊している。

本来ならば近づく相手と自分を不運にする能力があるもののどうやら天子には効かないらしく最近はずっと一緒にいるそうで、ちなみに姉の依神女苑は命蓮寺にいるそうだ。

「ワンコとの約束は守ったわよ！」

「約束……ああ、大切な奴は守れって言ったな」

「……えっ、いやまあ、そうだけど」

「天人さまあ！」

リヨウの言葉に満面の笑みを浮かべる紫苑と、顔を真っ赤にして眼を反らす天子。

そして座ったままそんな天子を見上げるリヨウの肩に文が顎を乗せ、二人の顔は隣同士だが、そんな至近距離でも意識しないのが二人である。

まったくいつも通りという風に、文が口を開く。

「ねえリヨウ」

「なんだ」

「天子と紫苑でてんしおん……百合って素晴らしい」

「なに言ってるのテメエ」

「百合って良いもんだと思えました」

「そもそもお前ガチレズじゃん」

顔をくつつくまでに近づけつつ、天子と紫苑を見ている二人は真顔。

「お馬鹿、レズと百合は違うんですよ。ただ目の前のが百合ということだけはわかります」

わからん、と思うリヨウだったが言うと話が長そうなのでやめておいた。

「きつと百合はこう、あれなんですよ……友情寄りっていうか解釈次第って言うか」

「お前が気持ち悪いってことだけはわかる」

「心火を燃やして百合応援します」

「燃やしちやったら百合炎上するな」

結局、口を出そうと出すまいと文の話は続く、そしてリヨウはツツコミを我慢できるほどできた人間ではないのである。

勝手にリヨウの手からグラスを取って飲む文。

「あ、私百合を肴に酒飲めるタイプです」

「瞬間最大風速吹いてるぞ、悪い意味で」

「いやあ、まあ愛してるのはチルノさんオンリーなんですけど」

「真隣の女が百合談義とか俺の人生どこで間違ったかなあ」

遠いところをみながら呟く。

「おいリヨウ！」

「ん、にとりさん……」

赤い顔でテンション高め話しかけてくるのは河童こと河城にとり。

先ほどまで誰と飲んでいたのかへべれけであり、面倒そうな気配を感じどう逃げようかと思うも状況は最悪。

真隣のガチレス、前門の百合、後門の格闘家。

「よいしょっと」

(隣に座られてしまったぜ……)

文とは逆方向の隣に座るにとり。

つまりは逃げ場なし。

「でさーあの照明弾って意味あったのかい？」

「まああつたよ、タイミングを見計らうには……おかげで状況を動かせ」  
「飲んでる？」

「話の最中にそれ聞くか？　しかも自分からふつといて」

リヨウは顔をしかめて酔っぱらいの方を見るがケラケラ笑うのみでまともな反応は帰ってこず、そつとチルノの方を見れば相変わらず聖と幽々子と美鈴と共にいるのだが、さらにそこにパチュリーと小悪魔が投入されていた。

ますます羨ましくなる。

「おーい聞いているのかよ盟友うー」

「おっぱい当たるからやめて」

にとりが自身より高いリヨウの肩に腕を回して寄りかかっていると、酔いが回ってきたのかそのまま口に出してしまったリヨウ。

顔をしかめつつにとりの方に視線を向ける。

「ん〜お姉さんのおっぱいが気になるかあ、男の子だね〜」

「男の子ってかちやんと男つすよ。二十歳越えてりやそら」

「全然子供じゃん！」

ゲラゲラ笑うにとりに、それは妖怪にとつてはそうだろうと思いつつ、リヨウはグラスを傾けて酒を飲む。



「てか文はなにやってんの？」

「あややにとりさん、この清く正しい射命丸、百合の良さに目覚めまして！ てんしおんを肴に酒を嗜んでます！」

「いつもの文だ」

共通認識というやつである。

「ところでリヨウ、照明弾と手間賃の分、今度奢つてくれるんでしょ？」

「わかつてるよ。店来たときはサービスする」

「おー！」

そう言うにとりは感嘆の声を上げてニコニコしながらリヨウにさらに体重をかけるので、リヨウの腕にのしかかる心地良い感触。

「つつい好きになりそうなので、話を変えようと思ったが目の前の天子が座ってリヨウのことを見ていた。」

「……わかつてる、奢るよ」

「やった！ あんたの作る御飯おいしいのよね！」

「お褒めに預かり光荣ですよ天人様」

「紫苑の分もね？」

「二人まとめて構わないよ」

その言葉に嬉しそうに笑う紫苑。

そんな紫苑を見て笑みを浮かべる天子が、そつと顔をリヨウに近づけて小声で言う。

「ありがとね、紫苑もあんたのケーキとか気に入ってるから」

「そりやなにより」

ふつと笑つて軽く天子の頭を帽子の上から撫でると、満足げに笑みを浮かべてすぐ立ち上がる天子。

「今度やりあいましよ、またね！」

「期待してるねー」

去つていく二人を見送ると、リヨウはグラスを傾けにとりの方に話を戻そうとするが、反対方向から視線を感じる。

そちらに視線だけ向けると、そこには文。

唇すら触れ合いそうな距離、その距離で文はリヨウを「睨んでいた」。

「……なんだよ」

「百合の間に入るとは、死刑ですよガイア」

「誰がガイアだ」

片手で文の顔を押し退けると、隣で既に「眠っている」にとりをそつと横にしてから立ちあがり、背を伸ばしてグラスに新たにウイスキーを入れる。

それに気づいたチルノも立ち上がった。

「少し涼んでくるけど、チルノさんも来る？」

「うんっ！ あたいがいれば最高に涼めるでしょ！」

違う、と笑うと聖たちに軽く会釈して歩き出すリヨウに着いていくチルノ。

そしてそんなチルノに着いていく文。

三人を見送って、面々は笑みを浮かべつつ酒を飲む。

リヨウたちは、未だけたたましい境内から離れて霊夢の住居の方へと移動し縁側に座る。

リヨウ、チルノ、文の三人で夜空の月を見上げつつ酒を飲む。

そこで最初に口を開くのは、文だった。

「なんでわざわざ離れたんです？」

「なんとなく」

「かっこつけたと」

「なんでそうなる」

「リヨウはなにもしなくてもかっこいいよ！」

「うちのチルノさんが良い子すぎる」

眩き、酒を飲む。

チルノも弱い酒をチビチビと飲んでおり、文は強めの酒をリヨウと似たようなペースで飲み進めており、縁側に三人で雑談しつつ、落ち着いてゆつくりと過ごす。

そんななんでもないような中、チルノがグラスの中を飲み終えて横になる。

「えへへっ今回、あたい大活躍だったわね！」

「ほんとさすがチルノさんです！」

チルノの言葉に同意して笑みを浮かべる文。

「これもリヨウのおかげだね」

「俺はなんもしてないですよ。チルノさんが頑張ったから」

「リヨウも頑張ったよ。あたい、みんなに褒められたけどリヨウだって褒められたで

しょ？」

「……まあ」

気恥ずかしくなり、顔をそらす。

「みんな知ってるよ、リヨウが頑張ったって……だからみんなリヨウが大好きだよ」

「そう、ですか……？」

「うん！」

ニコツ、と笑うチルノに自身を過小評価しがちと言われたリヨウは、素直に彼女の言葉を信じてみようと頷いて笑った。

風が吹いて、彼の黒い髪が揺れる。

「文あ」

「ん、どうしましたチルノさん」

「文もがんばったね、えらいよ」

そんな言葉に、息を飲む文。

少しの沈黙の後にチルノの方を見ずに文は口を開く。

「結婚しましょう」

「なに言ってるんのデメエ」

「別にリヨウは関係ないんだから黙ってて」

「大いにあるわ」

そう言つてリヨウは普段ならば『誰と誰が結婚するの?』とか聞きそうなチルノが無言なのに気付き、文と同時にチルノを見る。

静かな意味を理解し、二人して笑う。

「チルノさん、そつちの座敷に運ぶわ……」

そう言つて縁側から足を投げ出して眠るチルノを抱き上げると座敷に移動させ寝かせると、近くにあつた『霊夢の昼寝用のタオルケット』をチルノにかけた。

文の方に戻ると、文が先程のチルノと同じように横になっていたのだが、目が合う。

「私も眠いから連れてって」

「ほう……」

手を出す文の片手を掴んで——引き摺る。

「痛い痛い痛い羽折れる！」

「折れろ、いっそ」

「ひどいっ」

手を離すと、文はそのそと這ってチルノの隣に移動するのでリヨウはグラス片手に、文とは反対のチルノの隣に座る。

文が思いの外すぐに眠るが、酔いつぶれて博麗神社に泊まる者は少なくないので別に構わないだろうと、リヨウは納得して頷くとチルノの頬を撫でた。

「……ありがとな、チルノ」

グラスを傾けて琥珀色のウイスキーを流し込み、リヨウは息をついた。

宴会が落ち着き、神社の主こと博麗霊夢は酔っぱらいそこから寝ている連中を起きている連中に適当に押し付け、持ち帰ってもらい、持って帰ってもらってない連中を適当に運ぶ。

そこでいつの間にもやら消えていたリヨウたちが気になる。

「……あつちか」

自宅の方へと歩いていき、靴が置いてある所を見て縁側へ上がり襖を開けると思わず笑みが零れる。

酔い潰れているのかと思つたが、安らかに眠る三人がそこにはいた。

チルノを真ん中にリヨウと文も、三人で一枚のタオルケットを使つて眠つており、その姿は微笑ましいと表現する他なく、柄にもなくそんなことで笑いつつ掛け布団を押し入れから出して三人にかける。

「おやすみ」

そう言つて、〃親子のようにも兄妹のようにも見える〃三人に微笑みかけそつと立ち去ろうとするも、縁側に立つ女性を見て苦笑を浮かべ襖も閉めずに去っていく。

そして残された女性こと八雲紫は、三人を見て笑みを浮かべ頷くと、そつと襖を閉じた。

—— おやすみなさい。

こうして、〃タタリ異変〃は終了を迎えた。

## 第4章【再び、いつもの幻想郷】

## 第20話『ラブコメと喫茶店』

——忘れられた者たちの楽園、幻想郷。

幻想郷中を巻き込んだあの大事件、タタリ異変から一週間が経った。

いつもなら異変の一つや二つ、そこまで引きずらない幻想郷の住人たちが未だに話題にするのだからよっぽどな事件だったことが伺える。

さらに翌日や翌々日にバラ撒かれた新聞に「氷精大活躍！」と書かれているのだからさらに興味は尽きない。

そもそも「件の妖精」は割りと異変解決の立役者をしたりしているのだが、今回は人々の目の前だったというのが中々印象的だったのだろう。

結果、氷精チルノの保護者たる人間の喫茶店リョウメイメーカは中々な恩恵を得たりもした。

元々、魑魅魍魎が跋扈する人気のカフェではあったのだが、チルノちゃんファンというものが増えたおかげでさらに客が増えることとなり、リョウと妹紅の二人はここ数日は忙しくしていた。



バイトを一人増やそうか悩んだほどだ。

しかして、大体一週間もすればそれなりに皆、理解はする。

基本的に「レインメーカーにチルノはいない」ということを、そして少し余裕があった今日のピークを切り抜けて、リヨウはコーヒーを飲む。

ホールスタッフをしていた妹紅も上がってカウンター席に座りコーヒーを飲んでい

る。  
「店長って呼ぶのもすっかり慣れたなあ」

「人間は慣れの生き物だからね」

「人間ねえ」

「ほぼ人間でしょ」

そんなリヨウの言葉に素直に笑みを浮かべる妹紅。

「そういうえば、最近チルノどう?」

「どうもなにも、お菓子とかもらつてくることが多いみたいですよ。もうみんな可愛くて仕方ないみたいで猫可愛がりだし」

「店長と文に時代が追い付いたか」

「……俺、そんな猫可愛がりしてる?」

頷く妹紅に、リヨウは顔をしかめながら笑いつつコーヒーを飲んでそつと手元にある

本に目を向けた。

そのやけに分厚い本を、そつと下の棚に入れるとリヨウは誰かが入ってくることに気づく。

カラン、と音が鳴って開かれた扉の前にいたのは、気怠げな表情を浮かべた一人の少女。

「いらつしやい小町」

「ん、いらつしやつたよ」

欠伸をしながら、赤いツインテールを揺らして妹紅の隣に座る小野塚小町は、手に持っていた大鎌をバランスに気を遣いながら立て掛ける。

「鎌ぐらい置いてくりや良いのに」

「あたいの死神としてのアイデンティティーってもんがね」

「あつたんだそんなの」

「つてことで映姫様には黙つてて」

つまりはそういうことだ。怒られるようなことをしている。

「仕事サボつてる」

「個性死んでるなあ」

「うっさいコーヒーだコーヒー」

「かしこまりました」

すねるようにそういう小町に笑みを浮かべて、リヨウは素早くコーヒーを出す準備に取り掛かった。

最初こそ軽い雑談をしていた妹紅と小町だが、少しするとなにかを見つけたようで、小町は近くにあつたそれに手を伸ばす。

「へえ、死神が新聞なんて読むんだ」

そんな妹紅の言葉にうなずきながら、手に持った新聞を開いた。

「そこにあつたからね……てかなにこれ、チルノじゃん」

「参加したでしょタタリ異変」

「んくしたけどあたいは地獄だったしなあ、宴会は参加したけど……里でこんなことになつてるとは」

感慨深そうにつぶやく小町の前に、コーヒーが差し出される。

その新聞を置いていた店の主に視線をやりつつ、コーヒーを一口飲んでうなずく小町。

前来た時と変わらぬ味、それで十分である。

「小町さん、空前のチルノさんブームですよ」

「時代がリヨウと射命丸に追いついたか」

「同じこと言うー！」

「ほらな？」

妹紅がケラケラ笑い、リヨウが頭を抱え、小町は小首をかしげた。

「にしても、チルノブームって……いたずら妖精だったのにねえ」

「店長の子育ての結果だね」

「子育てって、チルノさんはそういうんじゃないから」

その言葉には、どこか重みと深みがある。

見ていた小町が、驚いた表情をうかべた。

「……え、なにその感じは？」

「え、なにが？」

「うくん……距離がエグい、距離感が」

「いつも通りの店長でしょ、チルノに憧れてるっていうの？」

「妹紅さん」

突如、名前を呼ばれて妹紅はリヨウの方を見る。

やけに深刻そうな表情で、うなずく彼が口を開く。

「憧れは理解から最も遠い感情だよ……」

「……で、誰の受け売り？」

「漫画」

その言葉に、妹紅と小町、そしてリヨウが同時に吹き出した。

「あはははっ、なにそれかつこいいい！」

「あたいも使いてー！」

「やっぱ師匠は間違つてなかつたんだな……！」

ここ一番で妙にツポに入ったのか小町と妹紅がテーブルを叩きながら笑うので、妙にしてやった感を出すリヨウ。

ついでに、そんな三人をよそに……カウンター席にははたてがいた。

記事とにらめっこしていたのだが、ようやく顔を上げて息をつく。

「ふい〜」

「ん、終わったか？」

「うん、やっぱここが一番調子いい……って死神いるじゃない。お迎え？」

「いやまだ死ぬつもりないから！」

そんな言葉にツポに入りっぱなしの小町がさらに笑う。

「それじゃあたしのお迎え？」

「いや妹紅さんが言うときんどすけど！」

「誰が蓬莱人連れてけんだよっ！」

小町が呼吸困難になつていた。

「ひいっ！ しぬっ！ 死神に死神きちやうっ……！」

自分で言つてさらに笑っている。

「ここまで笑つてると逆にこつちが引くなあ」

「店長に同意」

「待つて私置いてきつぱなし？」

そう言つて首をかしげるはたてに笑いかけると、そつと追加のコーヒーを差し出す。

チルノを記事にしてもらつている礼もかねたサーピスなのだが、それを理解してか、たては『ありがと』とだけ言つて差し出されたコーヒーを飲む。

ようやく落ち着いたのか、小町がはたての方を向く

「ふう、ふう、というか、はたてつていつもここにいるねえ」

「なに、店長のこと好きなの？」

「モテる男は困るなあ」

そんなノリに合わせて、リヨウは笑つてそう言いはたての方を向くのだが……無言。

固まるリヨウ、ついでに妹紅もあれ？ と小首を傾げて、小町が少しばかり目を輝か

せていた。

「……っ！ 何言ってるの!? なあんで私がこいつ!?」

「すっげえツンデレのテンプレ! はじめてみた!」

「おい小町さんそれ以上余計なこと言うな!」

真つ赤になって立ち上がるはたてに、テンションが上がる小町、そして場が乱れるので一旦落ち着かせるためにリヨウが小町を止めようとするが、素が出て焦る。

はたては最初に頼んだランチ代を叩きつけるようにカウンターに置くとダツシユで店を出ていく。

沈黙のリヨウ、楽しそうな小町、困惑する妹紅。

「え、店長……そういう感じ?」

「いやはたての場合、相手が誰でもこの感じで出てくと思うぞ……数千年単位の初心だし」

「そうかなあ……」

「そうだよ」

そう言ったリヨウだが、突如扉が開き——はたてが戻ってきた。

「わわわ、忘れ物よ!」

真つ赤な顔のまま、元座っていた席に近寄り忘れ物だった“カバンと記事一式”を持つ。

そのままギコギコ音が鳴りそうなほどのぎこちなさで歩いて、扉を開いて外に行くのだが、顔だけを中にのぞかせた。

「ま、また明日……」

そう言うのと今度こそ扉が閉められて、扉につけられたベルの音だけが店内に響く。息をついて頭を抱えるリョウ。

「よかつたあ、余計な奴が見てなくて……」

「はたてといい感じなる？ まさかのはたてと!？」

「なんで小町さんテンション上がってんっすか、そんな恋愛脳だっけ?」

「いやあく良いじゃん良いじゃん!」

なぜか嬉しそうに、腕を組んでうなずいている。

「そういう感じじゃないって……てか、俺も」

「店長はもうちよつと胸大きい方が好みだよね」

「そうそう……つて妹紅さん!？」

突如とした爆弾の投擲に妹紅がボンバーマンに見えてきた。

「つて射命丸が」

「あのクソガラス……」

「へえ〜そうなんだあ、へえ〜?」



相も変わらず清く正しい射命丸に殺意を燃やすリヨウを前に、にやにやしながら小町が胸の下で組んでいた腕を軽く持ち上げる。

もれなく豊満な胸が揺れるのでもれなくリヨウの視線は釘づけであった。

「めっちゃ見るじゃん」

「そんなことされて見ない男がいるか!？」

「ロリコン」

「良かった俺ロリコンじゃねえ!」

良いのか悪いのかわからないが、おそらく色々考えた結果ロリコンではないほうが良いだろう。

「フツ、話は聞かせてもらいました」

「あ、射命丸じゃん」

射命丸文が、バックヤードから繋がる通路の入り口で腕を組んで壁にもたれ立っている。

「わざわざ裏口から入ってきたのかコイツ」

「テメエこのクソガラス焼き鳥にしてやらあ!」

「店長チンピラ出ちゃってる!」

妹紅の言葉に、咳払い。

今更そんなことしても幻想郷の大抵の人間は、リョウは口が悪くなるということぐらい知っているのだが……。

先に口を開くのは、文だった。

「……はたてとラブコメするんですか？」

「結構前から聞いてんなア!？」

あちやーと顔を覆う妹紅。やはりそう簡単に人は変わらないのである。

「ラブコメするんですね!?! すると言いなさい! そして同棲して私とチルノさんの愛の巣から出てきなさい!」

「そんなもんはねえよ!」

「はたてをその気にさせなくては!」

「その気ねえってわかかってんなら放つとけ色ボケガラス!」

二人のいつもの喧嘩が始まったので、妹紅はそつとコーヒーを飲む。

言い合いをBGMに静かに息をついてうなづく。

「え、なにその落着きよう」

「なんか店長としよつちゆういるから、落ち着くのよね。この感じ」

「ついてけない距離感だね」

そう言つて小町もコーヒーを一口。

「いいじゃないですかはたて！ 私よりもおっぱいがないけど！ リヨウの好みはもつと巨乳だけど！」

自らの胸を持ち上げつつ言う文に、リヨウは憤慨した。

「余計なこと言うんじゃないやねえよ変態！」

「ともかく早く私にチルノさんと同棲する環境を！ そのためにリヨウははたてとこのままラブコメ！」

「一生ねえよ！」

「フツ、話は聞かせてもらいました」

「大ちゃん!？」

いつの間にか扉を開いて、大妖精が立っていた。しかも文の登場時と同じポーズだ。

最近、大妖精が文に似てきた気がする。言えば自害するので誰も言わないが……。

「ラブコメするんですか？ はたてさんと?」

(めっちゃロリコンドマゾガラスと同じこと言うじゃん……)

それでも決して口にしてはいけないのだ。

「じゃあ私はチルノちゃんとラブコメします！」

「大ちゃんさん!？」

大妖精は暴走状態だった。よくあることである。

しかししてリヨウには大妖精の暴走を止める実力はないので、妹紅と小町の方を見るが二人して視線をそらしてくれやがったので、リヨウは毒を持って毒を制するために文を見た。

「大妖精さん、やはり私の最大の敵はあなたですかっ」

「前までの私とは違いますよ……」

不敵に笑う大妖精と、顔をしかめる文。

まあ弾幕勝負であればどう考えても大妖精に勝ち目はないのだが、ゴールがチルノであれば話も変わるだろう。

突如ラブコメしたいと言ってた奴らがバトルものの雰囲気を出し始めたので、少しばかり楽しそうにする小町。

「表でやれ」

珍しく大妖精と文の弾幕勝負が見れるのかと、少しばかり心が躍っているリヨウ——  
—だったのだが、それは突如中止となる。

扉が開かれ、ベルの音が店内に響く。

そちらに視線を向ければ、意外な人物。

「こんにちはリヨウさん」

「ミスティア、いらっしやい」

入ってきたのはミステイア・ローレライ。

それに次いで、ルーミア、リグル、チルノも入ってくる。

「チルノさん！ 珍しいですねこんなところに！」

「こんなところで悪かつたな生まれ変質者！」

今にも飛んでいきそうな文の翼をあらかじめつかんでおくりヨウ。

まあ本気を出されればもれなく吹っ飛ぶのはリヨウのだが、こうしておけば文の方も自制が効くのである。本気でつかんでいないと今にも飛びかかりそうな力ではあるが……。

しかしまあ、チルノが来ることは大妖精がここに現れた時点で察しはしていた。

「遊びに行くって言ってませんでした？」

「んー終わったー」

そう言いながらテーブル席の椅子に腰かけるルーミアと、その隣にリグル。

リグルはリヨウが文の翼を掴んでいることからなんとなく状況を理解し苦笑、さらに大妖精の目がギラギラしているのだからか、チルノ談義があつたと理解する。

ちなみにルーミアは小首をかしげていた。

「ジュース出すからチルノさんとミステイアも座ってください」

「んー」

「ありがとうリョウさん」

座ろうとするチルノとミスティアだったのだが刹那、タイミング悪くりョウが文の翼から手を放してしまい、文が勢いよく天井にぶつかり、ミスティアの前に落ちる。

驚いたミスティアが後ろにのけぞり、そのまま背中から倒れそうになるも——。  
「っ!?!」

全員が動こうとするも、真っ先に動いたのは超近距離にいた——チルノだった。咄嗟のことに飛べないミスティアの手を掴んで、もう片手をその背に回す。

ミスティアの身体は床とほぼ垂直、チルノが手を離せばそのまま後頭部を床に打ち付けるところだったが、結果としてはその背中与腕を掴んだチルノがミスティアを支えるという、ダンスのフィニッシュかのような体勢になっている。

超至近距離にある凜々しい表情のチルノ。

「大丈夫、ミスチー?」

「くくくッ!?!」

瞬時に、真っ赤になるミスティアの顔。

そして倒れていた文が腕をチルノに伸ばして叫ぶ。

「ばかなあああ!」

「イムホテツプみたいになってんな」

「誰だいそれ」

「気にしないで」

そつと、チルノがミスティアを起き上がらせて軽くその身体を見てうなづく。

「怪我無くて、よかつたのよき」

「はうつ……う、うんつ」

真つ赤な顔のままうなづくミスティア。

妙に優しく笑うチルノに動機がおさえられないというように、胸に手を当てつつそのまま椅子に座るが、隣に座るのはチルノである。

赤い顔のまま、チルノから視線を外してミスティアはそわそわとします。

「これはあれだなあ……」

「店長、どうするの？」

「どうするもこうするもなあ、さすがチルノさんだ」

「あ、こいつもダメらしい」

「知ってた」

なぜだか自慢げにうなづくリヨウに、諦めたような表情を浮かべる妹紅。

彼は文や大妖精とはまた違った目線の持ち主であるからそういう意味での心配はないのだが、妙にチルノを敬愛しているのでそこが気になるところではある。

まあ妹紅も小町もその理由を知ってはいるので、おかしいとも思わないのだが……。  
「そういえば大ちゃんいいの?」

「どうしようリヨウさん……私、この歳にして友達が同じ人を好きになるとかいうラブ  
コメ展開」

ラブコメできて良かったね! そもそも何千歳よ大ちゃん。とは思っても言わない。

リヨウは自身を良識ある大人である——と自負している。

「まああなたにはともあれ……はい、ジューズ」

とりあえず五つ、(暫定)子供たちに飲み物を出した。

大妖精もチルノの隣に座るが、異様に近い気がする。いやいつも通りかもしれないと  
思いつつも、やはりミステリアの影響かと深く考えつつ、リヨウはカウンターへと戻る。

道中なにかを踏んだ。

「ぐえっ」

「ん、なにか踏んだか?」

「烏天狗だよ」

小町の言葉に、少し考える表情を浮かべながらカウンターの方へと戻りコーヒーを一  
口飲む。

「ならいいや」



「こ、このクソもやしい……」

「なんだ負け犬」

声にならない声を上げて呻く射命丸文。

「ほんとリヨウさんと射命丸さんって仲良しですね」

文は笑って言うリグルへと近づいて、その肩にポンと手を置く。

「リグルさん……殺虫剤、おごりましようか？」

「この人こわい！ こわいこの人！」

涙目になるリグルを見かねたリヨウが文にグラスを放り投げるが、当然のようにそれをキャッチする。

「黙って座れ負け犬」

「鳥です！」

「そつちなんだ……」

苦笑するミスティアは、先ほどよりは冷静さを取り戻したようだった。

何かを考えるかのような表情のチルノ、そしてそんなチルノを惚けた顔でながめる大妖精。

「文、負け犬なの？」

「はうっ！ チルノさん、感じてしまいます」

「座れってんだろ負け犬ドマゾガラス！」

「うるせーんですよ脳筋クソもやし！」

罵声飛び交うその店内で、妹紅は安心するような表情でコーヒーをすすった。

そしてそんな妹紅を見て小町は苦々しい表情を浮かべる。

「……あんたも結構異常だよね」

「え、っ！」

## 第21話『チルコンと婚活』

忘れられた者たちの楽園、幻想郷——3月も末。そろそろ衣替えを考える季節である。

「その綺麗な顔ぶつとばしますよ脳筋腰巾着ウ！」

「羽全部むしってやらあ音速クソガラス！」

朝——霧の湖から少し離れた場所にある一軒家から、相も変わらず男と女の声が響いた。

近場を通る妖怪やら妖精は一瞬ビクツと震えるものの、すぐに誰と誰かを理解して苦笑しながら通り過ぎていく。

そしてそんな一軒家から、出てくるのは家主である少女——チルノである。

「やれやれ、相変わらさず仲良いわね」

わかっているように肩を竦めるものの、あの二人が聞けば即座に否定するだろう。

「今日はどーしよーかしら」

眩きながら歩き出すチルノ。

今日は寺子屋も遊ぶ予定もなく、まだあのタタリ異変から1月も経っていない現状では人里に行けば誰かしらが構ってくるだろうけれどわざわざ行ってもやることもなかった。

こんなことならもうちよつと家においても良かったがそろそろ二人とも仕事の時間だ。

「ん〜」

「あ、チルノちゃん」

「大ちゃん!」

走ってきたのは親友、大妖精。

軽く手を上げ応えて立ち止まると、大妖精が隣に立つ。

「今日もかつこいいねチルノちゃん!」

「知ってる。あたいったらまたさいきよーに近づいたわね」

不敵に笑うチルノに、大妖精が瞳の中にハートすら浮かべる。なんなら見る人が見ればハートが出ている錯覚さえ覚えるレベルにベタ惚れだった。

チルノ相手にここまで倒錯的な恋愛感なのは大妖精と射命丸文ぐらいのものなのだが、一緒にすると大妖精は血涙を流しながら舌を噛み切ることだろう。

夜雀ことミステイア・ローレイも数日前からチルノに対し態度が変わったとか何とか聞くが、ここまでではないがそれは劣っているとかそういう話ではない。

純粋に理性と常識力が勝っていると言うだけの話ではある。

ごく一般的に大妖精はまとも、ほか四人はバカと言われるチルノチームだが頭のネジが外れてる度でいえばチルノ関係を含めるとぶつちぎりで大妖精。

有識者であるツインテールの烏天狗はそう言っていた。

「今日はどうするの?」

「ん〜なにも考えてないのよさ」

肩をすくめて、空を見上げる。

「……昨日は幽香のところ行っただし」

「ふつとぼされてたね、リヨウさん」

哀愁漂う表情で遠くを見る大妖精。

「一昨日は白蓮でしょー」

「ふつとぼされてたね、リヨウさん」

ツウ、と涙を流す大妖精。

「そんじゃ今日は、紅魔館、諏訪子のところ……さとりのところでもいいのよさ」

「チルノちゃんはお友達多いからねー」

「一番は大ちゃんだよ?」

「ちるのちゃあん、しゅきい……」

まったく予想だにしない角度からの内角抉る魔球に大妖精がもだえて足をプルプルさせる。

それにしたってチルノの最近の気遣いは異常なのだが、大妖精にも射命丸文にとってもそれは加点以外のなんでもないので構わないのであった。

なんだか大妖精が蕩けた顔をしているので、熱かな？ とか思いながらチルノは冷気を持った手でその額に触れる。

「はひゃあつ！ チルノちゃんの温度オ!!」

ここまでぶつ壊れた大妖精は珍しいのでチルノは本気で心配になってきた。

「大ちゃん、帰って寝る？」

「そそそそ、そんな大胆なっ!!」

むっつり大妖精。ここ一番の幸せを享受して求婚まで考えだしたが、もう足腰ガクガクでどうにもならない。

故に——そんな隙でチャンスを逃す。

「チルノちゃあくん」

「あ、ミスチー！」

!!?!

絶望——まあ求婚したところでチルノがその意味をしつかりと理解するかどうか

で言えばNO。絶対にありえないのである。

そもそも求婚したぐらいで許可されるならば、ひどくやさしい射命丸文は100回は婚姻成功している。

なにはともあれミスティアが合流し、チルノは行先を相談する相手が一人増えて喜んでいた。

「どこ行こつか、ミスチー行きたいところある?」

「うーん……」

とりあえず今の候補を伝える。

紅魔館、守矢神社、旧地獄、輝針城その他もろもろエトセトラと言ったところだ。

妖精と妖怪が気軽に行つていい場所ではないような気もするが、チルノと一緒になら大丈夫という安心感もあるので別にどこでも構わないな、なんてミスティアは考えてチルノの方を見る。

顎に手を当てて考えている姿を見て、ミスティアは脳内がそんな凛々しい顔をしたチルノのことで一杯になるのを感じた。

(あくかつこいいチルノちゃん! しゅきしゅきしゅきしゅきしゅぎ!)

思考はだいぶやられているが、口にしないだけでも偉い。理性が働いている。

ちなみに射命丸文に言わせれば、こういう場合はチルノちゃん成分が分泌されている

らしい。それを聞いた例の男はとても文字にするのが億劫になるような罵詈雑言で返したそうだ。しかしそれが正しいだろう。

「とりあえず……霊夢のどこでも行くわよ！」

「全然候補に挙がってなかったけどね！」

「チルノちゃん唯我独尊！ しゅきい！」

結局、チルノの提案ならばなんでも構わないのだった。

大妖精もミスティアもチルノといわれればなんでもいいのだから、そういうところは文やリヨウだって一緒である。

そして、そんなチルノ狂いと化した二人を連れてこられる博麗霊夢の苦勞は察し余りあるだろう。

数時間が経ち、チルノとチルコン（造語）二名が博麗神社で霊夢の頭を悩ませている頃、幻想郷唯一にして独尊な喫茶店レインメーカーはピークを終えてリヨウは一息ついていた。

寺子屋が休みということもあり慧音が待っているので旦那こと妹紅は今日は素早く帰宅。

実際に旦那と言ったらもれなく真つ赤になった妹紅が真つ赤な炎を出しそうになっ



て滅茶苦茶に焦ったのだが、結果そうはならなかったのになにはともあれ命拾いした。

「さてと、どうすつかなあ……」

「閉店まで4時間ぐらいあるしね」

「だなあ……」

ただ一人の客、姫海堂はたてが記事をまとめつつそう言ったのでリヨウは軽く相槌を打って、紅魔館の図書館で“正式に借りた”本を開く。

前のあれから翌日はぎこちない感じで接してきたはたてだったが、少しすればいつも通りだった。

文が期待していたような展開にはならない。なるはずがない。

「……なんか悲しくなってきた」

「どしたの？」

「なんでもねえ……」

そう言って、パチュリーから借りた本に目を通そうとした瞬間——扉が開く。

「いらっしやー……お、珍しい」

「あらあく暇そうね」

「すみませんっ！ ゆ、幽々子さま……」

入ってきたのは西行寺幽々子と魂魄妖夢の二人。

「まあピーク過ぎて実際暇ですよ。どうぞお好きな席に」

「それじゃあ……」

カウンター席に座る幽々子と妖夢の二人。

同じくカウンター席に座っているものの、はたては入って奥の方であるからにリヨウの前に座る幽々子と妖夢とは二席ほど離れている。

まあその二人とはたてが話している姿もピンとこないのだが……。

「今日はどうします?」

「じゃありヨウ……の、おすすめで」

「あ、私はカフェモカを」

「かしこまりました」

フツと笑みを浮かべてうなずいたりヨウがコーヒーを淹れにかかる——と言っても手慣れてすっかり待ち時間の方が長くなっている。

なにか軽食でも用意しようかと思考した瞬間、幽々子と目が合う。

「なんか食べる?」

「あらくさすがねえ、それじゃあ」

「幽々子さま、食べ過ぎないでくださいね?」

「わかつてるわよ」

「ほんとにわかつてます?」

そんな会話に苦笑するリヨウは、幽々子が幻想郷でも有名な「大食い」だということ  
を理解しているからである。

ちなみに、次点で「茨木華扇」だろう。仙人とは思えない暴飲暴食っぷりであった。  
ということで、幽々子の注文を聞いてサンドイッチの用意を開始。

「あ、そういうばりヨウ……幽香や白蓮と勝負したつて聞いたけどお」  
「うっ」

「聞かれたくなさそうな顔してるわね」

はたての指摘に、その通りだという風にうなずきながら切ったパンにレタスを乗せ  
る。

「ボロボロでしたよ。そもそもなんで俺が……」

「どおせチルノに乗せられちゃったんでしょお」

「ぐっ!」

「凶星ですかリヨウ」

凶星も凶星、そもそもチルノのお願いでもなければあのレベルの化け物を相手にする  
わけがないし、負けることが確定しているようなものなので、霊夢や魔理沙、早苗や咲  
夜のように「特別」でなければ戦おうなどとも思わないことだろう。

“特別”に多少のコンプレックスがある魔理沙相手に直接は口が裂けても言えないのだが……。

「二回連続吹っ飛ばされましたよ……手加減してくれましたけど」

でなければ原型をとどめていないだろう。

もれなくオーバーキル。滅びのバーストストリーム。

「まあ死んじやつたらその時は私が生き返らせて従者にでもしようかしら」

「俺従者にされがちなんっすけど」

「執事としては良さげなのよねえ……まあリョウが死んだらその前に吸血鬼が眷属にしにくるかしら？ それともキョンシーとしてよみがえらされる？ まあ本格的に死んだあと魂さえ残ってればどうにでもなるけど」

「妖夢、ご主人様めっちゃ怖いこと言ってるけど」

「すみません、いてくれると助かると思いました」

「すっごい死を望まれてる。いや死なせてくれないまであるけど」

死者蘇生で過労死待ったなし。

「おもしろそうだし花果子念報で誰が死後のリョウを取るか予測立ててみる？」

「素直に死なせろ！ なんだこの願望！」

「こんな悲しいことはない。」

「それじゃあ氷で永久保存に単勝かしらあ」

「死に方ダービー!？」

「やっぱ切り刻まれた後に幽霊っていうのにも」

「惨殺?!」

しかもこれまでに上がっていない例を出される始末。

「つてことで妖夢？」

「私にやれと!？」

「殺人教唆で逮捕! お巡りさん呼んで!」

そんなものは無い。

「というより、リヨウさんとはいやですつて!」

「なぜか傷つくやつ!」

前もやった件である。

「やゝい振られたゝ」

「うぜえ」

「リヨウとの弾幕勝負、痛そうなんですよ……」

「いや弾幕は痛いだろ」

それもそうだ。ノーペイン弾幕勝負など存在するわけではない。

「でもリヨウのはこう……関節極めてきたりするじゃないですか？」

サフミツシヨ  
関節技を使うなど弾幕勝負において論外極まりない。

「まあそりやそうだ。パワーがないもんで」

「例の“能力”使えば？」

「無理無理、逆に俺もしんどい。妖夢もしんどい」

「いやほんと無理です。そういうのは鬼相手にお願ひします」

「だからさすがに死ぬって」

そう言つて顔をしかめるリヨウに、なにか思いついた表情を浮かべる幽々子。

十中八九ろくなことではないと、察する妖夢とリヨウ。

「それじゃあ……妖夢に勝つたらあ、妖夢をあげるよ」

「フアツ!？」

「はえ〜」

驚愕し目を見開き幽々子の方を向く妖夢。もはや脳が理解をこぼみ空をみつめるリヨウ。はたてはあいた口がふさがらない。

三者三様のリアクションに楽しそうに笑う幽々子だが、楽しいのは幽々子だけである。

全員が、同時に意識を戻す。

「幽々子さん、勝手に妖夢を」

「幽々子さま！ なにを言ってるんですか!?!」

初心故に顔を真っ赤にして抗議する妖夢。

リヨウとしても、妖夢は些か少女すぎてそういう感情を抱いたこともないのでさすがに抵抗があつた。

いやそもそもだ――。

「りりり、リヨウとなんて私っ、何人敵に回すと思ってるんですか!!?!」

「そんなことある?」

「ありますから! リヨウも少しは考えてもの言ってください!」

こんな説教ある? とも思ったがあるので黙っていることとした。

比較的まともな妖夢がそういうのだから、きつと自分の理解しがたいことが起こっているのは間違いないのだからうけれど、フラグを建てた覚えはない。

故に――。

「……もしかして俺、モテてるわけではない?」

「なに自惚れてんのチンピラ」

「誰がチンピラだよオ、オレはまっとうな社会人だろおが!」

「そういうところよ」

ただ単純に、このおもしろい男を欲しいという陣営が多いだけの話である。彼には酷な話ではあるが決してモテてるだとかフラグが建ち放題だとかそんなわけもない。

ここまで幻想郷の美女美少女と絡んでいてこのザマである。

無様（笑）と笑う烏天狗が彼の頭の中にいたので、とりあえずパロスペシャルをかました。

「じゃあ……私は？」

「幽々子しゃまあ!!？」

「ちよ、マジ!!？」

妖夢が錯乱し、はたては立ち上がる。ちなみにリヨウは固まった。

幽々子は相変わらずニコニコとしながらなんでもないように言うので、それがまた本気かどうかわからなくなり妖夢は焦る。

幻想郷が一週間、いや一ヶ月はややくしくなる予感。

ハツとしたはたてが幽々子の豊満な胸を見てから、リヨウを見る。

「……む、むう」

「悩んでんじゃないわよ！ 胸!!？ 乳!!？ おっぱい!!？ 巨乳がいいの!!？ 巨乳が!!？」

「ううくん」

「凶星みたいな顔すんじゃないわよ!!？」



抗議するはたてに、リヨウは困ったような表情を浮かべる。

彼がするにしては珍しい表情ではあるのだが理由が理由である。

「どうするかなあ……」

「ボソツとつぶやくな本気っぽい！ 巨乳ならなんでもいいの!! 私だって言うてあるわよ!」

「姫海堂さんなんで張り合ってるんですか」

「ちがつ、ちよつとは意識してもよくない!? 結構イケてると思うの私!」

「いや、いまそれどころじゃ……」

「あらあくリヨウつたらあく」

「幽々子さま満更でもない顔しないでください!」

もはやカオス、入ってきた客がいるとすれば即座に扉をしめて出ていくことだろう。

楽しそうな幽々子、難しい顔をするリヨウ、なぜかキレるはたて、オロオロしている妖夢。

そして――。

「フツ、話は聞かせてもらいましたよ……またラブコメですね?」

「射命丸!」

裏口から現れた射命丸文。

オロオロしていた妖夢だったがその表情は絶望に変わる。

間違いないカオスである。カオスフォームでカオスMAX。

「リヨウ、結婚です！ 白玉楼で快樂におぼれた生活をしていてください！ 私でもチルノさんと愛の巢で快樂におぼれた性活をします！ 無知なチルノさんにでガン攻めされたい！」

「やっぱねえわ！ こいつがいる限り！」

「あらあ、射命丸に負けちゃったあ」

そういうことではない——いや、やはりそういうことなのだろう。

「リヨウの好みの巨乳ですよ!? こんな機会もうないですよ!?!」

「あるかもしれねえだろ!?!」

文は泣いた。可哀想にフラグなんて存在しないんだよ——リヨウが妄想して創作したお伽噺なんだよ。

「モノローグ風に語るんじやねえよ！ ワンチャンねえの!?!」

「……ワンチャンはあるかも」

「お、おう……期待するわ」

「調子乗るんじゃないわよチンピラ！」

「なんではたてこんな怒ってんだよ!?!」

もうなにがなんだかわからない。妖夢は天井を見上げて光を失った目で涙を流した。幻想郷広しといえどここまでの状況がどうやって作り出されるのかまるで理解しがたいし、幽々子は楽しそうにそのノリに乗るし……。

「誰か来ませんかあ……」

結局——30分ほど経ってチルノが来るまで誰もこなかった。

ただしチルノが来た時点で、さらに場は荒れた……。

## 第2話『大根役者と永遠亭』

——朝、リヨウは洗い物と洗濯を終えて一息ついていた。

テーブルを囲むのはチルノ、文、大妖精、リヨウといういつもの四人。

おそらく一番まともなのはチルノ、と他人には言われかねない地獄。

並の者が参加しようものなら一瞬で廃人と化す——と、魂魄妖夢が先日言っていた。

「チルノさん、この漢字読めます?」

「んー 射命丸文」でしょ、文はあたいをバカにしすぎなのよさ! 文の名前ぐらい読めるわよ?」

むう、とふくれつ面になるチルノ。

文は呼吸が荒くなり、笑顔のまま鼻血を流すのは大妖精。

そんな二人に引きながら、なにかが起こる前に止めなきやなーとか思っているリヨウなのだが、起こってからでは遅いのだ。

「それじゃこれは?」

「メスブタ射命丸文」

「ツゝゝゝ!!」

「うおいクソガラス! 残飯漁つてろゴラア!!」

「ツ! せつかくの余韻台無しにしないでください脳内ピンクもやし!」

「クソみてえな余韻に浸つてんじゃねえボケエ! てかお前にピンク言われたかねえわ  
!」

射命丸文をぶつ殺すか一瞬本気で悩んだ大妖精でもあつたが、結果的にそちらよりも、今日のリヨウはチンピラ度が高いなあ。という感想の方に思考がもつていかれる。

なにはともあれ、いつも通りなので安心感。

小首をかしげているチルノを見て、大妖精はその無知っぷりが良い。と頷く。

「でもイケメンチルノちゃんにエスコートされるのも捨てがたいなあ」

「大ちゃんさん!? この子はもうだめだ!」

文と取っ組み合っているリヨウが叫ぶが、大妖精は妄想に耽つていてまるで聞いていない。  
ない。

実に、いつも通りである。

チルノたちがいつも通りの朝を迎えていた頃、妖怪賢者こと八雲紫が自らの屋敷の縁側に腰掛けて茶を飲んでいた。

外の世界との境界上にあるという、そこには彼女の式神である八雲藍も共に在る。

「紫さま、お早いですね」

「そうですね……夢見が悪かったものだから」

そう言つてため息をついた紫を察してか、藍は眉を顰めつつどこからか出した饅頭を取り出した。

「ありがとう、さて……行こうかしら」

「どちらに？」

「少しね……そのあとはどうしようかしら、適当に過ぎすわ」

「私も」

「一人で良いわよ。ちよつとした用だから」

そういうと、饅頭を一口で食べて開いた「スキマ」に消えていく。

そこが閉じると、藍はため息をついて紫が使つていた湯呑を持ち、台所へと向かい歩きます。

「優しすぎるんじゃないですか……紫さま」

深く心配するような声で言うと、頭の中に浮かぶ人間の顔を頭を振つて消す。

今日は自らの式神、橙に会いに行こうと強く領いた。

——いつだって誰だって、大事な者といえるのが一番なのだ。

そして、チルノ邸は——落ち着いていた。

同時に茶を飲む四人が、湯呑を置くと同時にほうつと息を吐く。

喫茶レインメーカーの方は、本日は定休日であるのだが……予定を思い出す。

「永遠亭行かないとか」

「かぐやのとこ？」

「ん、チルノさんも行きます？」

「いくー」

チルノが元気にそういうと、リヨウが頷く。

すっかりチルノファンというのは存在するもので、いまだに人里を通ると気さくに話しかけられたりする。

少し早めに出るのが良いだろう。それに店に寄って手土産を持っていかなければならない。

「そういえば、大ちゃんと文は？」

「あ、私も行きます。チルノちゃんと輝夜さんを一緒にしとくわけにはいかないんで！」

「いや輝夜さんは別に」

「しとくわけにはいかないんで！」

「あ、はい」

庄に負けてとりあえず領しておく。

「で、お前は？」

「今日はやめときます」

意外、と眼を見開くリヨウに、文が苦笑で返した。

「……チルノさんのお布団で寝てます！」

「出てけ！」

そう言いながら、リヨウは四つの湯呑を持って台所へと向かう。

チルノも同じく台所へと向かい、なにか話をしているがこのあとの予定などだろう。

大妖精は着いていくだけなので良いか、とリヨウとチルノを微笑ましく見ている。

そこでふと、文も同じような視線を向けているのに気付いた。

「なにか大事な用ですか？」

「お墓参りです」

「お墓参り？」

「リヨウの」

「ちよ！ 文さん!?!」

「おー良い顔しますねー」



驚愕する大妖精に、文がケラケラと笑ってシャッターを切る。

それまた驚いた大妖精が、文をジト目でにらむのだがいかんせんふくれっ面が可愛らしいので威圧感も何もあつたものではないだろう。

ともかくだ……。

「それじゃあ今日のうちに私はチルノちゃんと大人の階段登らせていただきますねっ  
！」

ニツコリと太陽のような笑顔を浮かべる大妖精。

文が即座にチルノに駆け寄ってなにか捲し立てるように喋りだす。

——ちなみに、その騒ぎもリヨウが文にコブラツイストをかけたところで終わつた。

その後、文と別れてチルノ、大妖精、リヨウの三人は人里へ。

住人達から声をかけられたり偶々遭遇した稗田阿求と本居小鈴と出会って立ち話してしまつたりで、予定より遅くにレインメーカーへと辿りついた。

冷蔵庫から、箱を取り出して紙袋に入れる。

「お土産？」

「そ、昨日のうちに作つといた奴……世話になつてるからね。異変のたびに」

「リヨウさんいっつも大げがしてるから……」

苦笑して言う大妖精に、リヨウも苦々しく笑う。

実力が見合っていないという自覚もあるのだが、「能力故」に足止めやらなにやら便利なのだ。まあその結果がリヨウは重傷、戦線復帰不可となるのだが……。

まあなにはともあれ、永遠亭の八意永琳には大変世話になっているのだから土産の一つぐらい持つていかなければならない。

「いきますよチルノさん」

「うん！」

扉を開いて外に出るリヨウと、大妖精の手を引いて外に行くチルノ。

誰もいなくなった店の中に開かれるスキマから、頭だけを出すのは八雲紫。

「……タイミング悪いわねえ」

せつかくコーヒー飲みに来たのに、とつぶやいてそつと椅子に座る。

周囲を見渡して、静かに息を吐いた。

「……面影あるわね。この店も」

そうつぶやいて軽く目を瞑る。

テーブルに頭を預けると、「赤くなった左頬」にひんやりとしたテーブルの冷たさが心地よく広がった。

眠気すら感じ始めてすぐに起き上がると、そんなところチルノやリヨウにみられるわけにもいかない、欠伸を噛み殺しつつ背を伸ばす。

「霊夢のどこでも行こうかしら」

そうつぶやき再びスキマを開く。

「まったく射命丸、おもいきり引つ叩いてくれちゃって……」

ため息をついて、左頬を撫でながら店から消えた。

再び、数分の時を経てリヨウたちは永遠亭に続く、迷いの竹林の入り口へとやってくる。

基本的には妹紅や「因幡てる」がいなければ永遠亭にたどり着くのは非常に困難である、前もって八意永琳には向かうということ伝えてはいて迎えを出すとは言っていたのだが……。

そこには、ブレザーにミニスカートの、ウサギの耳を持つ紫色の長い髪の少女。

赤い瞳を持つ少女は、リヨウたちの方を見てふつと微笑む。

「こんにちは、リヨウさんチルノ大妖精」

「鈴仙……」

「ウドンゲじゃん」

永遠亭の薬師、八意永琳の弟子こと鈴仙・優曇華院・イナバ。

この幻想郷においてかなりまともな方であり、人間とも有効な関係を築いている。今は永遠亭から人里に薬を売りに来たのだろうと、背中にかついでいる木箱で理解した。

本日の案内役は鈴仙のようだということがわかり、リヨウは心底安心する。妹紅でもいいがてゐだとなつていたかわからない。

「行きましょうか……あれ、本日は射命丸は？」

「なんか用事あるとかで、ですね」

「リヨウさんと一緒にいないなんて珍しいですね？」

「チルノさんと一緒にいないのが珍しいんですよ」

そう言つて苦笑を浮かべると、歩き出す鈴仙の後を追つて行く。

チルノが楽しそうに大妖精を話をしながら歩いているのと同様に、リヨウはリヨウで鈴仙と話をしながら歩いていた。

周囲には、時たま「ウサギの気配」を感じる

「……いたずらウサギか」

「まあてゐがいなければそこまで派手なこととはしてきませんから……」

苦笑する彼女に、リヨウは眉をひそめた。

つまり地味なこととはするということである。

「そういえば今度、姫様がそちらにお邪魔したいと」

「輝夜さんが出てくるのか!？」

「え、あ、はい……」

「……初めて見る」

「まあ滅多なことでもないと出てきませんからね……宴会とか」

ふむ、と頷くりヨウはならば土産は別のもでも良かったかもしれないも思っ  
た。

まあお礼は主に永琳に、なのでそこまで深く考えることもないだろうと、頷く。

「まあその時は……おすすりでも食べてもらおうかな」

「リヨウさんのお菓子、人気ありますもんね。人里でも……私も好きですよ」

そう言つて笑う鈴仙に、少しばかり心をもつていかれそうになるリヨウ。

基本的に巨乳の美少女には弱い。ウィークポイント、弱点と言つても過言ではないの  
だ。

「そういえばリヨウ!」

隣にやつてきたチルノの方に、鈴仙とリヨウは視線を向ける。

「春のお祭り、リヨウはお店とか出すの?」

「え、あ……あくお誘いは来てるんですけどね。今年はいいかな。チルノさんと回した

いし」

そう言つて笑うと、チルノが笑顔を浮かべてリヨウの手を取つた。

「うん！ はじめてのお祭りだし、一緒に回ろうね！」

「……はい」

微笑を浮かべてうなづくいたリヨウは、チルノに握られた手をこちらからも少し強く握り返す。

鈴仙が、リヨウに手を伸ばしかけて……下ろす。

だがその瞬間、大妖精が空いたチルノの片腕を抱きこむように腕を組んだ。

「私も一緒だよチルノちゃん、そしてこつそり抜け出して人気のない場所なんかで……」

キヤーー！」

「なんで抜け出すの？ というかなんかあるの？」

「気にしなくていいよチルノ」

苦笑してそういう鈴仙に、チルノは不思議そうな表情を浮かべながらも頷く。ナイスアシストである。

「大ちゃん、腕がおっぱいに挟まれて暑い」

「なにそれうらやまげふんげふん！ セーフ！ やめろ鈴仙、そんな眼で俺を見るなっ  
！」

「いやその、うん、知ってますけど……うん」  
切ない。大妖精とチルノに聞こえていないのが幸いであった。

四人は永遠亭へと辿りつく。

リヨウはどうにか誤解——ではないのだが、状況を元に戻すことに成功していた。

玄関の戸を開いて、鈴仙を先頭に中へと入る。中は純和風な趣あるつくりであった。

その音に気づいてか、どこかの襖が開く音がすると、近くの部屋から女の頭だけが飛び出る。

「うおっ！ か、輝夜さん……！」

「あつ、来たのね……えーりんー！ おきやくー！ チルノたちー！」

頭だけを出した状態で廊下の先に叫ぶ永遠亭の姫こと「蓬萊山輝夜」。かつて見た絵本、カグヤ姫その人だが、姫つぼさは服装とその綺麗な長い黒髪ぐらいしかない。

まあそんな月の姫は複雑な理由があつてのこの幻想郷にいるのだが、別段語ることもないだろう。

輝夜の声に呼ばれて、奥からやってくるのは八意永琳。

「師匠、帰りましたあ」

「おかえりウドンゲ、それにいらっしやいリヨウとチルノと大妖精」

そう言うって笑みを浮かべる永琳に、リヨウも笑みを浮かべて返す。

「どうもです」

「えーりん！ 久しぶり！」

「こんにちは」

しっかりと挨拶をした二人を見て、リヨウは手に持った紙袋を渡した。

「つまらないものですけど」

「あら、わざわざありがとう」

「食べ物!? 食べ物ね！」

「輝夜?」

ニコニコ笑顔を浮かべながら振り返った永琳の顔は、こちらからは見えないが圧は感じる。

苦笑する大妖精と鈴仙、チルノは感嘆の声を上げていて、輝夜の顔は青くなった。

「ご、ごめん……ありがとうリヨウ」

弱弱しく言う輝夜を見てうなずくと、永琳は再びリヨウたちの方へと向き直る。

「ごめんなさいねうちの姫様が……ということ、上がってもらって良いわよ」

「チルノ、大妖精、ゲームしましよー！」



「……二人とも、姫様の相手お願い」

「かぐやと遊ぶの楽しいからいいよっ!」

そう言つて笑顔を浮かべたチルノが、大妖精の手を引いて輝夜の部屋へと入つた。

その光景を見て、部屋から聞こえる声を聴いて、微笑ましいと笑みを浮かべる三人。リヨウも靴を脱いで上がると、チルノと、連れられて行つた大妖精の靴も揃えた。

「貴方も律儀ね……前から」

「前もなにも一年しかいないっすよ」

そう言いながら、永琳と共に廊下を歩き出す。

リヨウの後ろから鈴仙も着いていく。

「そうね。まだ一年なのね……とりあえず健康診断でもする?」

「いや、別にやんないっすよ。なんか引つかかりそうで怖いし」

「そういうの氣づいてあげるのも医者の仕事なのよ」

笑う永琳に、リヨウは苦笑で応えた。

「……なんか氣づいてます?」

「多少はね、ていうかしよっちゆう貴方の身体見てるしそのぐらいはね」

「まあ氣が付いたらここにいるなんて、しよっちゆうですからね」

「そういうこと、隅から隅まで把握してるわよ」

クスツと笑つて立ち止まる永琳が、戸を空けてリヨウを中へと入れる。

困つたように笑うリヨウ、その背後で鈴仙が少しばかり顔を赤くしていた。

「お、大人ですね……」

「そういうんじゃないから」

鈴仙よりよほど年下だが、とは思つたが言わないでおく。

幻想郷で暮らしていれば理解できることではあるのだ。

永い時を生きるからこそ、幼くある者たち……。

「なにはともあれ、どうぞ」

「どうもつす」

軽く頭を下げて部屋——居間に入る。

卓を囲むように座るリヨウ、永琳。

鈴仙は木箱を置いたためにどこか別の部屋へと向かつていく。

「大事な話、あるんでしょ？」

「まあ、今度はお世話かけないんで、お願いごとが一つ！」

「無条件で受けてあげたいけどね」

「えっちなことでもいいんですか!?!」

「去勢するわよ」

「あ、はい、すみません」

ちよつとした冗談なのに、と思いつながら目をそらすも永琳はニコニコしている。

「なんつープレッシャー……」

「伊達に生きてないわよ。というよりそんなことどこでも言ってるんじゃないでしょうね？」

ジト、とした目で見られると、頬を掻きつつ目をそらす。

「さすがにこんなストレートにセクハラ流してくれるの永琳さんだけなんで……」

「ふふつ、許してあげる。伊達に長生きしてないし、こういう会話も新鮮で嫌いじゃないし」

「つまり……えっちなこととして良いんですか？」

「メスはどこだったかしら」

「すみません」

「あと私、意外と重いわよ？」

フツと笑みを浮かべてそう言う永琳に、妙な悪寒を感じた。

気軽に手を出す相手ではないし……そもそも本気だったとして相手にされるかも怪しいし、ともかく伊達に幻想郷の勢力のトップ勢ではないだろう。

咳払いをするリヨウ。

「それじゃ、本題に……」

「それが正解ね。貴方には鈴仙の件の借りもあるから、なるべく無条件で受けてあげる」  
「……ありがとうございます」

しっかりと頭を下げてから、リヨウはしっかりと永琳の目を見据える。

輝夜の部屋で、幻想郷では珍しいテレビゲームをやっている。

もちろん本気でやれば持ち主である輝夜がゴリゴリに勝つのだが、それ自体が珍しいためかチルノも大妖精も楽しそうであるし……さすがに月の姫は手加減ぐらいするのだ。

そして今は三人で協力してゲームをプレイしているのだが……。

「勝った!」

「私がいるんだから当然よ」

「かぐやさすがー!」

笑みを浮かべながら輝夜へと抱き着くチルノ。

外の寒気が嫌で温かくしている部屋で、ひんやりとしたチルノの柔らかな肌が頬にあたる。

笑顔のまま、震えそうになるも——耐えた。

「えへへー」

「ふふふ、ま、任せなさいよチルノ……」

そう言いながら、ハツとして輝夜は大妖精の方を見る

普段なら「八つ裂き」にされかねないような眼で見られているところだが、大妖精は何かを考えるかのように顎に手を当てて壁を見つめていた。

眉をひそめて、どこか寂しそうな眼をしている大妖精に、輝夜も訝しげな表情を浮かべる。

「かぐや?」

チルノに呼ばれてそちらを見ると、彼女は不思議そうな表情をしている。

「……まあいつか! チルノお!」

「わわっ、くすぐったいわよお!」

そのまま両手でチルノを抱きしめて頬をチルノの頬へとすりすりとかくつつける。

ひんやりとした感覚が気持ちよくなってきた、ついついよだれが垂れてしまいが仕方のないことなのだ。

……直後、頭部にクナイが刺さった辺りで「調子に乗りすぎた」と反省するのだった。

## 第23話『冬と平穩』

永遠亭から自宅への帰路を行くチルノたち。

帰り際に蓬萊山輝夜が『もつとチルノたちと遊ぶ〜！』とかいうわがままを言って地団駄を踏んでいたが永琳がめた。

見事なチヨークスリーパーをかけていて、輝夜が白目向いて泡を吹きだしたところでリヨウがレフエリーストップをかけたが、黙ってみていた鈴仙は『もうちよつと早めにとめてあげればよかったのに』と思ったそうだ。

鈴仙に迷いの竹林から人里へと送ってもらい、そこから色々お土産をもらいつつ森を抜けて家の前。

人里でもらった棒型スナックを食べているチルノと大妖精、リヨウは鍵を出そうと思ってもとりあえずドアノブに手をかけてひねってみると、扉が開く。

ただそれだけで察する。

「鴉か……」

「文？」

靴を脱いで居間に入ると……烏天狗が横になっていた。

気配を感じてか、眠気眼をこすりながら起き上った射命丸文は上体を起こして背と翼を伸ばす。

「んう〜！」

「羽が散るんだよ」

「文だ。寝てたの？」

「おかえりなさい。てかもうそんな時間ですか!？」

窓から差し込むのが夕日だということに気づき、肩を落とす。

「あくしまったあ」

「文さん、目が赤いですけど」

「あれ、花粉症ですかねえ……目薬あります？」

「棚かどつかに、あつた。それか結膜炎とか？」

そう言いながら、リョウが取り出した目薬を受け取って、文は差す。

「あゝ……ありがとう」

「おう、気をつけろよ。ドライアイとか」

「わかつてますよお」

返された目薬を棚にしまうリョウ。

「そういえばどうでした。リョウがまた永琳さんのおっぱいガン見してました？」

「……」

「あーやつぱ見たんですね！」

目薬で涙を流しながら、リヨウの方に指を向けて嬉々と言う文。

「うるっせえ見ない方が失礼だろが！」

「いや、それはない」

「ないですよリヨウさん」

「……そつか、ないか」

さすがに大妖精もあちらについては分が悪い。大人しくすることにしたリヨウ。

「とりあえず、晩飯晩飯くチルノさんなに食べたいっすか？」

「肉じゃが！」

「そんな素材……あつたわ」

「さすがあたいの主夫ね！」

「そういえばそんなことも言った気がしなくてもない」

そう言いながら苦笑すると、冷蔵庫から食材を出していった。

居間から姦しく声が聞こえてくるが、楽しそうなチルノの声に頬をほころばせながら食材を置いていく。

なんの因果か、幻想郷でもトップクラスで文明開化しているチルノの家。河童脅威の



技術力。

「もはやジオン」

「え、リヨウさん頻繁にテロ起こすんですか?」

「大ちゃんはその偏った知識なんとかした方がいい」

そう言いながら、リヨウはざるとポウルを用意していく。

隣の大妖精が、柵を開けてそこからピーラーを取り出したので、なるほどと頷いて文とチルノの方に耳を傾けるが、楽しそうな声が聞こえてくるのでそのまま食材を渡す。

じゃがいもを受け取り、大妖精は嬉しそうに頷く。

「大ちゃんはあれだな、主婦の素養があるな」

「それじゃあいつチルノちゃんと結婚しても大丈夫ですね!」

「ああ、うん、そうかも」

ニコニコする大妖精の圧に負けてとりあえず了承してしまう。

だがすぐに、大妖精はじゃがいもの皮むきを再開しつつ目を細めて微笑む。

「まあチルノちゃんが気づけばなあ……」

「チルノさんに恋愛は早いかもしれないからな」

しかして、チルノが誰かを選ぶとして、そうなれば頼まれなくてもリヨウは出ていくことだろう。

彼女の幸せ以上に求めるものなどありはしない。

そういう思考でいるのは……。

「俺が、チルノを……」

大妖精が眉をひそめて心配そうな表情でリヨウの方に視線を向ける。

ピーラーから手を放すと、そつとリヨウの服の裾を引っ張った。

「リヨウさん」

「んあ？」

ふと、思考を引き戻される。

「大丈夫ですか？」

「……ごめん大ちゃん」

彼女の気遣いに苦笑を浮かべつつにんじんの皮むきでもしようかと手に取ろうとした。

その瞬間、ノックの音が聞こえる。

小首をかしげて大妖精の方を見ると、頷くのでリヨウは手を止めて扉の方へと向かう。

「はいはい、どなたー」

軽く言いながら、ドアを開ける。

開いたドア、前にいるのは白い女性……妖怪だ。

柔らかな笑顔を浮かべて、静かに言葉を発す。

「あらリヨウ、おはよう」

「……こんばんはの時間ですよ。レテイさん」

冬の妖怪レテイ・ホワイトロックがそこには立っていた。

その冷気か妖気を察して、奥からチルノが駆けてくると、そのままレテイの方へと跳ぶ。

「レテイ！」

「あらチルノ、おはよう」

そう言いながらチルノを受け止めるレテイ。

よほどうれいいのか満面の笑みを浮かべるチルノに、レテイもふんわりとした笑みを零す。

氷の妖精と冬の妖怪、当初はそれほど仲がいいわけではなかったそうだが、仲良くなれないわけがなかったのだろう。

「チルノさんだし、相性はいいだろうしなあ」

「あゝチルノさあんがあ……」

自らの主を取られた哀れな鴉天狗が寄りかかってくる。

「重え」

「うら若き乙女にそういうこと言うからもてないんですよ！」

「はいはい、お前暇なら手伝え」

「チルノさんをレテイさんにあげようってんですか!？」

「レテイさんはそういうんじゃないやねえんで」

そんな言い争いをしていっているうちに、レテイはチルノと共に奥の居間に行ったようで、楽しそうなチルノの声が聞こえてきた。

リヨウは微笑を浮かべて調理を再開しようとするが、文はともかく大妖精も絶望したような表情を浮かべている。

まったくこのチルコンたちは、と溜息をついた。

「いま、お前が言うなという電波が降りてきました」

「俺の心読んだか？」

「新手の口説き文句ですか？」

「なにが悲しくてお前口説くんだよ」

軽く言い合いながら調理を進めていく。

三人並んでそうしていると、親子のように見えなくも……。

「あ！　なんかすごい不愉快な電波飛んできました！」

「電波受信する鴉は嫌だな」

「ごもつともですね」

「二人ともひどくないですか？」

文の言葉に二人して『全然そんなことない』とは思ったが、言わないという情が二人にもまだあつた。

その後も軽く軽口を交わしつつ、楽しげに調理を進めていく……。

居間ではレティが座っており、その膝にチルノが座っている。

楽しそうに語るチルノの言葉を、楽しそうに聞くレティ。

そうしていると姉妹のようにも見える。

「んくやっぱり」

「ん、どうしたのチルノ？」

「レティのふとももってやらかくて座りやすいなって！」

「褒めてないわよ」

一転、眉をピクピクさせながら言うレティ。

ふとましいだとかあたり判定が横長だとか、巫女とか魔法使いが言いたい放題言いやがる記憶が思い出される。まあチルノはそういう意図があつて言ったわけではないのだが……。

レテイもわかってるからこそ言いつらい。

「あたい好きだなっ」

「……もお」

そんな風に言われては笑顔にならざるをえない。

「もう、お休み？」

「そうねえ、今日が最後になるかなって遊びに来たのよ……しばらく寝てたし」

「また次の冬までだねー」

どこか寂しそうな声に、そつとチルノの頭を撫でる。

「待つてるね。リヨウと大ちゃんと文で」

「そうね。ありがとう」

「レテイがいなきや冬が始まんないのよさ」

「というよりチルノ……なんだか変わったわね？」

少しだけ驚くようなレテイに、チルノは頭を傾けた。

「そう？」

「ええ……なんだか名残惜しいわね」

レテイは眉を擡めて、ぎこちなく微笑んだ。

妖怪の山で、犬走権が空を見上げて時間を確認すると近くに来た哨戒天狗と入れ替わる。

定時ということで、権は哨戒を終えて帰路につくために歩く。

夜はまだ肌寒いと眉をしかめる。

「あら、権じゃない」

「……はたてさん？」

「相変わらずねえ」

そう言いながらため息をつく。

「こんな時間にどうして？」

「いやあ、ちよつとお墓参り行っててね」

「……そういうことですか」

眉をひそめる権に、はたては『なるほど』と手を叩く。

「たぶんアイツも行つてたでしょ、視てた？」

「まあ……丁度視えてしまったというか」

妖怪の山からならば犬走権は「千里先まで見通す」という能力でほぼ全域を見渡す

ことも可能である。

「辛気臭いの苦手だから一人で行つただけだね」

「八雲紫と一緒でしたよ。あの人は」

「はあっ!？」

「たまたま会っただけでしょうけど」

「……命日でもないのになんとなーく行ったのが三人、いや四人って」

首をかしげる椀。

「四人ですか？」

「ん、レティがね」

「冬の妖怪、彼女も……いや、あの件に係われれば誰もが、ですか」

「そういうこと」

椀は苦虫を噛み潰したような顔で、それを見たはたては苦々しく笑う。

できることなら思い出したくもない話である。

そんな二人の会話の当事者である者たちが集うチルノ家では、食事を終えて団欒していた。

それぞれが一緒だったりすることは多いが、五人一緒というのは珍しいのだが、それでも自然でいれるのはチルノのおかげだったか……。

今はすっかり静かで、チルノと大妖精が眠りについてしまっているので二人を同じ布



団に運ぶと、文たち三人は外に出た。

肌寒い空気に顔をしかめるリヨウ。

そんな彼を見て、レティは苦笑を浮かべた。

「情けないわねえ」

「上着着てくりやよかった」

ため息をつくリヨウ。

「チルノさんの冷気に快楽を見出し始めてからが本番ですよ？」

「なんの本番だ変態クソガラス……」

「土方みたいに言わないでください」

「言つてねえ」

「あははっ、相変わらずね貴方たちは」

二人のやりとりにおかしそうに笑うレティ。

そんな彼女の笑みを見てリヨウも微笑を浮かべ、チラリと文の方に視線を動かせば彼女も同じように笑っていた。

そろそろ別れの時なのは、彼女の性質上仕方がないのだ——冬の妖怪が春や夏に出ることもなし。

「それじゃあ、またね」

「次くる時にはチルノさんと私のアツアツ新婚生活を、ご期待ください！」

「期待しないでくるわね」

「えー」

不満そうな文を見て、レティは『そりやそうでしょう』と思いつつリヨウの方に視線を動かした。

「レティさん、その、また……？」

「ええ、またね」

ただそれだけの会話を交わして、レティは背を向け去っていく。

背中を向けたまま、レティは背後に向かって手を上げ振って——夜の闇へと消えた。

残された二人、リヨウは腕を組んでため息をつき天を見上げる。

星々の輝きは『表』で見るには地上が明るすぎた。

そんな彼の隣の文が、軽く腕を引く。

「戻りますよ。寒いんで」

「お前も寒さ弱いんじゃないかよ」

「チルノさんの寒さ意外はノーサンキューです」

「なるほど、変態らしい言い分だ」

振り返ってドアを開けるリヨウ。

「……泊まってくか？」

「え、チルノさんの隣で寝て良いんですか!？」

「それはダメに決まってるだろ」

「大妖精さんは一緒に寝てますよ!？」

「お前と一緒にすんな！」

さすがにまったく別問題である。

「そういえばお祭りどうするんですか？」

「店を出さないでおく予定だから、一緒に行くことにするわ」

「……チルノさんが喜びますね」

「そりやなによりで」

二人で家へと入った。

窓から明かりが漏れる幻想郷らしくもない、森に佇む一軒家。

ただ普通に生きている。それで十分だ。十分すぎる。

それだけで救われる者も、確かに存在するのだ。

## 第24話『人形使いと魔法使い』

——昼時、ピークも終えた喫茶レインメーカー。

本日は妹紅も休みで、今日一日だけ臨時でバイトを雇って乗り切った。

それほど形式ばった店でもないからして、そういうことだつて容易に可能であり、客もほぼ常連なので多少のミスぐらいであればどうにでもなるのであろう。

まあ雇ったバイトも常連——ツインテールをなびかせて、妹紅が着ることがなかった華やかな衣装を着ている。

「馬子にも衣装だな」

「人がせっかく働いてやったのに言い方！」

臨時バイトこと姫海堂はたてが頬を膨らませてジト目でリヨウを睨む。

「冗談だつて、かわいいかわいい」

「かわっ!?!」

顔を赤くしてあたふたするはたて。実に免疫というものが存在しないなど、少しばかり心配にもなる。

「お前は変わらないなあ」

「なによ、私からしたらあんただって変わってないように思うけど？」  
「……そうか、そうかもな」

そう言つて笑うとコーヒーを飲む。

どうせ客ももういないのだと、はたてにもコーヒーを出すとパアツと音が出そうな笑顔を浮かべてそれに口をつけた。

リヨウは椅子に座ると静かに天井を見上げてから、はたての方を向く。

「座つちやうんですか」

「座つたちやうわよ。もう客なんて変なのしかこないでしょ」

「否定しずれえ……」

たまにはまともな者だつてくるが、大半が何考えてるわかんねーヤベー奴らである。しかしヤベー奴らは大体知り合いという絶妙な状況。

いつもの端の席ではなく、前に座るはたてにそつとサンドイッチを出した。

さらに嬉しそうな表情を浮かべるはたて。

「いいわね！ まかない出るなら毎日働いてやってもいいわよ！」

「妹紅さんのが良い」

「なによその言い方」

一転不満そうなのはたてを見て笑みを浮かべる。

それにしてもたまにはまともな者がこの時間に来てもいいのではないかと思わないでもないのは、つい最近に小悪魔とパチュリーや、豊聡耳神子が来たときぐらいだ。

比較的静かなのは秦ころや純弧あたりだろうか……ヘカーティア・ラピスラズリや摩多羅隠岐奈あたりは静かに雑談をするも未だに落ち着かない。

「はたてはいいなあ」

「はあっ!? なに!? □説いてんの!? リョウとか趣味じゃないけど!」

「めっちゃ言うじゃん」

別段シヨツクな表情を浮かべるでもなく、リョウはコーヒーを啜る。

そうしていると、ドアが開いてベルが鳴った。

素早く立ち上がるはたてを見ると、そういうところ真面目で良いなと思う。

「いらっしやい……つて魔理沙かよ」

「扱い酷くないか?」

普通の魔法使いこと霧雨魔理沙がドアを開けている。

そうするとさらに入ってくる少女が一人……。

「いや魔理沙だし……お、アリスさんいらっしやい!」

「お邪魔するわね」

「あたしの時と対応違いすぎるぜ」

「普段の行いのせいじゃないの？」

「はたて……お前いつつもここにいるな」

「誰が暇人よ！」

「言つてない」

魔理沙と共にやってきた人形使いことアリス・マーガトロイドは金色の髪と青いスカートを揺らしつつ、リヨウの前のカウンター席へと腰を下ろす。

その隣に座った魔理沙は目の前にあるメニューに軽く目を移すが……。

「レイコー」

「アイスコーヒーな」

「私は、カフェモカで」

「かしこまりました」

そう返事をして準備を開始する。

「てかなんではたてがそんなコスプレしてここにいるんだ？」

「そんなつて、かわいいでしようが」

「まあそれは否定しないけど、リヨウとそういうプレイ中だったりしたか？」

「なあっ!!？」

意地の悪い笑みを浮かべてそう言う魔理沙の背後に、セクハラおやじの幻影を見る

リヨウはため息。

そつとアイスコーヒーを出すと、軽くその頭を小突く。

「あいたつ」

「アリスさんが勘違いしたら困るから、この店の評判的にも」

「あら、リヨウは天狗を侍らす趣味でもあるのかと思つてたけど？」

「なぜ……ああいや、言わなくていいつす」

手を前に出してそう言うのと、リヨウは何かを察したように黙つてカフェモカを出す。

天狗と言われて出てくるのなんて三人しかいないし大体予想ができる。

「そういえばチルノと大妖精は？」

「あの二人なら今日は寺子屋ですよ。アイツも地霊殿の方行かつて言つてたし」

「へえ、まあどうせ夕方に合流すんだろ？」

「まあそうだけど」

魔理沙の言葉に頷いて、リヨウは自分のコーヒーを飲む。

はたてもお仕事モードが終わつたのか椅子に座つてコーヒーを飲んでいた。

「今日のはたてもこつち来るだろ？」

「んー久々にリヨウの家でご飯食べるのも悪くないかあ、あんた料理の腕は確かだし」

「他が確かじゃない言い方すんなよ……ていうか俺の家じゃないけどな」



そう言うリヨウを見てはたとと魔理沙が顔を見合わせて笑う。  
なにか言いたいことがあるとすれば「今更俺の家じゃないとか言ってる」とかだろ  
う。

「わかるからな？ なに考えてるか」

「ツーカーってやつだな！」

「死んだ言葉だ」

クスリと笑ったアリスが、ふと何かを思い出したという風に口を開く。

「リヨウ、大妖精とチルノ連れて今度ウチに来てくれる？」

「へ、二人を連れて……ああ、また服仕立ててくれるんつか？」

「そういうこと、人形の服も良いけど……」

脳裏に浮かぶのはいつぞや彼女が仕立てた「浴衣」を着て喜ぶチルノと大妖精の二人。  
人。

「ありがとうございます」

「……いいえ、新しい浴衣も作る？」

「いや、前の奴で良いですよ。チルノさんも喜ぶでしょうし」

「そうね」

そう言つてアリスは静かに笑みを零すと、隣の魔理沙は視線を落としてメニューを見

ている。

「……なんか食い物ほしいな」

「ん、なんか食うか？」

「そうだな、またサンドイッチかあ……サンドイッチだな！」

天井を見て悩んだ結果、注文をした魔理沙を尻目に、はたてはサンドイッチの最後の一口を口に入れた。

親指についたソースをペロツと舐めて皿をリョウに渡す。

「相変わらず美味しいけどね」

ニツと笑顔を浮かべるはたてを見て、リョウも自然と笑顔を零した。

「ありがとな」

「ふふっ毎日食べたいぐらいよ」

言ってから、ハツとしたはたての顔が徐々に赤くなっていき……耳まで真っ赤になった時点でよりにもよって魔理沙が口を開く。

「プロポーズ？」

「ち、違うから！　そういう意味じゃないからっ！」

「はたて、貴方……男見る目がないわね」

「待ってアリスさん、通りざまに俺を切り付けしないで」

はあ、とため息をつくアリスにはたてが詰め寄る。

「だからそういうんじゃないって！　こんな死に急ぎ誰が好きになんのよ!？」

「死に急ぎって誰がだ」

「あんたでしようが!？」　前日も前々回もさらにその前も!」

「……そんなことないよなあ魔理沙?」

「異変終わりに毎回永琳の世話になる奴がよく言うぜ」

目をそらしてため息をつく。

「死に急ぐつもりはないんだけどなあ」

「毎度心配するこっちの身にもなりなさいよお」

睨んで恨むように言うはたてに、気まずそうに視線をそらす。

さすがに心配をかけているという自覚はあるのだろう。何人かには説教を食らった

こともあるし、永琳にはほぼ毎回小言を言われている。

かといって異変解決にチルノが乗り出すと言っているのだから行かぬわけにはいか

ないのだ。

「んー……むしろ生きたいんだけどな」

「言葉と行動が合っていないのぜ」

そうした話をしていると、扉が開いてベルが鳴る。

「いらつしやいませ、幽香さん」

「幽香?」

「珍しいわね、ここで会うなんて」

花の妖怪こと風見幽香がたまたまれた日傘片手に入ってきた。

おしとやかな雰囲気にはリョウウとしてはかなり惹かれるものがあるのだが、いかんせん本性を知っているので小悪魔の時のように思考は暴走しない。

つい最近も吹き飛ばされたばかりだ。

「ふう、それにしても午後にごんなにお客がいるのも珍しいわね」

「はたては客じゃないつすよ。こいつバイト」

座った幽香にそう言うと、少し驚いた表情を浮かべる。むしろなんだと思ったのだらう。

はたてがジト目を幽香に向けた。

「妙なコスプレしてるとは思ってたけど」

「コスプレじゃないわよ!」

「なんかりョウウとのそういうプレイなのかなってね?」

「なんでよ!?!」

ぐわーっと捲し立てるはたてを見て、幽香がおかしそうに笑う。

笑いの絶えない店ではあるも、必ず誰かしらキレている気がする。

「どうしようかしら……紅茶が良いわね」

「良いの入ってますよ」

「良い心がけじゃない。貴方のそういうまめなところは好きよ？」

優しげな顔をしてそう言う幽香に、リヨウは顔をしかめた。

そうやってからかわれることが頻繁にあるので慣れてはいるが、やはり一瞬だけとはいえ心臓に悪い。

たまには反撃してやろうかと思わないでもないので、紅茶を準備しつつ口を開く。

「俺も幽香さんの優しいところ好きっすよ」

「あら、チルノに怒られそう」

「さてどうですかねえ」

実際にどうなのだろうか？　まるで想像がつかない。

リヨウが出ていくことになったところで引き止めるところも放置するところもだ。同様にリヨウがチルノの下を去るということも然り、誰が想像できるだろうか……。

幽香ははたてを指さす

「それに横の鴉天狗は？」

「だからはたては——」

「はあっ!? 何言ってるの!? だからこんな目つき悪い奴のどこが!」

「俺がツッコミ入れる前に……トランキーロ、あっせんなよ」

誰がわかるというのだろうかというネタをぶっこむもはたては止まらない……。

「なんでどいつもこいつもそんなんっ! ね、ねえリヨウ!!」

「お、おうそうだな……ていうか幽香さんあんまからかわないでやってくださいよ」

「ふふっ、ほんとおもしろいわね」

楽しそうな幽香。『さすがドS』とも思ったがこれ以上言っていると厄介なことになる気がする。

「意外と人気あるから大変じゃないか?」

「その話、前もあつたけどさあ……なんか主夫的な使い道じゃね?」

「まあそうだな、誰かが独占するとこの店なんかも、あと気軽にいじりにいけないし」

「魔理沙って1から52だったらどの番号が好きだ?」

「え……ちなみに何の番号?」

「リヨウのことだから、どうせ技の番号でしょ」

アリスの言葉に頷く。

「52のサブミッション関節技のどれ極めるか、選ばせてやろうと思って」

「こえーよ!」

まあ真面目に彼がただ一人の女を選び動こうものなら、意外とどうにかなりそうな気もするなとアリスは彼の友人ながらに思わないでもなかったのは、彼のこれまでの戦い等を見ているからだろう。

それはまともな道ではなかったが、彼を知るに十分すぎるものだっただろう。自分にとつても、他の者たちにとつてもだ。

「……まあそういう道を選べるほど器用じゃないわよね、貴方は」

「え、突然デイスられた？」

「アリスだったらサデイストねえ」

「幽香に言われたくはないんだけど」

頬杖をついて口元をニヤつかせる幽香にアリスは不満そうな顔を向ければ、それを見て笑う魔理沙。

リヨウはというと、アリスに言われた言葉に思うところがあるのかわずかに眉をひそめていた。

そして、そんな彼を見るはたてはため息をついて背を伸ばす。

「りよろう、上がるわよ？」

「ああ、ありがとな。つと給料給料」

「いいわよ。やってりや来るから先払い」

その言葉に、リヨウはフツと笑みを浮かべてうなずいた。

はたては満足そうに頷いて笑うと、着替えのためか裏口へと消える。

リヨウがふと視線に気づくと、幽香と眼が合った。

「はたて、良い娘だと思うけどね」

「いやそういうんじゃないですよホント……支えてくれる大事な奴ではありませんけど」

彼女が去って行った方を見ながら、つぶやく。

「まあそういう意味じゃ射命丸や大妖精とかと同じ？」

「ええ」

軽くそう言うが、それはきつと特別な存在なのだろう。

色恋の沙汰ではなくただ純粹に、家族とはまた違う存在。

しかして友というには重すぎるし、恋仲というには一つ道が違う。

「貴方がもう少し器用ならね」

「器用な方だと思ってるんですけどね」

「本気で言ってるの？」

「ハハ、よく俺をご存じで」

「ええ……もちろん♪」

良い笑顔でそう言う幽香に、困ったように笑うリヨウ。しかし、その表情はどこか楽



しそれでもあった。

雰囲気が変わったことを察してか、コーヒーを飲んだ魔理沙が口を開く。

「まあリヨウはモテるってより一家に一台って感じだしな」

「コーヒー飲んだからそんなブラッくなジョーク言っちゃうの？」

「うわ親父くさい」

アリスの言葉に顔をしかめた。

「まって傷つく、まだ20代も前半だぞ」

「そろそろ結婚を考える時期ね、人里の間であれば」

幽香の言葉に絶望したような表情を浮かべる。

「つらい！　これがセクハラ！　小悪魔さんがいる小悪魔さんが！」

「あんたホント小悪魔好きね。まあパチュリーもくつつけて紅魔館にリヨウを置いとく

か考えてたけど」

「ちよつと待ってホントにそうなると話変わってくるから」

好きだが憧れのお姉さんの感じなのである。見た目リヨウの方が上だが……。

「いやしかし、小悪魔さんと……え、てか俺は婿養子になるの？」

「リヨウ・ノーレッジか、胸熱だな」

「パチュリーがママねえ」

「……それはちよつと変なプレイ感強いわね」

別に小悪魔が小悪魔・ノーレッジなわけでもないし、小悪魔がパチュリーの子供でもないし、だとかツツコミが山ほど出てくるがそれどころではない。

幽香とアリスが若干引いていて、魔理沙はテーブルに突っ伏して笑い悶えている。

「……待つてこれ俺が損しただけの話じゃね?」

「リヨウがパチュリーと赤ちゃんプレイですつて!？」

「変なタイミングで出てくんじゃねえはたてエ!」

——喫茶レインメーカーでコントが始まった頃。

どこか暗い空間、徐々に暖かくなってきた季節にも関わらずそこは冷気に満ちている。

巨大な氷塊が、わずかに差し込む陽の光によつて輝く。

それを軽く撫でるのは「レティ・ホワイトロック」。

「さて……まだ寝れないわね」

少しばかりクマのできた目を見開き、氷塊に背を向けて歩き出す。

「さて、久しぶりにやりましょうか……!」

笑みを浮かべたレティは憂いを帯びた表情で何かを想う。

「チルノ、リヨウ……さあ、どうするのかしら？」

そして始まるのだろう——新たな異変が。

第V章【東方白寵夢】 A paradise of

distant dreams】

第25話『冬の訪れ —Lidong—』

春の陽気が人里を温かく包む。

村人たちにも活気が生まれ、花見もお祭りも近いこともあり雰囲気は寒い時期に比べればにぎやかだ。

祭りの準備をしている店なども既に見かける。

本日は喫茶店ことレインメーカーも定休日であり、リヨウはチルノと共に街に行く。もちろん大妖精も一緒に、射命丸文も今日は共にいた。

「そろそろお祭りだね！」

「ですね」

手を繋いだまま歩くリヨウとチルノ、その後ろで不満そうな文。

「リヨウは初めてだから色々教えてあげるね！」

「楽しみにしてますね」

フツ、と微笑を浮かべてそう応え頷く。

大妖精が駆けてきて、チルノの空いた手を取る。

「楽しみだね、みんなで回るの！」

「ん、リヨウがいればあたいたちも嫌な顔されずに色々楽しめるのよさ」

「最近の悪戯妖精扱いじゃないの見てれば普通に歓迎されると思いますよ？」

事実チルノはタタリ異変の一件以来、人里では大人気であった。

リヨウは知らないが「昔と比べれば」ずいぶんと大人になったと周り言うだろうけれど、それはきつとどこぞの守銭奴巫女やガサツな魔法使いのおかげだろう。

文はうんうん、と頷いてリヨウの横から顔を出す。

「でも私のチルノさんがみんなのものになるのはちよつと……」

「元々テメエでもないから安心しておくんなまし」

「ろくでもないですよ人里！ チルノさん、一緒にうち帰りましょう！ 私の家に！」

「お前ろくなこと言わねえな」

げっそりした様子でリヨウは文を睨む。

「チルノさんのためなら河童に頼んで0度にできるエアコン作ってもらいます！」

「お前はペンギンか」

「文ってバカでしょ」

!!?」

さすがにショックを受けたかと思つたが、文はニヤついている。それを見て顔をしかめるリヨウ。

「本当に気持ち悪いよ」

「ふふふ、チルノさんにこんなこと言われるの私だけですよ?」

「魔理沙にも言うよ?」

「ちよつと魔理沙さんとケリつけてきます」

「勝負の舞台にも立つてない奴まきこむな」

さすがに魔理沙だろうと同情する。

そうしていると、前方から歩いてくる——少女が一人。

目が合うと、その少女は上品にほほ笑む。

「阿求さん」

「リヨウさん、おはようございます」

「あつきゆんおはよー」

「チルノさんも、大妖精さんと射命丸さんも、おはようございます」

稗田阿求がそう言い、軽く頭を下げた。

「おはよう、今日は……小鈴のどこか?」

「はい、それから茶屋でも行くかどうかと」

雑談でも始まるかと思ひ文は退屈そうに前髪をいじる。

稗田阿求は口が堅いし格式高い家の者なので、そこまで面白い話は滅多に期待できない。

それにリヨウとの話となれば余計に、だろう。

彼女自身も自覚は無いと思うが気の使い方が他の者とわけが違う。

「真面目すぎるんですよねえ……」

いつの間にかチルノから離れて横にきた大妖精。

「他のみんなが不真面目すぎると思うんですけど」

「……八雲紫とか？」

「文さん、紫さんのこと……っ！」

ふと、大妖精の表情が変わる。それに文が目を細めると、前のリヨウの雰囲気が変わるのに気づく。

いやそれより先に変わったのはチルノのように感じた。

そして少し遅れて人里全体の空気が変わる。

「これは……」

リヨウがつぶやくと、チルノが頷く。

「冬の、匂い……」

そして寒気、上空には雲、嗅覚すらも……。

「冬だな……」

「冬、ですね」

「冬とは」

周囲の人々も違和感を感じはじめたのか、ざわつく。

その雰囲気を感じて、リヨウは妖怪の山の方へと視線を動かした。

そちらは……。

「赤いな……」

「紅葉？」

「秋ですねえ」

ならばどこかでは当然、夏もあるのだろうか？

しかし、文の表情はうつむいていて読めないし、リヨウはただでさえ悪い目つきがさらに悪くなっている。

大妖精は青ざめた表情で、チルノは悩むような顔。

「……また、季節関係の異変ですか？」

「歴史的にも多いタイプの異変ですね。その本質は違ってても」



阿求がそう言つて、寒気に少し震えた。

周囲の村人が集まってきて、阿求に説明を求めようとする。

「落ち着いてください。とりあえず防寒対策を……」

「阿求殿！」

走ってくるのは——上白沢慧音。

「慧音さん……」

「けーね！ 冬がきた！」

その言葉に、慧音の表情が青ざめる。

なにか『嫌な記憶』でもあるかのようなその様子に、リヨウが頷く。

季節が崩れる。幻想郷の異変ではそれほど珍しいことではないが、早く解決しなければ死活問題になるのも事実だ。

歴史を隠す力を使おうとも、所詮は隠すだけで隔離された空間に移動させるわけではない。今の状態では無意味。

「……まずいな、早く」

「あたいが行くよ。たぶん……これなら『相手』がどこにいるかわかるから」

「チルノ……」

みんなの前で、ハッキリとそう言う。

自らの胸に手を当てて、強い瞳で慧音を見つめた。

悩むような表情の慧音。

「チルノにとつて、冬の方が生きやすいだろうか？」

どういふつもりで言ったのかはわからない。

もしかしたら彼女は「黒幕」を理解して、わかっているからこそ言っているのかもしれない。

だがそれでもチルノは笑顔を浮かべて慧音たちに背を向ける。

「……冷気、も意識しなくつても出さなくできるようになったけど……やっぱあたい、冷たいから」

「チルノさん……」

その背を、阿求が複雑な表情で見つめた。

「夏の方がみんなと遊べるし、あたい夏って嫌いじゃないよ」

「私は一年中チルノさんと」

「文さん」

「だ、大妖精さんこわい……」

慧音や村人たちに背を向けたまま、氷の翼を展開するチルノ。

「それに、あたいは夏でも冬でも——さいきよーになる妖精なのよさー！」

そんなもの、屁でもないという風に宣言してみせる。

リヨウも大妖精も文も、わずかな笑みを浮かべた。

こうなれば、やることは一つ——異変解決だ。

飛んでいるチルノ、大妖精、文——そして文の腕に掴まっているリヨウ。

上昇できず、頑張ってもゆるやかに下降する程度までしかできないリヨウはそうしな  
ければいけないのである。

そうしていると、リヨウは真上にある文の顔を見上げ、口を開く。

「おい文」

「どしましたリヨウ」

「お前、妖怪の山行った方が良さげだ」

そう言ったリヨウに、文とてわかつているのだという目を向ける。

視界に映る妖怪の山は緑でも白でもなく、紅く染まっていた……紅葉。秋の装い。

「良い景色、感動的です、一句詠みますか？」

「めっちゃ季語散らばりそうだな」

「才能なし！」

「まだ詠んでねえよ」

そう言いながら、文から手を離すと彼女も手を離した。

察した大妖精が手を伸ばすのでその手を取って、今度は大妖精に下降を防いでもらう。

ちなみに、リヨウは下降速度は好きにできる。極力下降を遅くしているので重さはそれほどない。

「終わったらすぐに駆けつけますからねチルノさん！」

「文がピンチの時はあたいが駆けつけるよ」

「はうあつ!? す、素敵すぎますう、私一生チルノさんについていきますうっ！」

「え? あ、うん、そういうことね。完全に理解したのよさ」

「つしやあ! 行つてきますす！」

昔のアニメみたいに駆けるポーズをとった直後に風を残して消える。

ちなみにチルノはいまいち理解していないが、文がなんか嬉しそうなのでまあ良いかと思考を放棄した。たぶん舎弟とか子分として一生ついていくということだろうと数度頷く。

呆れた表情のリヨウと大妖精を尻目に、チルノは気配のする方を向きなおした。

「いくよ、リヨウ! 大ちゃん！」

「やりましょう、チルノさん……！」

「私だって、頑張るよ！」

そして、人里に雪が降り出した頃。

博麗神社は——猛暑に襲われていた。

「あつつう〜、なんなのよお」

汗をかきながら、縁側に座っている霊夢が悪態をつく。

そしてその隣に座っている魔理沙も、また然り。

「なんかさあ、わりかし最近こんなことなかったかあ？」

「……あつたー！」

思い起こすのは摩多羅隠岐奈が起こした“四季異変”だ。

つまりは異変、しかもご丁寧に自分にごこまでの実害をもたらしやがった。これは博麗の巫女たる自分への挑戦、つまりは動かざるをえない。

勢いよく立ち上がった霊夢。同時に魔理沙も立ち上がる。

「いくわよ、ごこだけ春、または秋ならともかく夏なんてっ」

「こんな短期間で四季ごころいじりやがつてえ！ 今度はどこのどいつだー！」

二人して神社の境内へとたどり着くと、鳥居をくぐるためにそちらを向いて——止まる。

「一面に、花……」

魔理沙がつぶやき、視線の先に日傘を見る。

フリルのついた日傘、揺れるチエツクのスカート、そして振り返る——大妖怪。

長い付き合いだ。見間違うはずもない。

「春も秋も冬もどこかに行っちゃつてるんじゃないやあ……夏になるしかないわよね？ お花がよく育つわ」

「幽香あ、何勝手に人の神社に花畑作ってくれてんのよ。参拝客来るならまだしも」

「おい霊夢」

だがしかし、これはこれで新名所扱いになりそうでもあるのだが、霊夢の「異変解決」は他のなによりも優先される。

いつも通り、戦闘態勢を取るのはこの後の展開が読んでいるからだろう。

日傘をたたんだ幽香が、その口を三日月のようにゆがめ、赤い瞳で二人を射抜く。

花の妖怪こと風見幽香が、両手を広げた。

「さあ、久しぶりに……遊びましょうか？」

## 第26話 『願望 — egoist —』

——忘れられた者たちの楽園、幻想郷。

曆上の季節は春。

人里は冬、妖怪の山は秋、博麗神社は夏、旧地獄にこそ真に春が訪れていた。

「めっちゃ寒い！」

さいきよーの妖精ことチルノと、そのお供二名。リヨウと大妖精。

文が去つてからは、空を飛ぶ大妖精に手を貸してもらい落下を防ぎつつ、チルノの探知を頼りに目的地へと飛んでいる。

目的地へと近づいている証拠なのか、雪が降り始めて、その先の大地は既に白く染まっていた。

「ふい〜大ちゃんは大丈夫か？」

「はい、私はわりと……」

「すげえな」

「リヨウ、家よって着替えてくる？」

チルノからの提案に、首を横に振った。

「どーせ動いたら熱くなるんで」

「……そういうえげそうだね。リヨウつたらすぐ脱ぐし」

そんなチルノの言葉に、苦笑する大妖精。

「ま、まあ間違つてないけど……」

「その言い方よくないつすよ」

「ん？」

いまいちわかつていないようで、小首をかしげるチルノ。

まあ実際にリヨウは厚着をしようと、薄着だろうと戦闘がはじまれば上着は脱ぐ。

「なおした方がいいか？」

「癖なんで別にいいんじゃないですか？」

「そういうもんかね」

「そーよ、ちよつとかっこいいし！」

「チルノさんがそう言うなら」

基本的にチルノの慣性は信じる方針である。

「ん、着くわよ」

辿りついたのは——霧の湖だ。



陸にしっかりと着地する大妖精とリヨウ。

湖は、半分ほどが凍結しているようであり、周囲を見渡しても他の生物が見当たらない。  
い。

「つと、サンキュー大ちゃん」

「いえ、それより」

「ああ……」

二人の前に降りるチルノ。そしてその視線の先。

凍った湖の上、幻想的な雰囲気の中——レティ・ホワイトロックがその上に立っていた。  
いた。

「レティ……」

「チルノ……」

チルノたちから見て横を向いて立っているレティは、チルノに気づくと流し目でそこらを見る。

しんしんと降る雪、憂いを帯びたその表情、リヨウは思わず見惚れそうになるが……

即座に両頬を叩いて頭を振った。

彼女こそが……。

「くくろくま……なんちゃって」

クスリ、と笑うレテイ。

「なんで……どうして？」

「どうしてつてチルノ、私まだ貴女と、貴女達といたいというだけよ？」

さびしそうに笑う彼女のそれは、きつと本心のだろう。

それを聞いたチルノと大妖精は顔を複雑そうにしかめて、リヨウはただ無表情で見つめるのみだ……。

レテイが両手を開き、凍結した湖の上でクルツと回ると寂しさを含んだ笑みから一転、ニコリと笑った。

「だからね、考えたわけ……ここら辺がずっと冬ならいいなつて」

「〝ここらへん〟、ですか？」

「そう、それで妖怪の山はずつと秋、迷いの竹林の方はずつと春、そしたらそれぞれ棲み分けできるでしょ？」

しかしして、明らかな穴があるようにも思えると、大妖精は眉を顰める。

「それだけ、ですか？ 本当に……湖だつて！」

「じゃあ半分だけ冬にしましょうか？」

呆気なくそう答え、レテイはその手に落ちた雪を見て笑う。

「レテイ、人里の人困ってるよ。祭りだつてある！」

「一緒に行きたいと、思わない？　一週間もすれば慣れてくれるでしょ」  
「ツ！　でもっ、だとしても！」

狼狽えるチルノの背後、リヨウはなにを言うでもなく立っていた。

ただレティの方を見て、レティもその視線に気づいてリヨウの方に視線を向けるが、すぐにチルノへと視線を戻すのは、狼狽えながらも、チルノが次の言葉を紡ぐために口を開くからだろう。

それをどこか温かく見守ってしまうのも、彼女が今回の異変を起こした理由か……。

「それでも、里のみんなを放っておけないよ」

「でも前まで、妖精を見下して貴女を疎ましく思っていた者たちよ？」

レティの瞳が鋭くなり、拳を握りしめる。冬の妖怪の内に熱いなにかを感じ、リヨウもまた瞳を細めた。

「きつとなにかあったら、貴女を真っ先に見捨てるに決まってるわ！」

「そんなの、なってみないとわからないよ！」

「わかるわよ！　私には、だからこそ！」

「でもっ！」

強い瞳で、チルノはレティを見つめ、はつきりと口にする。

「それでもあたいは今、里の人たちを守りたいって思うんだ！」

その両手を振ると、氷の塊がチルノの手から伸び——砕ける。  
そして、手には二本の氷剣。

レティは、右手で左の二の腕をギュツと掴み、困ったように笑った。  
どういう感情なのか、チルノも大妖精も読みかねる。

「大人になったと思つたのに、やっぱりバカね貴女」

「レティ……」

「それじゃ、私も我を通させていただくわ……」

強い瞳で手を振るうレティの背後から、白き波——吹雪。

それがすさまじい速度で押し寄せてくる。

ハツとして、リヨウは素早く大妖精をチルノの方へと押しやった。

即座にその意図を理解して、チルノは右腕で大妖精を抱きかかえ、リヨウに向かって強く頷く。

「えっリヨウさん!？」

「頼みますチルノさん!」

「ええ、任せなさい!」

大妖精がリヨウに手を伸ばすが、吹雪が到達しホワイトアウト。

猛吹雪に覆われそれぞれの姿を見失ってしまうチルノ、大妖精、リヨウの三人。

視界は真つ白の吹雪で覆われて、今わかるのは自分が大妖精を抱きかかえているというのみで、レティが遠ざかっているということ。

歯痒そうな表情を浮かべながらも、横を見れば大妖精が震えているようだった。力いっぱい、息を吸い込む。

「レティいいい！」

強い瞳と声で、左手に握った氷剣を逆手持ちすると雪が積もりだした大地に突き刺す。

「大ちゃん、掴まってて！」

「う、うん！」

「もしいるなら、避けてよねりヨウ！」

そう言いながら大妖精を離すと、大妖精はすぐにチルノの腰に両手で掴まる。

空いた右手を空に振るえば、その右手の剣がさらに氷を纏いチルノの身の丈ほどまで大きくなったところで割れる。

中から現れるのは氷の大剣、それを両手で持つと、勢いよく振るった。

「デヤアアアッ！」

大剣が振るわれると、その剣圧により吹雪が晴れた。その時。

「大ちゃんッ！」

「きゃっ!?!」

剣から手を離し、大妖精を抱えると後ろに跳ぶ。

——白銀の煌めき。一筋の閃光。すなわち斬撃。

それが、さきほどまでいた場所を切り裂き地に亀裂を奔らせた。

チルノが着地と同時に指を鳴らすと、置いてきた大剣と剣の二本が爆発するように散る。

鋭く尖った氷が弾けると、斬撃を放った者が後ろへと跳び、チルノたちとの間に距離を取った。

「大ちゃん、大丈夫!?!」

着地したチルノが大妖精のことを見る。

「ち、チルノちゃんこそ怪我は!?!」

「あたいは大丈夫、ちよつとスカート切れたけど」

そう言つて笑うチルノのスカートを、目をひん剥いてみる大妖精。

まるでスリットのように横に切れ目ができてしまっている。

あまり見ることのないチルノの生足に、大妖精が眼を見開く。

「エッツツ」

「え?」

「あ、ちがつ……ど、ど変態はどこだこらあ！」

可愛らしい声で威厳も威圧感も迫力もなく言い放つ、顔を赤くした大妖精。

チルノとしてはリヨウの悪いところが伝染ったかな、と感じ少しばかり困った表情を浮かべる。

「残念ながら、ここから先は通さないようにとお達しです」

そんな大妖精曰く、*“ど変態”*の声。

表情を引き締めると、チルノは襲撃者の方へと視線を向けた。

「みよんー！」

「はあ、どうしてこうなってしまったのか……」

「よ、妖夢さん!？」

魂魄妖夢。

冥界、白玉楼の庭師であり、主こと西行寺幽々子の警護……というより召使い。

その両手で、長刀『楼観剣』を持ち、立っている。

「リヨウは……」

「ううん、周りにいないよ」

すでに吹雪は晴れているが、しかしリヨウは見当たらないし雪はいまだに降りやまない。

それもそうだろう。今は……否。此処は真冬なのだから。

「みよん、マジ?」

「ええ……半分不本意ですが、本気です」

真面目な彼女にしては珍しいと思うが、幽々子の願いであればそれもまた自明の理。

故に、引くことはないということもまた然り。

となればと、チルノはその手に氷の剣を再び創り出す。

「大ちゃん、一緒に戦って?」

「もちろん!」

「あたいだけじゃまだ、きつと……みよんに勝てないから」

妖夢は相対する氷精を見て複雑な表情を浮かべた。

かつての彼女ならばそう言っただろうか? 根拠のない自信は彼女の持ち味ではあった。

しかして、今は違う。

「成長、ですか……」

幻想郷の怪異たちには縁遠い話ではあるのだが、それは確かな成長なのだろう。

あの無鉄砲さを気に入っていた魔理沙などはどう思っているのか、などと物思いにふ



ける。

さりとて、成長とは常になにかを捨て何かを得るものなのだ。それに……。

「一番大事なところは、変わってないでしょうし……」

息を吐き、ただの一刀を両手で持ち切つ先をチルノに向ける。

「推して参る……!」

「難しい言葉はわかんないよ、みよん!」

二人が同時に、地を蹴り跳び出す。

少し時間は遡り吹雪に巻き込まれた時、リヨウは大妖精を押ししてチルノの方へ。

二人で頷き合い、白き暴風に巻き込まれ視界が真っ白に染まる。

奇襲を警戒して素早く両手足に“気”を集中させて戦闘態勢に入るも——腹部に

衝撃。

「がっ!」

そのまま吹き飛んだりリヨウだが、途中で体勢を整える。

真っ白な空間から弾きだされ、雪が降り積もる森の中、背後に巨木が迫るのに気付いて両足をそちらに向けて、木に対して横向きに着地。

木がミシイ、と音を立てるので素早く足に力を入れて跳んで着地。背後で木から雪が

ドサツと落ちる音が聞こえた。

「うっ」

腹部を軽く撫でて、息をつく。

「……なんでお前なんだよ」

シャツのネクタイを緩めて、訝しげな表情で雪の上に立つ少女を見やる。

目付きを鋭く尖らせて、「敵」を直視。

その足の紅が濃く、力強く輝いていく。

「咲夜あ……」

人呼んで、完璧で瀟洒な手品師、十六夜咲夜。

視線の先に立つ少女は、その手にナイフを一本持ち、軽く投げ空中で回転させ、手に納める。

静かに呼吸をすると白い息が吐き出された。

「……マフラーするぐらいならミニスカートやめたらどうだ？」

「あら、せっかくのサービスを無下にするなんて」

「俺のためだとは思わなかった」

「レミア様のためだけど、従者のミニスカートに欲情する主様なんて困るわあ」

「そんな光景見たいことねえけどな変態従者」

そう言いながら、肩を回せばゴリゴリと音が鳴る。

「あらずいぶん凝ってるのね、私が揉んであげましょうか？」

「結構だ、手加減知らずのゴリラメイド」

「……じゃあ小悪魔がご所望？」

「そりや嬉しいけど、間違いない」が怖いんで

ついでにパチュリーも怖い、と苦笑して一歩踏み出す。

「なんでレイティさんについたんだよ、紅魔館だって被害こうむってるんだろ……お前の個人的な協力だとしてもレミリアさんが黙認するたあな」

「レミリア様も察してるのよ。異変の顛末なんて、いつもそう」でしょ？」

「まあ違いはない。不変だな」

そう言いながら、遠くから聞こえる音に顔をしかめる。

「で、結局なんでレイティさんの側に？」

「日給が紅魔館よりよかったのよ。有給も取ったらおいしいのなんの」

「お前金に困ってないだろ」

ついでに、俺と違って。と付け加えておく。

「それと、私個人的にやりあいたかったのよね」

ナイフで手遊びをしつつ、笑う。

「アナタと、ね」

「そりや魅力的だな、色気の欠片もねえ物騒なお誘いじやなきやあ」

わざとらしく肩を竦めると、咲夜はクスリと笑った。

「このあともあるし能力も使えないでしょ？ 手加減してあげましょうか……」

「いいや、女に気い使わせるもんでもねえだろ」

八重歯を出して楽しそうに笑う。

「本気で動いて楽しませてやらあ」

「時代錯誤な発想ね。それにこのあとレティとするかもしれないのに、いいの？」

「結構だ。ここで負ける方がナンセンスだろ。リードされるのも嫌いじゃないが……」

と今回に至っては、俺にさせてほしいね」

咲夜がナイフを一本、リヨウに向かって投擲。

「まあ主役として負けるわけにいかわないわよね？」

ナイフを気を纏う手で掴むと、雪の上に放り投げた。

楽しそうに笑みを浮かべる。口を開いて八重歯を出し獣のように深く真つ白な息を

吐く。

「そう、野蛮で粗悪で凶暴で、そんな貴方だからこそやりがいがあるのよ」

独り言のように、咲夜は呟いたが、声は聞こえていない。

その紺碧の双眸を輝かせながら、彼は力強い声で吠える。  
「いつだって、オレの主役はただ一人——チルノだ！」